

器官切除  
Brain of Rats

マイケル・ブラムライン<sup>\*1</sup>著 山形浩生訳<sup>\*2</sup>

2006年9月23日

<sup>\*1</sup> ©1990 Michael Blumlein

<sup>\*2</sup> ©1994



# 目次

ラットの脳	5
器官切除と変異体再生 症例報告	21
ドミノ・マスター	33
溺れてしまえ	49
CWとのインタビュー	57
男の恩寵を捨てて	63
家事	71
華麗なる魅惑	79
暖かさの約束	87
ウェットスーツ	101
そのもの	117
ベストセラー	131
訳者の解説	161



## ラットの脳

ジャンヌ・ダルクが男だったという証拠がある。裁判の記録によれば、彼女は女性特有の弱さを示さなかった。火刑の前の、聖職者たちによる検分では、彼女は女性固有の徴を欠いていたという。彼女の恥部は、子供のようになめらかで無毛だった\*1。

精巢性女性化症という男や雄の症状がある。乳児は男根なしで生まれ、精巢は隠されている。外から見える性器は女性のものだ。こうした男性は、女性として育てられ、思春期には乳房を発達させる。声変わりも起こさない。子宮がないので、月経は起きない。恥毛もない。

これらの人々は、正常な染色体を持っている。一般に性染色体と呼ばれる二十三番目の対は、まちがいになく男性のものだ。XY。一四三一年に魔女と宣告され、十九歳にして火あぶりの刑に処されたジャンヌ・ダルクも、この一人だった公算が強い。

エルキュリン・バルバンは一八三八年にフランスで生まれた。女性として育てられ、子供時代は修道院と寄宿女学校で過ごし、後には女教師になった。その育ちにもかかわらず、彼女は男の性嗜好を有していた。女性の愛人を抱えていたのだが、あるとき左下腹部に激しい痛みを感じ、医師の助言を求めた。医師の検査の結果、彼女の性別は改められ、一八六〇年、彼女は男としての市民権を与えられた。この移行は彼女に恥と不名誉をもたらした。男としての彼女の生はひどいものであり、一八六八年、彼女は自殺した\*2。

わたしには娘がいる。妻はブロンドで、筋肉質だ。われわれは啓蒙の時代に生きている。だがわたしは日々考えこんでしまう。だれがだれで、何が何なのだろう、と。われわれの選択に、わたしはとまどう。特にいまや、わたしは地球上で生まれるすべての子供を、確実に雄にしてしまう手段を手に行っているのだから。

あるとき患者がやってきて、男根の先端から痛みとともに膿が垂れると言う。すでに数日になる。ひんぱんな入浴や、薬局の薬も役にたたなかった。一週間半ほど前、出張中

---

\*1 『H-Y 抗体と性決定の生物学』 スティーブン・ワッチェル、グリーン&ストラットン、1983、p. 170

\*2 同上、p.172

に、かれは売春婦を買っていた。楽しんだか、と尋ねてみた。遠回しないいかたで、かれは男ならそれが自然だ、と答えた。

数日後、家で娘をしっかり寝かしつけてから、かれは妻と性交渉を持った。かれの妻は非常に興奮したという。かれの口調は、部屋のなかにいるのがかれの妻だけだとも言わんばかりだった。

夫婦は二人とも比較的若かった。かれが診察室にいる間、彼女は静かに待合室にすわっていた。まっすぐ正面をみつけ、疲労と無知のために平然としている。ひざの上では、彼女の娘が丸くなって寝ていた。

診察室では男が男根をしごき、クリーム状の物質を大量にしぼりだした。わたしはそれをスライドガラスに塗りつけた。一時間もしないうちに、試験室からかれが淋病だという報告を受けた。この報せを告げると、かれはびっくりして不安そうな様子だった。

「それ、何なんですか？」とかれ。

「感染症です。性病ですよ。性的接触を通じて広がるんです」とわたし。

かれはゆっくりうなずいた。「女房がどこかで羽目はずしすぎたんだ」

「たぶんあなたが売春婦に移されたんですよ」

かれは無表情にわたしを見て、繰り返した。「女房がどこかで羽目はずしすぎたんだ」

よくもまあそんなことが思いつけたものだ、とわたしは驚嘆し、自分のせりふを繰り返した。かれと、かれの妻との両方に治療を勧めた。この状況を妻にどう説明するかは、かれの問題だった。かれのような信念を持った男なら、あまり苦労はしないだろう。

わたしが相反する考えを持っているのは認める。わたしは催眠術や権力関係に魅了されている。ずっと女になりたかった。小さいよく締まった乳房を、ブラジャーでさらに引き締めるのだ。肩まで届く柔らかい髪。光を反射して、片耳にかかるように流すのだ。逆側は、うなじと耳の周りの産毛を除けばむき出しにする。頬はすべすべ。

昔はそういうふうには髪をといた。黒タイツとハイヒールのブーツを履いて、洋服だんすの鏡の前で。わたしの着る綿ピロードのドレスは、小さい女性用のものだったので、始めて着たときには縫い目が裂けてしまった。わたしの腕や肩は大きい。細い袖で締めつけられた。ドレスがきつすぎて、ほとんど身動きできないほどだった。でも、わたしはきれいだった。すごくきれいな存在だった。

男が欲しいと思ったことはない。夢見るのは女。わたしは女で、求めるのも女。抱きながら抱かれるのを夢見る。わたしは力が欲しいし、同時にそれを奪われたい。

あらゆる受胎産物を雌にする手段も持っている、とは述べておくべきだろう。この考え

は、すべてを雄にするのと同じくらい不穏だ。しかし、どちらか片方にならざるを得まい。

性別を決定する遺伝子は、染色体の二十三対目に存在する。その一つはX染色体上にあって、有限の比較的短い核酸連鎖で構成されている。もう一つがY染色体上にもある。この連鎖の大部分はすでに解明されている。いろいろな生物との比較が行なわれた。性決定遺伝子は、スズメバチやカメ、ウシなど、様々な動物にあって驚くほど似ている。最近の発見によれば、インド産の毒ヘビ、縞コブラの雄は、進化の過程で人間とは何百万年も前に別れているのに、人間の雄とほとんど同じ遺伝子連鎖を持っている。

Y遺伝子は他の遺伝子に影響する。ある複雑なタンパク質分子が生産されるが、これは雄のほとんどすべての細胞表面に存在する。このタンパク質があると、細胞やその細胞の環境はある特別な方向に発達する。この方向は何百万年たってもあまり変わっていない。

ラットの脳のある部分は、顕著な性的特徴を示す。細胞密度、樹状形態、神経の構造など、すべて雄と雌では異なっている。二種類の水をラットに選ばせるとしよう。片方は純水、片方はサッカリンで強い甘味を加えてある。雌ラットは必ず後者を選ぶ。雄は前者だ。雌チンパンジーの子供を、子宮内で高濃度の雄ホルモンにさらすと、姉妹たちとは別の遊びパターンを示す。イニシエーションの回数が増え、荒っぽく、威嚇的になる。うなる回数も多い。

人間の脳にも性差は存在するが、この器官が過去五十万年の間に経た目覚ましい進化のため、目立たぬものになっている。人間は会話と洞察、意識と自意識を持っている。芸術や物理学、宗教を持っている。男女ともに同じ意味を共有しているとおぼしき言語で、われわれは言う。男女は異なっているけれど、でも同じだ、と。

性の中の争い、権力を求めての戦いは、思考と機能の間の分裂の反映、人間精神の力と、それが人間の設計の前には無力であることの反映である。性の平等は、何百年にもわたって存在してきた考えだが、何百万年も存在してきた本能によってくつがえされてきた。精神の能力を決定する遺伝子は、急速に発達してきた。性を決定づける遺伝子は、過去永劫にわたってそのままだった。人類は、この不均衡の結果に苦しんでいるのだ。すなわち、アイデンティティの曖昧さ、性間の暴力。だが、これは変えられる。これに終止符を打つことができるのだ。わたしはその手段を握っている。

生まれてこのかた、男が女と争うのを見てきた。女が男と争うのを見てきた。女はあざだらけで頬をはれあがらせて診療所にやってくる。恋人にひっぱたかれ、殴られたのだ。つい先日も、魅力的な中年女性が鼻血を出し、腕に青あざ、頬骨の張り出した目の下に切り傷をつくってやってきた。止めどなくがたがた震えており、発作的に泣き出すので、

何を言おうとしているのか理解不可能だった。彼女の姉が代わりに話さなければならなかった。

彼女は上司に殴られたのだった。かれはファイル・キャビネットに彼女を叩きつけ、床に倒れた彼女を蹴りつけた。彼女がやめたと泣き叫んでも、蹴り続けた。彼女はこの上司の下で十年も働いてきた。こんなことは初めてだという。

またある時は、若い男がやってきた。タンクトップを着て、肩と腕には筋肉が盛り上がっている。片方の二の腕には、女の上半身と頭の刺青。破れた衣装から巨大な乳房がこぼれている絵だ。この絵の下の前腕部には三本の長く深いみみずばれが走り、血を流していた。巨大なネコ科の動物、ヤマネコかジャガーの掻き傷を思わせた。自動車修理中に怪我をしたという。

わたしは傷を洗い、みみずばれの終点に固まった皮膚を切り取った。わたしは再び尋ねた。ガールフレンドなんだ、と言うかれは、いまや腕の傷跡を誇らしげに眺めながら、少し微笑していた。二人は喧嘩をして、彼女が爪でかれを引っ掻いたのだ。かれはこちらに向き直り、真面目な口調で、男っぽく振る舞おうとしつつも少年じみた声で、こう尋ねた。狂犬病の注射をしたほうがいいだろうか、と。

人間の性分化は妊娠五週間目あたりで起きる。この時期以前の胎児は無性だ。もっと正確に言えば、どちらの性にでも（あるいは両方の性に）なれる。五週間目あたりでたった一つ遺伝子が起動し、それが一連の出来事の皮切りとなって、最後には精巣か卵巣を作り上げる。雄の場合、この遺伝子はY染色体と関連している。雌の場合はXだ。XY対は通常雄を生み出す。XXは雌だ。

この二つの遺伝子は同定され、人工的に作り出されている。科学界一般の慎重論をよそに、われわれの研究所はこの研究をさらに推し進めた。最近われわれは、いずれかの遺伝子をどこにでもあるハナカゼウィルスに接合することに成功した。ウィルスそのものは、どこにでもあるウィルスだ。人間の間では非常に伝染性が高い。主に液体成分（くしゃみ、せき等）を通じて広まるが、他の体液（汗、尿、唾液、精液）でも伝わる。われわれはウィルスの毒性を弱め、哺乳類の肉体には無害にした。免疫反応も皆無か、あってもごくわずかで、細胞内に入り休眠状態となる。なんら機能的な障害は引き起こさない。

感染した雌が妊娠すると、ウィルスはすぐに胎盤を経由して、発育中の大意の細胞を冒す。もしウィルスの持っているのがX遺伝子なら、胎児は雌になる。Y染色体を持っていれば、雄になる。ネズミやウサギでは、同腹の仔をすべて雄、あるいはすべて雌にするのに成功している。類人猿での実験も、同様に成功裡に終わっている。人間でも同じ結果を引き起こせると結論するには十分だ。



家族全員が男、あるいは女の家族を考えてみるがいい。あるいは男だけ、女だけの地区、町、国を。なんともシンプルではないか。まさにそうあるべく意図されていたかのよう

に。  
わたしの娘はすばらしい。とりあえず満足がいく程度には、セックスについて知っているはずだ。夜にはしばしば自分で遊ぶ。時には昼間も。もうおむつを着なくていいので上機嫌だ。昔はわたしの男根をよく見ていた。時々触ったりもした。いまは関心がないようだ。

三、四ヵ月に一度くらいだろうか、彼女はズボンをはく。それ以外はスカートかワンピースだ。妻は肉体労働者なので、ズボンしかはかない。彼女はトラックの運転手だ。

娘の学校教師の一人は、婦人教会員で、キリスト教徒の女の子はズボンをはかない、と娘に話した。昨晚、次の子は男だという夢を見た。

混乱しているのは認める。十九世紀のドイツに、だれも名前を覚えていない女がいた。とりあえずカトリンと呼ぼう。彼女は男と出会い、恋に落ちた。男は学者だった。どうやらその恋は実ったらしい。男は学問のためアテネにでかけ、カトリンもついていった。いっしょに暮らせるように、男に変装して。

アテネで男が死んだ。カトリンはそのまま残った。彼女は男からいろいろ学び、自分もかなりの学者になるに到った。さらに学問を続け、やがて名を為した。男の変装は続いていた。

しばらくして彼女はローマに呼ばれ、教皇レオ四世のもとで学び、教えることになった。世評は高まり、八五五年にレオが死ぬと、カトリンが教皇に選ばれた。

彼女の御世は二年半後、慌ただしく終わった。ローマの市内を行進中に、緩やかな法衣でからだの線を隠していたカトリンは、地面にうずくまり、何度か叫び声をあげて、赤ん坊を産み落とした。その直後、彼女は地下牢に放りこまれ、後に北の辺境の地に追放となった。それ以降、堅信の直前に、教皇はすべて信頼できる聖職者二人の検査を受けねばならない。集った信徒たちの前で、二人は教皇のローブの下を探る。

「Testiculos habet ( 精巣あり )」と二人が宣言すると、信徒たちはホッとため息をもらす。

「Deo gratias」と一同は唱えかえす。「Deo gratias」\*<sup>3</sup>

---

\*<sup>3</sup> 「性発達の遺伝メカニズム」(H・L・ヴァレット、I・H・ポーター編、ニューヨーク、アカデミック・プレス、1979) 所収のH・ゴードン論文、p.19

先日、資金集めの昼食会に行った。地域の女性作家たちを讃える会だ。五百人の参加者のうち、わたしは一握りほどの男性の一人だった。わたしは友人の招きで出席した。その友人が好きだったし、そこで讃えられている作家たちも好きだったからだ。スポーツ・コートとスラックスを着て、四日かかってのばした髭をきれいに切りそろえて行った。ドアのところで長いこと並ばせられた。まわりは女性ばかり。わたしより背の高い女性もいたが、ほとんどよりはわたしのほうが高かった。みんな着飾っている。ほとんどが宝石を身につけ、化粧をしている。わたしはその群集の中で居心地が悪かった。ちょっとではあったけれど、態度を弱気にするには十分だった。わたしはけんかの用意ができていた。

態度のでかい女が前に割り込んだが、わたしはなにも言わなかった。受付のデスクで、わたしは穏やかに落ち着いて話した。受付の女性はにっこりして、親切なことを言ってくれた。少し機嫌を直すと、わたしは自分の札をとって中に入った。

広くて華やかな部屋で、白い布のかかったテーブルでいっぱいだった。昼食の仕出しは同じビル内の料理学校だった。一階の、その大きな部屋の隣に厨房があった。別の厨房が中二階にあって、それは部屋の正面のステージの真上にあっていた。こちらの厨房はガラス張りになっていて、昼食会の間も授業が行なわれていた。白い上着の生徒たちと、白い背の高いコック帽をかぶったシェフがガラスの向こうであちこち動き回っていた。唇が動いているのは見えたが、下からでは何の音も聞こえなかった。

昼食を半分終えたところで催しが始まった。主催者が、この昼食会からの収益を受け取る財団について説明した。女性の地位向上を、女性の権利獲得を目指す財団だった。わたしはつい物思いにふけた。

わたしは永いことフェミニストだった。前の妻が魔女集会を開いたとき、わたしは隣の部屋にいた。ヴァレリー・ソラナスの「The SCUM 宣言」の出版を彼女と祝った。魔女団は、ヴァレリーのことばを使ってスライド・ショーをつくった。それは東海岸一帯で上演された。わたしは男の声を提供して彼女たちを手伝った。その男のせりふはこういうものだ。俺はクソだ。卑しい惨めなクソなんだ。

娘は四歳。すばらしい子供だ。彼女には選択の余地を与えてやりたい。自分自身の力を感じさせてやりたい。女だからという理由で彼女に閉ざされた扉は、叩き破ってやる。

最初の受賞者が演台にきて、金持ちの女旅行者と、貧しいメキシコ人の女中との結びつきについての小説を朗読した。二段落ほど読み進んだところで、物音が彼女を中断させた。鈍い、叩くような音で、三十秒ほど続いては止まり、また始まる。ステージの上の、ガラス張りの教習用厨房から聞こえてくるのだ。白い帽子のシェフが、下での行事には無頓着に、肉を叩いているのだ。かれにはなにも聞こえないらしい。

女性は読み続けようとしたが、できなかった。一言二言、ばかげたコメントを観客に投

げた。みんな少し不安になって、何か手が打たれるのをまちながら、あちことでざわめきがあがった。わたしの背後で、女が聞こえよがしにささやいた。男性至上主義者め。

意外な気はしなかった。それどころか実は、最初からだれかがこの手のことを言うのを待っていたのだ。この台詞には腹がたった。あの男は無実だ。あの女は馬鹿だ。決まり文句しか言えない口ポットだ。あの女を締め上げ、締め上げて、償いをさせてやりたかった。

友人がいる。細面で、いつも剃り残したような頬をしている。目はキョロキョロしている。いっしょにいと、いつもどこかよそを見ているよな感じだ。語り口は軽妙で、ことばの選び方もかなり特徴がある。それなりに魅力的だ。

わたしはかれが好きだが、同じ理由でかれが嫌いでもある。日和見的だし、独断的だ。賢いが、それは単に物事に無関心だからそういう態度が取れるだけのこと。そしてやたらに競争したがる。自分の挑戦に答える者に価値をおく。

わたしはかれが略奪者で、つけいる隙を探している人物だと思う。これを聞いたら、かれは驚くだろうし、ひょっとして困惑するかもしれない。というのも、かれは自己陶醉者という無知に陥っているからだ。かれが自分を笑いものにするとき、かれはそうできる自分を誇らしく思っているのだ。

女性に対するかれの態度は奇妙なものだ。自分と知的に張り合える女は気にいらぬ。張り合えない女は馬鹿にする。にもかかわらず、女は好きだ。女を女にするのが好きなのだ。特に好きなのが、説得して女に仕立てなくてはならない女。時々かれとテニスをする。ショットがまずいとわたしは謝る。かれと張り合えないときも謝る。かれの機嫌を損ねたくないの、試合のたびに負ける。勝つのが怖い。かれが怒って、暴力的になるかもしれない。それが怖い。かれはカッとなるかもしれない。

勝ちたい。すごく勝ちたい。わたしの勝利の力をもって、あいつをネットに叩きつけ、コンクリート自体に叩きつけ、コンクリートの下まで叩きこんでやりたい。

困惑しているのは認める。男は攻撃的で、優しく、強く、情け深く、敵愾心に満ち、むら気で、忠誠心が強く、有能で、おもしろく、寛大で、何かを追い求め、自分勝手に、力強く、自爆的で、引っ込み思案で、恥知らずで、頑固で、弱腰で、二枚舌で、誠実で、正直で、率直で、だまされにくく、虚飾に満ち、か弱く、自尊心が強い。本能を制御すべく苦闘する男は、己れの男性性によって虐げられ、同時に祝福されている。

P博士は生物学者であり、また夫にして父親でもある。かれは、自分の行動のどこまでを、意志とは無関係な化学物質の放出や、受胎からわずか六十日後に「雄」と決定づけられた神経系を走る電流に帰すべきで、どこまでを自分自身のコントロール下にあると考え

るべきなのか、ずっと迷い続けている。自分の衝動を抑えすぎて、己れの科学者や男性としての有能さを薄めるようなことはしたくなかったが、しかし時折かいま見る、別の生のありかたは、黙殺するにはあまりに強力だった。自分の妻と娘との結びつきを見ていると、時に涙が出てくるほどだった。妻が子供を腹の中に九ヵ月も抱え、そしてそれを股間の小さな裂け目から押し出すという考えは、時に催眠術下の命令のように、かれの脳裏を離れないのだった。それは何か甘く、純粹で、それを持たない自分は枯れてしまうようなものなのではないか、と\*4。

別の友人に、男であるというのはどういうことだ、と尋ねた。かれは不安そうに笑って、その質問は難しすぎる、と答えた。わかった、それなら男に生まれて何が一番よかった？ 口ごもるかれを、さらに追及した。男根だな、とかれは言った。わたしはうなずいた。男根をしゃぶられたり、暖かい場所に挿入したり。射精したり。かれは微笑んで、至福に満ちた表情を見せた。ああ、イクのはホントにいいな。

後でかれはこう言った。男の権威が好きだ、微妙な緊張感が。受ける尊敬が好きだ。男は、男だってだけで、それなりの尊敬を受ける。勃起すると、本当に硬くなると、力強い気分だ。いつもは隠されている力をまとう。壁が融けて、できないことなんかないような気がするんだ。

(そんな世界もいいな、とわたしは考える。男だけの世界。なんて素晴らしい！ それならYウィルスだ。Yウィルスがいい。)

結婚のさなか、わたしは最初の妻と山にのぼってすわっていた。妻は峠へとくねって続く、未舗装道路の向こう側にすわり、わたしはその反対側にすわっていた。山肌には大きな花崗岩のかたまりが散らばり、その周りにポプラの林や松の木がポツポツと立っていた。空は深い青、深呼吸したくなる青だった。空気は新鮮。

妻はわたしに石を投げ、議論していた。石はかなり大きく、片手でやっと握れるくらい大きさのもあった。わたしの近くに落ちて、路面に土ぼこりをあげた。彼女はなぜわたしたちが結婚すべきかを話していた。

「そうすればもっと尊敬される。いったん結婚すれば、離婚できるでしょう。離婚した女は尊敬されるわ」

わたしは石を投げるのをやめろと言った。彼女は、自分の思い通りにならないので怒っていた。わたしが反抗的なので怒っていた。船倉を掃除し、垢や汚れをはぎとるといふ男

\*4 「雄の将来は？ 機能的分裂アイデンティティの研究」I・E・ルドルフ他、フィラデルフィア、オヴァ・プレス、1982

の仕事をしているのに、女扱いされるので怒っていた。彼女は男のように扱われ、男のように下品でタフでありたかったのだ。バーでタバコを吸い、酔っ払って、ビリヤードをしたかったのだ。バーで男のように振舞いたかったのだ。傍若無人で、なめられずにいたかったのだ。その一方で、シャープな服装をしたかった。セクシーで、タイトなブラウスとパンツを着たかった。男に言い寄られ、少しじゃれつかれたかった。そういう力が欲しかったのだ。

「結婚経験のある女だと、向こうもこっちがネンネじゃないのを知ってるわ。まったくの無知じゃないって。一人始末してるんだから、二人目だって始末できるはずだって。それなりの敬意を示してくれるわ」

彼女は石を投げるのをやめてこっちに来た。わたしは少しおびえていた。彼女は、愛してるなら、自分と結婚しろという。そうすれば離婚できるから、と。彼女は優しく固執した。わたしは彼女を愛していたし、敬意を払われることの重要性もわかっていた。でも、頭がごちゃごちゃだった。決心がつかなかった。

彼女はまた腹をたてた。「ほーら、結局最後に物事を決めるのは、あなたなのよね。なんでもあなたが仕切るのよね」

わたしは答えた。「ぼくはクソだ。卑しい惨めなクソなんだ」

先日、女性がやってきた。わたしの名前を知っていて、わたしの研究の主旨も知っていたが、細かい部分までは知らなかった。彼女の同類、またはわたしの同類が、一瞬にして地上から一掃されてしまうことは知らなかった。知らなかったが、特に問題ではないようだった。

服装はシンプルだった。顔も平凡だった。話し方も気さくだったが、ある種の感情のしこりは隠しきれていなかった（隠そうともしていなかったが）。女性である彼女は、自分の将来に関わる決定を下だすのが男では信用できない、という。自分でも驚いたことに、わたしは彼女に向かって、自分は実は男ではないのだと告げた。

「子供もいます。娘が赤ん坊だった時は、胸を吸わせましたよ」

「胸なんかないじゃないですか」女性は辛辣に言った。

「ありますとも、乳が出ないだけで」わたしはシャツのボタンを外し、左右に開いた。乳首をつまんでみせる。「娘の方も、何も出てこないの、吸い続けはしませんでした」

彼女は表情を変えなかった。「あなたは男です。外見も男です。歩いてるのを見たけれど、歩き方も男でした」

「男の歩き方って？」

「言うまでもないでしょう？」

「わたしは礼儀正しいですよ。混んでいる時には脇に寄って、みんなに道を譲るし」

「礼儀正しさは、強者が弱者にに対して示す態度でしょう。自分の優位性を確認しているだけだわ」

「わたしはか弱い時もあるし、すごく引っ込み思案な時もありますよ」

彼女は憤りの表情を浮かべた。わたしが子供で、彼女の堪忍袋の尾を切らせたかのように。「あなたは男だし、男は追放された者よ。自分自身の作り出した世界から締め出されてるのよ。その世界は、別の種のからだの上に築いたものだけれどね。わたしたち女のからだの上によ」

議論する気はなかった。ある意味で彼女は正しい。男は世界を手なずけたのだ。

「男は自分がてっぺんにすわってると思ってるのよ」そういう彼女の声は、さっきほど耳障りな調子ではなかった。「単に比較のしかたでそう見えるだけよ。下にだれもいないからって。下に自分たちしか見えないからって」

「わたしは下を見たりしない」

「男は全然見えてないのよ。見れば、からだの一部が欠けているのが見えるでしょうに」

「どういう意味？」

彼女は静かにわたしを見つめた。「そろそろ女に機会を与えてもいい頃だと思わない？」

「それなら聞かせてあげよう。わたしはいつも女になりたかった。機会があれば女装したもんだ。自分のアパートに女服を置くのはこわかったから、隣の住人の福を借りた。背の高い女性で、夜の勤めだったんだ。彼女の部屋の鍵を手に入れて、夜に仕事が終わると、彼女が帰ってくる前に部屋に忍びこんで、引き出しを漁ったよ。サイズが大きかったから、ほとんどの服は着られた。ひざまであるソフト・レザーのブーツがあって、わたしの一番のお気に入りだった」

「なんでそんな話を？」彼女はうさんくさげに尋ねた。

「聞いて欲しいからだ。どうしてもわかってほしいんだ」

「ねえ、女になりたい男なんていないわ。本気でそう思ってる男なんて。心の底ではちがうはずよ」

「男は美しい」とわたしは拳を握り締めた「男の肉体は海のように力強く、パワーがある。筋肉はふくれては縮み、波のようにかみ合うんだ。

男ほど純粋なものはない。少年の顔は何にも勝る。なめらかで無邪気な頬っぺた。瞳に輝く将来への希望。

わたしは男が好きだ。目や想像力で、硬い部分、柔らかい部分をなぞるのが好きだ。はだかの男を見るのが好きだけれど、それで興奮するわけじゃない。別に男と寝たいわけじゃないんだ。

でもある晩、寝たことはある。ご近所のアパートからの帰りだった。黒タイツ、ヒールの高いブーツと、短いベルト付きのドレスを着てきれいになった帰り。ブラジャーのカップには靴下をつめて、すごいグラマーになってね。終わってから、全部脱いで、たたんで、きちんと引き出しに戻した。自分のズボンとシャツを着て、革ジャンをはおり、そこを出た。その夜は妻と過ごすつもりだった。

通りで興奮してきた。まだ緊張が残っていて、それを放出したかった。歩きつつ、女を漁る男の気分と、股間に何かを突っ込みたい女の気分が、交互にやってきた。たぶん後者の気分の方が強かったと思う。何かされたい気分だったから。他人に支配されたかったんだ。

わたしの家と妻の家を隔てる丘の、向こう側の坂を下り始めたときだった。夜遅くで、通りは暗かった。車が一台、キャデラックだったけど、静かに坂を下ってきた。隣にくと、スピードを落とした。ドライバーが近寄れと合図して、わたしは身を引いた。心が踊った。男が動作を繰り返すと、わたしはつばをのみこんで近寄った。

相手はたくましい黒人で、酒のにおいをさせていた。わたしは男と離れて、ドアに寄ってすわり、フロントガラス越しに前を見つめた。どこに住んで、ときくから、どこにも、と答えた。男は花を鳴らし、急な坂をいくつか登った。その大型車をアパート群の地下駐車場に入れた。『女友達んとこだ』と男は言って、わたしは後について階段を何階分か登り、廊下を下ってアパートの入り口についた。わたしは興奮し、おびえ、意志を固めていた。その間、男は一度も触れてこなかったと思う。

ドアを開けて中に入った。居間は何もなくて、床にレコードプレーヤーと、レコードが散らばっているだけだった。レコードがかかっている、三分の二ほどまで進んでいたの、だれか他に人がいるんだと思った。でも、だれもいなかった。

男は別室にいて、たぶん台所だったんだろう、酒を注いできた。親切じゃなかったけれど、意地悪でもなかった。わたしをつれてきて、落ち着かなかったんだろう。でもそれ以外は、まるでわたしが自分の好きなときに好きなように相手をすればいい置き物か何かみたいに振る舞った。わたしも、自分がちがった扱いを受けるべきだとは思わなかった。

男はわたしをベッドルームにつれこんで、ベッドに寝かせた。それは最初だけ。後は床しか覚えていない。男はシャツとズボンを脱いで、わたしのズボンを引きずり下ろした。そして正面からのしかかってきた。厚くて重い胸板をしてた。わたしが脚を巻きつけてやると、身をこすりつけてきた。唇はぶあつくて、思いっきりキスしてきて舌を入れてきた。においがきつかった。クスリと酒まみれ。髭が頬にあたって痛かった。感触はよかったけれど、こすれて痛いのはいやだった。そいつは独り言を言いだしたよ。

『プールの門だ。入れてくれよお、プールの門だってばあ』

これを何度もつぶやいた。酔っ払ったみたいに、どんどん興奮しながら。わたしをひっくり返して、ひざをつかせて尻を宙にあげさせた。わたしをつかんで、挿入してきた。乾ききってたから、痛かった。でも、痛くてもそのまま続けさせたよ。どんな感じが知りたかったからね。それに相手をがっかりさせたくなかった。

すでにそれ以前、その痛みの前に、わたしはもう醒めていた。興奮もしていなかった。あんまりね。相手が力強いのはよかったんだ。支配されたかったんだから。でも、向こうがどんどん興奮してくるにつれて、自分が何かだっている感じがしなくなってきたんだ。自分は男だけど、女でも、犬でも、あるいは毛皮張りの管でもまるで同じ。何にも感じなかった。からだから抜け出して、どんどん冷めて感じ。男を絶頂に導いたときも、何の力も感じなかった。それがわたしじゃなかったんなら、他の何だったのか……」

そこで止めた。女性はしばらく黙っていた。

「それで何が言いたいのか？」

「男がわたしを求めてなかったと思うのは間違いだ。というか、あいつのしたいことをさせるだれかを、何もきかずにさせてやるだれかを求めてなかったと思うのは、間違いなんだ」

「あなたに痛い思いをさせたんでしょう」

「ある意味で、憐れなやつだと思う。でも一方で、その熱意には感心してしまう」

彼女は腹をたてていた。「それであなた、女ってのがどんなもんだかわかるって思うわけ？ その一件でわかったって？」

「わたしは何もわかっちゃいない。ただ、考えるたびに、男ってのがどういうものかより、女ってのがどういうものかの方が、よくわかってるように思えるだけ」

男根だな、と友人は言った。それが最高の部分だ、と。これを聞くと、昔の患者のことを思い出す。糖尿病の中年男性だった。一日二回、インシュリンを注射し、食事に気を使いながらも、この病気の影響に苦しんでいた。一番かれにとってつらかったのが、性生活を失ったことだった。

「立たないんですよ。立っても一、二分だけ」

射精するか、と尋ねた。糖尿病は、特定の神経だけを破壊するのだ。

「時には。でも、何か違うんです。悪くはないし、気持ちいいし、でも何か違うんだ。男なら硬くなんなきゃ」

わたしはうなずいたが、この人は感謝しなきゃ、と考えていた。もっとひどくなっていたかもしれないんだから。「でも射精はできるんでしょう。それすらできない人もいるん



ですよ」

「ねえ先生、なんか注射はないかね。立つようにさ」

わたしはないと答えた。注射の問題じゃない、糖尿病の問題なんだ、と。病気をもっと頑張って抑さえようと約束しあって、成功したのだが、勃起しないのは相変わらずだった。お置くの人とはちがって、気は落とさなかったし、腹もたてないでくれた。事實はありのままに受け入れ、率直で、時に冗談も言った。かれの妻は、自分がこの状態のほうが気に入っているのだ、とも話してくれた。

「他の女に手を出さないからってんだ。別にこっちはできないわけじゃないんだけどね……女たちのほうは、おれがこんなでも気にしないみたいなんだ。それどころか、こっちのほうがいいみたいなんだ。ただ、おれがしたくないんで、男になった気がしないんだよ」

「つまり結婚生活は改善された、と？」

男は肩をすくめた。「おかたい女だからね。もともとセックスなしのほうがいいって女だ。ところでホルモンでも射ってもらえんかね。これ以上悪くもならないでしょうが」

男の楽天性がこっちにも移ったようで、わたしはテストステロンを注射してやった。そして数週間後にもう一本。何も変わらなかった。その次には、新聞の切り抜きを持ってきた。

その記事をこちらに渡してこう言う。「なんか手術があるって聞いたんだがね、チンポコに何か入れて、硬くするんだって。金属の棒が何かだ。それと、何かチューブも入れられるんだって。ポンプ付きで、ことに及ぶ時にはふくらませて、終わったら抜けばいい。先生、どう思う？」

この種の植え込みについては多少知っていた。棒のほうは問題ないけれど、ただ男根はいつも硬いままになる。邪魔っけだし、曲がり次第では痛くなる。空気を入れるチューブのほうは、信頼性が低い。時々破裂したり、しばませたいときもしばまなかったりする。わたしはこれを告げた。

「まあ精々試して見ますわ。これ以上悪くもならないでしょうが」

次に会ったのは、四、五ヵ月後のことだった。待ちきれない様子でわたしを診察室に押し込み、わたしがドアを閉めると同時にズボンを下ろした。下着のスリットから、男根が指のようにわたしをさしていた。かれは顔を輝かせた。そして誇らしげに言った。

「先生、いまじゃ何時間でもやり続けられるんだぜ。六時間、八時間、お望みなら一晩中でも。それと、こいつを見てくれ……」かれが男根を右に曲げると、曲がったまま、脚に触れそうになった。こんどは左。そして直立。そして下。「どっち向きでも、好きなだけ。女どもはメロメロだぜ」

わたしはすわって感心した。「すごいじゃないですか」

「あいつらを見せてやりたいよ」とかれは、それを疑問符の形に曲げて、ズボンにしまった。「もう夢中になっちゃってね。おれ、子供みたいな気分だよ。女の方がついてこれないんだから」

わたしはかれを思い描いた。六十二歳で、幸せに勃起して、古いマットレスの上で前後にピストン運動をし、時々止めては、その夜の相手に、どっち向きがいいかをきいているかれの姿を。右曲がりか左曲がりか、まっすぐか曲線か、上か下か？ いまのかれは男で、女が大好きだった。わたしはかれの妻のことを尋ねた。

「離婚したがってますよ。おれ、いまじゃ女が多すぎるもんでね」

問題は、わたしとインドの縞コブラとにどれだけ共通点があるかではない、と思う。向こうはあの古い国のモンスーンで増水した川辺の泥を這っていればいいのだし、わたしはこうしてカーディガン姿で机に向かい、考えこんでいる。両者は核酸連鎖の一部を共有している。われわれを雄にする、あのY染色体上の遺伝子だ。ヘビは攻撃的だ。わたしは誠実で頼れる。ヘビは縄張りを守る。わたしは忠実な家族思いだ。ヘビは雌ヘビたちを支配する。わたしは強く、頼れる、よき愛人だ。

本当の問題は、わたしが妻とどう違っているか、ということだ。わたしたちはベッドに横たわり、お互いに相手になろうとしているかのように、長いからだを押しつけあう。時に愛を、多くはいろいろな問題について語り合う。彼女は言う、あたしの仕事だけど、すごくきつくて、くたくたでからだ中が痛い、と。そしてわたしは考える、そりゃ気の毒だけど、すまないとは思うけど、でもだれかが稼がなきゃならないし、頑張っ、元気を出せ、と。わたしは言う、仕事に自信がない、よき父親でよき夫になれないんじゃないかと心配だ、と。そして妻は言う、大丈夫よ、愛してるわ、と。それを聞いてわたしは白ける。まるで妻が、空が青いわ、とでも言ったかのように。彼女に頭を撫でられると、畏にはまったような気がする。彼女の頭を撫でると、向こうはネコのようにのどを鳴らす。何なんだろう、とわたしは、不安でおびえて尋ねる。愛よ、と妻。キスして。

わたしはまだ困惑している。ネズミの脳ほど単純ではない。爪や、牙や、死体の散らばる戦場ほどには。わたしは所有し、所有されたい。

ある夜、妻がわたしに言った。「男と女って、全然別の生物種だと思うな」

夜遅くだった。わたしたちは寄りそってはいたけれど、触れ合ってはいなかった。わたしは言う。「いずれそうなるかもね。でもまだだ」

「そのほうがいいのかもね。そうすれば世の中もっと単純にはなるでしょう」彼女はあ

---

くびをした。

わたしは妻の手を取って握り締めた。「だからこそ、こうして一生懸命お互いに抱き締め合うんだよ」

彼女はわたしに身を寄せた。「あたしたちはそれが好きだから」

わたしはため息をついた。「だってみんな知っているんだもん、いつか抱き合いたいと思わない日がくるってことを」



## 器官切除と変異体再生 症例報告

木曜日午前七時、レーガン氏は車輪担架に乗せられてスイング・ドアを通り、第六号手術室へと廊下を運ばれていった。担架に横たわり、目は天井を見据えたままだ。ショック状態の人間特有のうつろな視線を漂わせている。かれが麻酔剤を与えられているのではないかと不安だったが、付き添い看護婦がそれは杞憂だと保証してくれた。その途中で、レーガン氏がこちらに目をむけた。瞳孔は広く、オリーブのように黒く、苦痛と恐怖による拡大が認められた。同情はしたが、それ以上にかれが不注意で麻酔をかけられなかったのでホッとしていた。そんなことになったら手術は何日も遅れてしまっただろう。

まだ手を洗っていなかったが、かれの肩に手をやってその勇気を讃えた。薄いシーツの下でかれの肌はこわばっている。われわれの引き起こした寒気を、電気毛布が無為に暖めようとしている。かれは震えていた。自然なことだが、いずれは止まるだろう　止まらなくてはならない　もし手術を進めるのであれば。わたしは手をどけて身をかがめ、担架の横からでしゃばりな臓器のようにぶら下がる、ビニール袋を調べた。薄い尿が一リットル近く入っている。腎臓が正常に機能しているのがわかる。そこを離れて洗浄室に入ったわたしは、再度われわれの計画を頭に描いた。両腕と両脚のそれぞれに一チームずつ、そして胴と内臓にも一チームの合計三チームが執刀。わたしは胴・内臓チームを率いる。このプロジェクトの主要責任者はわたしだから当然のことだ。われわれは麻酔を避けることにしていた。耐えがたい苦痛が気力を増すのは周知のことだったからだ。苦痛にさらされた臓器の生存率が高いことを明白に示す優れた研究がいくつか存在するし、わたし自身も数多くの論文でこれについて述べている。加えて、未だに麻酔薬の大部分を構成する塩素化炭化水素は、微量でも組織に対する毒性が高い。通常の術後の回復過程では、こうした薬物は急速に排出されるが、臓器培養という現象の微妙さは、こうした薬物の使用を許さなかった。患者には、東洋式の麻酔法の使川が形式的に打診されたが、かれは反対した。レーガン氏はアメリカ的なものに対して頑固なまでの信頼を抱いているのだ。

わたしは流しの上にタイマーを置いて洗いにとりかかった。窓越しに、スタッフが最終的な準備を行っているのが見えた。一方の壁沿いに巨大なテーブルが置かれ、その上には手術中にわれわれが使用する器具をのせたトレーが無数に置かれている。この種の手術と

しては、当センターのだれ一人として携わったことのない規模のものであるため、必要とされるもの見積りも多めにしてあったのだ。このような状況では、少なすぎるより多すぎる方がいいので、わたしはそれぞれのパックを倍量用意させておき、それが手の届くところに置かれるよう注文しておいた。すでに膨大な量の器具が袋から出されて並べられ、隣接する大分野ごとにわけられてあった。泌尿器系は肛門系と大腸系の隣に置かれ、肝臓系と脾臓系と胃系は一まとめにされていた。胸部は別のグループであり、整形系と血管系は手脚を分担するチームそれぞれのために、ふたつのグループにわけてあった。一般的な器具 止血鉗子、鉗子、ハサミなど は三セット用意され、手術台近くの小さめのトレイに置かれていた。その上に身をかがめ、器具を使用順に並べ替えているのは、フードとマスクと手袋をつけた手術室付き看護婦たち。その背後と手術室一帯には、消毒されていない人員たちが徘徊している。チームの手足として機能する看護婦や技術者たちだ。

十数回にわたってわたしは爪の甘皮をこすり、爪と指の間をこすり、それから前腕の両側をひじまでこすった。レーガン氏はシーツをとられ、その腹部の表面 首から足までは消毒剤の黄色い泡でおおわれていた。陰部と胸と腋窩はすでに剃ってあった。もっとも、そもそもがそんなに毛髪過多の人物ではなかったのだが。その時、かれのからだを照りつける人工照明は、ある種の機能不全の胆嚢で見かけたような黄疸状の色合いを思わせた。わたしは自分の手を見た。ツヤが増したような気がしたので、数回すすいでから手術区画に戻った。

看護婦がタオルを持ってきてくれた。わたしはその端をつかみ、機械的に指を一本ずつふいていった。看護婦は手袋を持って戻ってくると、魚の口を広げるように、入り口を思いつきり開けた。中をのぞきこめとでも言うように。指を奥までさしこむと、彼女はそれをパチンと腕にはめてくれる。反対の手でも同じことが繰り返され、わたしは礼を言っさざると最終的な準備が整うのを待った。皮膚からセッケンが除かれ、いまやレーガン氏はさまざまなサイズのリネンでおおわれていた。うち二枚は首の midpoint でついたてを形成している。その向こうには、かれの頭とともに、麻酔医が二人すわっていた。今回は麻酔は使用しないので、かれらの役目は呼吸と心血管状態のモニターにある。挿管して、血中の二酸化炭素と酸素の量を定期的に測定するのだ。

わたしがうなずくと、二人は内挿管を入れた。これを通して塩化サクシニルコリン規定麻痺量を滴下する。一時はこの薬を使わずに執刀することも考えた。薬効は、微小ではあっても切除された組織に影響を及ぼすだろうから。しかし、最終的には使用することにした。手術中に患者を固定するとき、痛みによる麻痺作用だけに頼るのは危険というのが理由である。後からふりがえってみても、これは正しかった。手術中に間があいて、そこで患者が身動きしようとしたら、何時間もの慎重な仕事が台無しになったかもしれない。

ここは昔ながらでいこう、というのが分別のお告げだった。

麻痺を開始してから、主任麻酔医のゲバラ医師はすばやく気管内チューブを挿入した。筋肉の抵抗がほとんどまったくなかったため、挿入は容易だった。呼吸器のスイッチが入り、人工呼吸が開始された。手術中ずっと意識を保ら続けることになっているレーガン氏に、わたしは手術の開始を告げた。手術台に寄ってからだを調べる。胸はむきだしになっていた。同じく脚もむきだしで、ング医師とコーチース医師が執刀を開始しようと構えている。

「メス」と言うと、器具がパシッと手渡される。持ちかえる。「鉗子」

わたしはからだの上にかがみこみ、胸骨から恥骨結合まで頭の中で線をひいた。わたしたちは何時間もかけて手術のすすめかたを検討してきた。この切開は特殊なものであり、これまでほとんどと言っていいほど行われていないのだ。このスケールの手術ともなれば、有効な組織を最大限生かすためにも、あらゆる細部にいたる正確さが必要とされる。わたしはメスをあげ、しっかりと落ちついた手で最初のメスを入れた。

レーガン氏は部分的に冷却されていた。皮膚の毛細血管を収縮させ、出血により失われる血の量を減らすためだ。もちろん、切開や凝血に電気メスを使うわけにはいかなかったし、出血した管を縛るわけにもいかなかった。いずれも組織にダメージを与えるからだ。合理的な判断によって、わたしたちは皮膚の主要血管組織を避けるような平面に沿った切開を行うことにした。より硬い表層部分を切断するため、手に力をこめつつ最初のメス筋をなぞりながら、傷のふちに現れた血の少なさにわたしは勇気づけられた。皮膚、死亡、筋肉の層をめくるデリケートな鉗子を大きいものに換え、切開を続けると、肋軟骨の接合部と胸部の白線質に達した。横方向に二筋メスを入れる。一本は恥骨から峯径部の靭帯に沿って、上前腸骨棘の近くまで、もう一本は胸骨切痕から鎖骨の内側境界に沿って、腋窩の腹側の縁にまで達する。血の量が増えてきたので、一時的にわたしがピコ医師の止血作業を手伝った。しかし、出血をどこまで制御できるかは、わたしが次の段階を実行するスピードにかかっている。これを念頭に、わたしは赤い液体の拭き取り作業をかれに任せて胸腔に戻った。

異常肥大胸筋は千に一つくらいの割合で発生する。ピリングスは、最近こうした症例を十あまり調べて、第十三番染色体の短肢に見られる共鳴異常の状態と結びつけ、異常肥大した胸骨と遺伝的に優生な無毛の肌、軽微に関連する脳の異常との相関を主張している。ピリングスはこうした現象を研究したが、わたしは研究したわけではない。レーガン氏の胸骨は、レブシュ・ナイフで切断できなかった。わたしの全経験の中でまだ二度目のことだ。わたしは骨の切断器を求め、ピコ医師の助けを借りて、やっと骨格を切断できた。この苦勞で額からは汗が滴り、巡回ナースがそれをタオルでふきとってくれた。

腕の長いレトラクターを使用し、切開部を開くと、微かに抵抗が感じられた。ゲバラ医師に筋肉弛緩剤の投与を増やすよう求めた。この手術のもっとも重要な部分にさしかかっていたからだ。

「瞳孔が拡大したまま動きません」とゲバラ医師。

心臓が見えたが、ふつうに鼓動している。「ガスは？」

「O<sub>2</sub> 85、CO<sub>2</sub> 38、PH7・37です」

「よし。それならただの苦悶だ。死んだわけじゃない」ゲバラ医師はついたての上でうなずき、レーガン氏に励ましのことばをささやきかけた。一方、わたしはかれの胸の中を見た。そこでわたしは手を止めた。あの輝く器官を見るたびにわたしは手を止める。官能的に、神々しく脈打ってはうごめいている。これを手荒に扱わぬことをわたしは再度誓った。鉗子で心膜を持ち上げ、剪刀ハサミで穴をあける。なめらかにむけた。男の子の陰茎の先端を覆うデリケートな皮膚を思わせた。

即座にわたしは下大静脈を結び、下行大静脈を気管支動脈のすぐ遠位でクランプした。バイパス・システムは使わないことにしていた。これによって手間も時間もかかるこまごました縫合を省くことができた。そのかわりにわれわれが採用したのは、胸腔から遠位の血管を完全に封じる方法だった。すべての器官や骨格はどのみちすべて除去されるのだから、心臓から下の血液循環を保存しても意味はないからである。わたしは下肢の切除作業を待つ同僚に、作業開始の合図をした。

わたしは右鎖骨下動脈と血管をえりわけ、結び、左でも同様にした。内胸動脈を大動脈弓の腹面に吻合し、動脈の血流を胸壁に供給した。これはある程度もたせることにしてある。わたしは下行大動脈に戻り、3-0 エチロンによって内腔閉塞のダメ押しをするとともに、縫合を二重に行った。ゆっくりとクランプをはずすと、漏れはなく、わたしはホッと息をついた。要の段階を完了したのだ。胸と脳の血液循環を、からだのほかの部分の循環から切り離し、しかも患者の状態は平静を保ったのである。

ここでわれわれについて一言述べておきたい。手術チームのみならず、技術面および管理運営組織も含めてのことである。ごく初期にわれわれが合意を見たのは、この切除はたゆまずして行わなくてはならない、ということだった。つまり、あらゆる場合に、慎重さを減らすよりは増す方向に考えるべきである、ということだ。手術の時点で、これから採取しようとしている器官の多くについては、移植以外にはなんら利用法がなかった。結腸、脾臓、脈管構造などは、当時も、今も、なんら活用方法を見いだすに至っていない。しかし、将来的には必ずや利用法が見いだされるだろうし、前述のような基本方針にしたがってわれわれは、一見まったく役にたたないような部分まで切除することにした。即座に利用できない器官は、われわれの臓器バンクに保存され、すばらしいアイデアによって



再生タンクに送られるまで待つものとする。

手術があれほど長時間に及んだのは、これが唯一の理由だった。レーガン氏が絶え間ない激痛を感じていなかったと言えは嘘になる。皮膚を切り身にされ、胸を割られ、手足をこまぎれにされたあげくに切断されれば、誰だって激痛にさらされるだろう。今にして思えば、脊髄を上部で切断して脳に到る神経繊維のほとんどをしゃ断すればよかったのだが、事前には思いつかなかったし、手術中にはほかのことで手いっぱいだった。生き延びたというのは、かれの強靱さの証拠であるが、術後の金切り声や抗議はまだ耳に残っている。もちろん、すでに上肢は切除してあったから、目から流れる涙はわれわれがぬぐってやらねばならなかった。その時点では、もはや肉体組織への悪影響の危険はなかったため、麻酔剤を打ってやった。

血管封鎖を成功裡に終え、したがって生命に関わる出血多量の危険もなくなったため、胸腔と腹部の上層部に戻った。アドソン鉗子でそっと薄い皮膚をはがし、メスで裏を削る。気を遣う作業ぶりだったが、やっとのことでその一帯の皮膚をきれいにすることができた。だらりと、のどのたるみのように垂れ下がっている。それを完全に切り離すため、最後に腋窩部分を切断しつつ、ナルシソ看護婦に技術士を呼ばせた。かれはわたしが作業を終えるのと同時間に入ってきて、皮膚を受け取った。

正直いって、組織培養と器官再生の技術について、わたしの理解は十分なものではない。わたしは外科医であって、技術士ではない。自分のエネルギーの大部分は、手術の技術を磨き、完成させることに使う。しかし、われわれが生きるこの時代は大いなる科学的成果の時代であり、わが若き同僚たちによる偶像破壊によって、わたしも視野をもっと広く持つに至った。したがって、誘導的有糸分裂や、人為的腫瘍形成誘導などについてもまったくの素人というわけではない。ここではその原理にだけ若干ふれておくことにする。

組織を受け取った技術士は、それをしかるべき部屋に移し、熱磁氣的タンパク質槽に沈める。この槽は組織体ごとに異なり、温度、PH、磁場、基質などはちがうが、細胞の活動を抑えるように設計されている点では同じである。正確には、有糸分裂のG1段階における休眠状態を引き延ばす。それから磁場が変えられ、すべての細胞が磁場と直角に並ぶようになる。続いて槽の中に、等張性の核酸とアミノ酸溶液が注がれ、溶解をはやめるため、槽全体が機械的に揺さぶられる。数時間たってから磁場が再び変えられ、細胞を有糸分裂の後段を司る遺伝子座にあわせて配列しようとする。成功すればすぐにわかる。失敗は即座に全面的な壊死を生じるからだ。そして器官が再生を始める。これは大規模な現象であり、裸眼でもはっきりわかる。わたしはこの決定的な瞬間に立ち会ったが、単純でありながらも不思議なものである。

組織によって、再生や増大の形態はまったく異なる。皮膚の場合、その発生はナイロン

やその同類の化学繊維の重合とまったく同じだ。精巢はもっと段階的に生じる。ツルに沿ってブドウの房が生まれてくるのに似ているだろうか。筋肉は薄膜状に積層して、だんだん一枚ごとの膜が厚くなり、分離しなければ自分の重みでつぶれてしまう。骨は細管状に成長する。靭帯は長大なツル草のよう。すべて異なっているが、それでもある主題の変奏なのだ。

われらが患者の場合、結果が大豊作であることをお伝えできるのは光栄である。これは、われわれの厳重な予後に照らせば、一層満足のいくものである。手術に挑んだときの疑念は、わたし一人だけが抱いたものではなかった。老人の組織やその再生能力は若者には及ばない。手術中、かれの器官のもろさと全体的な衰退ぶりを見せられて、わたしの考えはどちらかと言えば悲観的な方に傾いた。コーブス灰帥が上腕部を腋窩から切り離すとき、うっかり多孔性のもろい骨を大量につぶしてしまったのを見て、われわれの慎重なうちあわせは時間の無駄ではなかったか、われわれの得る成果はつぎこんだ努力に見合ったものにならないのではないか、という疑念が脳裏を横切ったのを覚えている。いま、後知恵の助けを借りてさえ、わたしはこの目覚しい成功には驚かされる。これは、われわれ手術チームの仕事の成果であるとともに、人体の本質的なバイタリティと回復力の証であると言えるかもしれない。

さて、前述のように皮膚層を切り離してから、わたしは筋肉の切除に進んだ。脂肪組織は、すべりやすく扱いにくいので、時間の節約のため、化学的に除去された。すでに述べたように、出血多量の危険　およびそれに伴うレーガン氏の生命の危険　はなくなっていたが、その結果としての血液循環の阻害によって、組織の壊死の可能性が大きく生じてきた。このため、非常に迅速な作業が求められていた。

手早いが着実なメスさばきでわたしは大胸筋と小胸筋と前鋸筋の靭帯状の付け根を切り離した。肩甲骨上腕骨への付着点をさぐりあて、それを切り、筋肉担当の技術士が必要だとナルシソ看護婦に告げると、その技術士はいまング医師に呼ばれているとのこと。そこでかれの領分を少しのぞいてみた。かれとコーチス医師は早い仕事ぶりを見せており、蠟径部から足指に向かっての円周上のメス入れを終え、オレンジをむくのと同じやりかたで、足の皮膚のさやが完全に除去されていた。大腿部の腹側と骨盤の筋糸がむき出しになり、縫工筋と四頭筋のうち少なくとも二本の頭がぶら下がっているのが見えた。非常によい作業ぶりだ。わたしは満足してうなずくと、腹壁に注意を戻した。

時間的には、腹筋は胸筋より楽だった。邪魔をする肋骨がなかったからだ。加えて、内臓に穴をあけないよう注意していれば、腹膜はほとんど好き勝手に破ることができた。わたしはメスをとって胸骨の剣状突起に突きたてた。素人がみぞおちと呼ぶところのすぐ上だ。そして、腹部の白線に沿って長く突き刺すようにメスを入れる。へそを過ぎ、恥骨結

合に達する。片手で傷の余白を持ち上げ、残りの手でそっと腹膜をスライスした。わたしはすべての腹筋を翻転させた。腹直筋、腹横筋、内腹斜筋、外腹斜筋。そしてそれらを骨の付着点で切り離す。腹膜を幅広鉗子でつかんでめくり、その上にかぶさっている筋肉のかたまりの中に大きなタオル・クリップを置くと、氷屋が氷の塊を持ち上げるようにして、それを手術台のLに持ち上げ、待ちかまえていた技術士の手にゆだねた。もう一人が胸筋を受け取りにきていて、それらを手術台から片づけると、わたしは内臓そのものに向かった。

この時点での患者の状態について一言申し上げておこう。どんな手術でも、技術面や機構的な面に没頭する一方、意識の別の部分で、わたしはナイフの下に横たわる人間のことを絶えず意識している。われわれの手術におけるこの時点で、腹部の残り半分の筋肉のしおれ具合により、患者の弛緩が強すぎることに気がついた。筋肉には必ず張力があり、外科医が不要な抵抗なしに手術を行うためには、それを和らげる必要があるのだが、患者の生命にかかわるほど和らげてはならない。そこでわたしはゲバラ医師に、弛緩剤の注入を若干減らすように頼んだ。これはすべての筋肉に影響を及ぼした。もちろん横隔膜や喉頭筋にも。これを利用して、レーガン氏は声をあげようとした。もちろん気管に管を内挿されている以上、これは不可能なのだが、それでもかれは、泣き叫ぶような声をあげ、われわれ全員を落ちつかない気分させた。かれの顔は、ゲバラ医師の報告によれば、すさまじい形相にかたまり、目は眼窩でけいれんするかのようだった。明らかにかれは多大な激痛を感じているのだ。わたしの心は、勇敢な兵士を想うように、かれを想いやった。

この苦悶は、単に身体上のものではなかったと、わたしは確信している。自分自身の体系的な切断と分解についての思索による精神的な側面も確実にあったろうし、精神病的な面もあったかもしれない。わたしなら、決して耐えられなかつたろう。わたしは再びかれの勇氣と不屈の精神に頭が下がる思いだった。しかし、まだやらなくてはならないことが山ほど残っていた。共感や絶望で手を止めているわけにはいかない。そこでわたしはゲバラ医師に、注入を増加してレーガン氏の悲鳴を止めるように頼んだ。そしてこれが済むと、注意を手術台に戻した。

事前の打ち合わせどおり、ピコ医師は患者の反対側に移動し、わたしがこちらの半身で終えたばかりの作業を繰り返しはじめた。唯一の違いは、かれが腹壁から作業をはじめて頭の方に進んでいったことだ。これによって、わたしが腹部の中身を半分摘出し終えた頃には、残り半分がむきだしになって準備が整っていることになる。敏活に、わたしは摘出作業を開始した。

さまざまな器官の切断や結紮、除去などを一步一步記すのは、いささか冗長である。これについては別の論文(参考文献参照)に詳述してある。ここでは、わたしがそれぞれの

器官を判別して、計画どおりに切除を行った、と記すにとどめる。ひとたび胃を取り除くと、脾臓と膵臓はすぐに除去できた。肝臓と胆嚢は、あわせると非常にかさばるため、多少時間はかかったものの、やがて非常にきれいにはずれた。近位の小腸と大腸を下の方に翻転した。腹腔上部の深い窩をむきだしにして、腎臓と副腎に手をつけるためだ。わたしは腎臓と副腎を一体のものとして扱い、尿管を腎腔近くの根元で切断しつつ、左右を一対ずつ取り出した。巨人な腹部の血管、大静脈と大動脈がいまやむきだしとなり、自分の切断部分にそれを含またいという衝動を、わたしは抑え込まなくてはならなかった。事前の合意で、この部分の作業はピコ医師にゆだねることにしてあったからだ。かれは、わたしが有能で高名な腹腔外科医であるのと同様に、有能で高名な血管外科医である。誘惑は手のとどくところにあったが、わたしは誘いを断って消化管の摘出を終えにかかった。

われわれは、多くの人々が示唆したような、消化器系の管部の一体的除去は行わなかった。技術スタッフとの相談の結果、部分ごとに進めた方が実現性が高く、成功率が高いだろうと決定されたのだ。そこでわれわれは消化管を三つの部分に分けた。胃（横隔膜のすぐ遠位の食道部分も含む）、幽門から回盲弁に至る小腸、盲腸から肛門に至る結腸。これらはきっちりと分割切除され、貯蔵タンクに送られて、未来の需要と目的を待っている。

腰筋、腸骨筋、腰方形筋と腹腔内筋肉を収穫して、わたしはしばし、とりとめのない考えにふけた。手術は終わりに近づいており、ある種の哲学的瞑想にふける余裕ができたのだ。わたしは世界の人々のことを考えた。飢えた者、凍えている者、屋根も、日々の差し迫った要求を満たすだけのものすら持ち合わせない者たち。かれらに対するわれわれの責任とは何なのだろうか。天は人の上に人をつくらず、と言われるし、わたしもそう信じている。ならば、一個人が多数の人々のために何をしてあげることができるのだろうか。耳を傾けること、かもしれない。そして変化すること。

この職にあってわたしが見いだしたのは、他の職にあって同じだと思うが、適応しないものは古びる、ということだった。多くの同僚が、技術革新を受け入れなかったり、あるいはそれに対応できずに、安っぽい道へと消えてしまった。一途さは、ある場合にはすばらしい資質だが、変化する能力の前では敵ではない。ある時代に一途さと考えられることは、別の時代には必ずや臆病さと判断されるだろうからだ。わたしはこの患者のことを考えた。思えばかれの運命は、わたしの修行時代とはうって変わったものになっていた。そしてわたしは、正義の問題をもっとつきつめてみた。強制され、自発的でないにしても、偉大な愛他行動一つで、悪名高い世代すべてを帳消しにできるものだろうか。自分自身の肉体を大衆に提供するという文字どおりの献身は、罪と悔い改めのはかりにかけたとき、どのくらいの重みを持つのだろうか。

わたしの眉根にはしわがよった。こうした間は、わたしにとっては手術そのものより

ずっとむずかしかったからだ。もしナルシソ看護婦がタイミングよく話しかけてくれなかったら、わたしは額の汗を自分の手でぬぐって、消毒を台無しにしてしまったかもしれない。

「腰に移りましょうか、先生?」と彼女はわたしの沈思を破った。

「ああ」とわたしは静かに答え、気を持ち直すために一瞬だけ手術台から顔をそらした。看護婦がわたしの湿った顔をぬぐってくれる。

膀胱は、もちろん手術前のカテーテルによってひしゃげていた。腹膜の床をひとつひとつと、メスの下でパンクしてぐにゃぐにゃのタイヤのように横たわった。わたしは、前立腺と精囊、尿管、尿道隔膜部を含むように注意して、それをすばやく切断した。技術士がこれを控えの部屋に運び、そこに待つ外科医がそれぞれの組織を切り離して、おのおののタンクに運ぶ。残っているのは陰茎の切断と精囊だけだ。前者は比較的簡単であり、後者はそれを含むデリケートな嚢を壊さないようにするため、より注意が必要だった。これを終えて、わたしは開始以来ほとんどはじめて背筋をのばし、進捗を確認してみた。

ある仕事に没頭し、一心に集中して時間が刻々と過ぎてゆくのも忘れるほどだと、現実には復帰するのは、鮮明でありありとした夢から覚めるのにも似た、ぎょっとするような感じだ。これまでも数々の手術でこうした感覚は味わってきたが、これほど強烈だったことはない。何時間も過ぎ、人員が変わり、外では月が出たかも知れないのに、わたしにとってはほんの数瞬くらいの時間幅に思える。ング医師とコーチース医師を探したが、しばらく前に手術室を出たと告げられた。そういえば微かに記憶している。かれらの仕事ぶりを見たが、非常にきっちりと行われていたのは嬉しかった。手足はすべてなくなり、肩が取り外された腋関節窩は、打ち合わせどおりに封じてある。わたしの向かいではピコ医師が、腹血管の作業を終えるところだった。わたしは満足してうなずき、腰椎部の筋肉を除き、骨用のこぎりを求めた。

脊髄を、第二腰椎と第三腰椎の間で切断し、横隔膜付着部分のほとんどを残した。レーガン氏が打ち合わせどおり呼吸能力を回復するためには、これは重要なことである。周知のように人工呼吸器につながれたまま手術を終える患者は、術後の経過が思わしくない場合が多く、手術直後に死亡するケースがままある。われわれがこの手術の最後の部分をいい加減に処理していたら、レーガン氏も確実にそうになっていただろう。特に今回の場合そうした事態はことさら無念なものとなったであろう。なぜなら、この勇敢な人物が、それにふさわしいだけの運命と報酬を受け取れないことになってしまうからだ。

そろそろ本報告も終わりに近づいている。摘出した神経や靭帯、筋肉、器官をいちいちすべて記述していないことは言うまでもなからう。これが重大な欠陥に思えるにしても、本稿を読むに耐えるものとするために意図された、狙いあってのことであると申し上げて

おこう。われらが医学界の帳の外に存在する、非専門家にも読みやすいものとなっていることを願うばかりだが、より詳細な情報を求める向きは『切除技術集成』一二二巻第六号、六七-一〇四ページを参照するか、それこそ任意の解剖学辞典をひもといていただければ幸いである。

われわれは胸壁と横隔膜以下の部分を合成高分子樹脂 (XRO 一三七、ダウ社) で封じた。薄いが、驚くほど耐久力があり、バクテリアの侵入を許さない。患者の体内にうっかりタオルを残していないか確認するため、タオルの数を数えなおす。もっともこの時点では、見落とせるような部分はこの患者にはほとんど残っていなかったのであるが。それからゲバラ医師が、栄養摂取と投薬のために咽喉カテーテルを挿入した。ピコ医師は右外網状血管できれいなフィステルをつくっていた。これは、腎臓を摘出したため、透析機能を担うことになる。これらが完了して、われわれは最終的な血中ガスと生命徴候のチェックを行ったが、いずれも良好であった。わたしは手術台から離れた。

「みんな、本当にありがとう」と言って、わたしは手袋をはずしながらレーガン氏に向き直った。かれは薬による麻痺から回復しはじめたところで、わたしがかがみこむと、顔をそむけるようだった。これは今までにも手術で出会ったことがあって、フードをかぶったりマスクをつけたりした顔などの奇妙な装いが、患者に恐怖を引き起こすのだ。特に手術直後によくあることで、特殊な身体感覚と、度重なる精神的な方向感覚喪失が大きな要因である。したがって、わたしが近づいた時に患者が顔を歪めても、特に慌てることはなかった。

「終わりましたよ」とわたしは優しく声をかけた。せりふはなるべく簡潔で明確にするよう努めた。「うまくいきました。口からチューブを抜いてあげます。でも、しゃべろうとはしないでください。しばらくのどが荒れてますから、しゃべると痛いですよ」

わたしはかれの頬に手を置いた。肌は紅潮していたものの、じっとりした感じの頬だった。ゲバラ医師が管を抜いた。その頃には筋肉弛緩剤は完全にきれ、レーガン氏は即座に自力で呼吸を開始するというすばらしい反応を示した。その直後、かれは絶叫しはじめた。

知り合いの外科医や医師の中には、苦痛が人を強くする効果を持つという不可思議な信念を抱いている人々がいる。苦痛は有機体を守り、それを病のもとたらず侮辱に耐えるよう強化するというのだ。苦痛と組織の生存率に関する正の相関については既述のとおりだが、これは純粹に切断手術の場合だけに適用されるものである。その他、無数の場合には証明されていないし、これを証明すべく、文字どおり何百件もの実験が行われた挙げ句にこの状態である。唯一の可能な結論、唯一の科学的な結論は、苦痛というものが、警告機構としての価値以外には、こうした痛覚恐怖症患者たちが主張するような属性はいっさい

持たない、というものである。わたしは内心、こうした臨床医たちは度し難いモラリストであり、外科医のような特殊な業務から解かれるべきだと思っている。手術というのは、こうした問題がいたるところに顔を出す分野なのだから。

言うまでもなく、レーガン氏が絶叫しはじめると、わたしはすぐに強力で効き目の長続きする麻酔薬を与えるよう指示した。われわれが手術を開始して以来、かれの顔は初めて静まり、目が閉じられた。特にたずねたことはないけれど、かれの夢は、自分一人が何とも人間に対して提供できたものについての、誇らしく甘い夢だったに違いないとわたしは思いたい。

補遺を除き、これがわたしの報告のすべてである。文中の省略については再度おわび申し上げますとともに、興味ある読者諸氏は豊富な参考文献を参照していただきたい。徹底した器官切除の可能性と、誘導的有糸分裂やその変種の基盤を提供する価値についてはお示しできたものと琢える。骨の折れる作業ではあるものの、将来の選ばれたる患者にふさわしい技法であると言えよう。

## 補遺

本稿執筆時点において、再生システムによって、以下の部品がここに示した量だけ生産されている。

物質	元の位置	量
油 (精製済)	精巢、精管	3,761 リットル
香水、芳香剤	同上	162g
肉類 (パテ、フィレ、挽き肉含む)	筋肉	13,318kg
貯蔵用水差し	膀胱	2,732 個
ポール (水に浮く。子供用)	同上	325 個
多目的のひも	靭帯	1,2km
ルーフィング材 (例: テント用柔軟サイディング)	皮膚:全層	3.6km <sup>2</sup>
避妊用具	皮膚:粒層	各 10 個入りカートン 18,763 箱
酵素、薬物、ホルモン等	膵臓、肝臓組織、 アドレナリン腺	272g
柔軟支柱など建築部材	骨	453m <sup>2</sup>

この大半は、主に第三世界諸国に分配されたが、わが国の困窮地域にも送られている。

データの更新と、物資ごとの地理的配分状況を明らかにする追跡調査が本年度中に実施される予定である。





## ドミノ・マスター

初めてジェイクに会ったのは、とうさんが酔いつぶれて帰った晩だった。かあさんも酔っぱらって、どなり合いになり、かあさんがとうさんの頭を瓶でぶん殴った。髪の毛が赤くなって、血が顔や眼に流れ出した。かあさんは金切り声をあげ、ぼくは恐くなった。かあさんはとうさんを助けに駆け寄って、ぼくはアパートを飛び出した。

階段に出たところで立ち止まった。一人で出かけちゃいけないんだ。でも帰れない。深呼吸して、一段目に足を置いた。何も起きなかったので、もう一段。いきなり、階段のいちばん上のドアが開いた。ぼくは凍りついた。すると、ネコが出てきた。

みっともないネコ。白と黒のまだらで、見たこともないほど毛が長い。あくびをして、トコトコ階段を降りてった。ドアは開けっ放しで、いきなりそのすき間から顔がのぞいた。年寄りみたいな眼をして髭をはやしていたけど、背丈は子供とあんまり変わらない。

「バカなネコめ。いい加減わかってると思ったのになあ」その人はぼくを見た。「そう思うだろが、え？」

ぼくはその人を見つめた。何のことが分かんなかったし、それに知らない人とお話しちゃいけないんだ。この人が廊下の一番奥に住んでる人なら、なおさらだ。

その人はしゃべり続けた。「あんたはわかっとるだろ。それくらいのことはわかる年頃だ。わかっとるに違いない」そして首を振った。「ネコもわかっとると思ったんだがな。特にあのネコは」

「わかってるって、何を？」

「歳をとり過ぎただけなのかもな。わかっとるのはわかっとるんだ。ただ、どうしようもないだけなのかもな」

「何のこと？ 何なの、おじさん」

おじさんはぼくを見て、目をパチクリさせた。眉毛は灰色で、白髪混じりのもじゃもじゃ髪が顔の両横にくっついてる。てっぺんはハゲだ。

「入っといで、自分で見てごらん。まあ見てやってくれ。それでどう思うか聞かせておくれ」

おじさんは姿を消すとドアが大きく開かれた。中のものがみんなオレンジ色に見える。

歌が流れてたけど、何の曲かはわかんなかった。ぼくはドアの方に一步踏み出し、そこで止まった。耳を澄ます。

「ありんこの行進一列で、フレー、フレー。ありんこの行進一列で、フレー、フレー、ありんこの行列、おチビさんが遊びに寄り道……」学校で習った歌だ。もっと聞こうと中へ入った。

入るとすぐおじさんが目に入った。ドアの中の敷物にひざまずいてそれを見つめ、むっつりしていた。これがこのアパートに住んでいる人なら、あんまり怖くないや。それどころか、何だか悲しそうに見えた。

近寄ったけど、そばまでくると、おじさんは手を出して止めた。

「待った。これを踏みたくはないじゃろ」そう言って首を振った。「バカなネコめ。それもわしのお気に入りのカーペットに」

ぼくは下を見た。暗かったけど敷物についたシミはちゃんと分かる。

「このこと、おじさん」

「ジェイクじゃ」

「これがそうなの、ジェイクさん。これ、おじさんのネコがやったの」

「わしのネコじゃない。わしのなんかじゃない。時にはそうだといいいとは思うけど、もちろんちがう。あり得ないね、絶対に」

「え？」

おじさんはぼくを見た。「坊や、とぼけるんじゃない。ネコが何をしたか、あんたもわしもわかるとるはずだ。あんたは自分の敷物にこんなことするかい」

ぼくはまだちょっとだけ恐かったけど、おじさんを見て首を振った。

「もちろんしないじゃろ。礼儀をわきまえとるからな」

「時々おねしょするよ」

「そりゃそうじゃ。わしだってたまにはする。けど敷物にはしない。これにはな。バカなネコめ」

「たぶんわざとじゃなかったんだよ。ちょっとしくじっちゃただけだよ」

おじさんは何か言いかけたけど、口をつぐんだ。ため息をつくとき、しゃがむ姿勢になった。

「なかなか賢いな、坊や。確かにしくじったんだ。それこそが悲しいことなんじゃ」

「ぼくジョニー」

「あんたがおねしょするのは、大きくなる過程。わしらがするのは、おいぼれてく過程じゃよ」そう言って耳の上のもじゃもじゃ髪に指を走らせた。「かわいそうなネコだ」

「掃除、手伝うよ。どうするか知ってるもん」

「本当かい」それで気を取り直したみたいだ。「それじゃあ、ぜひとも手伝っておくれ」

「塩がいるよ」

おじさんはよいしょと立ち上がって部屋を出た。それですぐに、NaCl って書いてある古いびんを持って、戻ってきた。ふたをとってぼくにびんを渡す。

「これ、塩？」

「他ならぬ死海でとれたやつじゃよ、ジョン。ジョンって呼んでもいいかね」

ぼくは肩をすくめ、シミに塩を振りかけた。すぐに湿ってきて、黄色いシミが塩に移ってきたので、もっと振りかけた。しまいには、びんがほとんど空っぽになった。

「あんた、なかなか重宝な子じゃなあ。アルセニオにもその方法を教えてやらにゃ。あの子なら知りたがる」

「それ、だれ？」

「ちっちゃな友だちじゃ。そのうち会える。いや、わしにはわからんが、会えるかもしれん。が、それはさておき……」たぶん敷物がきれいになったからだと思うけど、おじさんはまた立ち上がり、ぼくの手を取った。それから行進を始めた。脚を交互に振り上げ、歌い始める。

「ありんこの行進一列で、フレー、フレー。ありんこの行進一列で、ジョンが遊びにきてみんな一緒にぐるぐる回る。ぐるぐる回る。雨宿りして、ドーン、ドーン、ドーン」

ぼくもいっしょに歌い、じきに二人ともオレンジの部屋の中で、ぐるぐる行進しながら歌った。「ドーン、ドーン、ドーン」というところにくるたび手を叩き、十番までくると最初からまた歌った。ぼくとこんなことした大人なんて、これが初めてだ。二回歌ったところで止めた。ジェイクはゼイゼイ息をしてて、もうこれ以上続けられそうになかった。部屋の隅に行って、床に置いたクッションの山の上にとかりとすわった。足を投げ出し、目を閉じている。ぼくはこれから何が起こるんだろうと思ったけど、何も起きなかったので、そこらへんをながめてまわることにした。

はじめ、その部屋はガラクタだらけに見えた。壁やらテーブルやら、椅子の背もたれにまで、みんな物が掛かってた。床には物が積み上げられているし、そこらじゅうに箱があった。ぼくの部屋がこんなだったらかあさんはどうするだろうと考えたけど、それは考えたくなかったので、考えるのは止めた。かわりに箱を見た。

みんな長っ細くて、同じようだったけど、ちがってた。お日さまみたいにキラキラしてるのもあれば、暗くて何が描いてあるのかわかんないのもあった。変な動物が描いてある箱があって、それは動物園にいるのほとんど同じだけど、どこかが違っていた。尻尾やなんかは同じでも翼がある馬とか。他にも馬がいたけど、それには髪の毛の長い女の人の顔がついていて、ぼくの学校にいる女の子に似ていた。箱には竜もいれば、すごい火から飛び

出してる鳥もいた。見てて楽しかったけど、本物じゃない動物を描くなんてばかみたいとも思った。それでぼくは見るのを止め、別の箱のところへ行った。

こんどのは青く光ってた。サイレンを鳴らす時のパトカーのライトみたいにチカチカしていた。開けたかったけど、開け方がわかんなかった。それで、手に取ってみた。

中で何がガタガタいって、ぼくは恐くなった。すぐに元に戻してそこを離れた。ジェイクには、さわったことさえ知られなくなかった。

幸いにもおじさんは目を閉じたままだ。眠ってるのか起きてるのか判らないので、見にいった。部屋があんまり散らかってて、うっかりテーブルにぶつかっちゃった。ぶつけた足が痛くて、さすろうと身をかがめた。その時、てっぺんの箱が目に入った。

見たことないほど真っ黒で、友だちのジョーイの顔のあざより黒かった。あんまり黒いから、何もなくて穴があいてるみたいだった。本当にあるのか確かめようと手を伸ばした時、いきなりジェイクが目を覚ました。

「さわるな！」ぼくはびくっと手を引っ込めて、おじさんを見た。

「よしよし」かがみこんで箱をひったくると、クッションの下に押し込んだ。

「ミルクを飲むかい。ちっちゃい子はミルクが好きじゃもんな」

ぼくは首を振った。「家に帰んなきゃ」

「ああ、そうじゃな。こんなすぐ寝こんじまうとは、わしもどうかしとる。親御さんが心配しとるだろう」

おじさんはにっこりして、ポケットに手を突っ込み、何か取りだした。

「さあ、これをあげよう」

ものもらっちゃいけないって言われてるけど、悪い物には見えなかった。だから受け取った。ピンでとめるバッチだった。真ん中を黒い線で仕切られた白い四角が二つくっついた形で、どちらの四角にも黒丸がいくつか描かれていた。

「ドミノじゃよ。自分でつけられるかい」

ぼくはうなずき、つけてみせた。それから家へ帰った。

それからずいぶんながいこと会わなかったけど、ずっとジェイクのことは考えてた。特にぼくからひったくったあの黒い箱のこと。もっと早く戻りたかったけど、あの晩、かあさんがぼくをつれて家出したのだ。ぼくたちはかあさんの友だちのジニーのところへころがりこんだけど、そこは前のアパートよりもっと狭かった。しばらくすると、ジニーはぼくらに、狭すぎるから出ていってこないか言った。かあさんは、またとうさんとデートするようになっていたので、いいわよと答え、やっぱりとうさんが好きなの、と言った。

とうさんに会った時、とうさんも同じことを言って、ぼくを痛いくらいきつく抱きしめた。「おかえり、ジョニー」だって。とうさんはぼくらのために、卵、トースト、パンケー

キと、ボリュームたっぷりの朝食をつくってくれて、それから GI ジョーをくれた。かあさんにはすごく短いネグリジェをあげて、朝食がすむとぼくに、しばらく一人で遊んでらっしゃいと言った。二人で寝室にいて鍵をかけて、ゲタゲタ笑いだした。ぼくはどういうことかわかってたから、テレビのスイッチをいれた。でもテレビは壊れていたんで、GI ジョーで遊んだ。悪くはなかったけれど、ジョーは相手の兵隊たちを撃って頭から血を流させるだけなので、すぐに飽きて、ぼくはジェイクのことを考えた。それとあの箱のことを。

とうさんとかあさんがたててる音で、いなくても大丈夫って思ったから、ジョーや他の人形たちに、内緒だよと言って、抜き足差し足で部屋を出ると、廊下の奥へ行った。

ジェイクのところへ着き、呼び鈴を探したけど、なかった。ドアノブもない。物音がするので、ノックをするのもこわかったし、どうしていいのかわからなかった。すると歌が聴こえてきた。

遠くから聞こえてくる感じで、すごくやわらかかった。ぼくは目を閉じてドアによりかかった。耳を澄ませた。歌は四番が始まったところだった。

「ありんこの行進四列で、フレーフレー。ありんこの行進四列で、おチビさんがやってきてノックする……」いきなり気がつく、ぼくはジェイクのドアをノックしてた。何も起こらないのでまたノックする。するとドアは、キシリとも音をたてずに開いた。

「おいで、おいで」と声がして、すぐジェイクだとわかった。入ると後ろでドアが閉まった。小さな廊下を抜けてオレンジの部屋へ行った。

ジェイクを見て「こんちわ」と言うと、入れと手招きをしてくれた。クッションの上に寝てて、前と同じに見えたけど、パイプをくわえてる。長いパイプで、ほとんどジェイクの背丈と同じくらいある。長すぎて、ほとんど火をつけられないくらい。ちょうど細くて長いマッチで火をつけようとしてるところだった。手をじっとさせて、火が十分に燃え上がった頃には、マッチが燃えて短くなっちゃうので、また手を動かさなきゃならなかった。遠くへ、遠くへと体を伸ばし続けた。やっとパイプがくすぶり始めたけど、そこでマッチが燃え尽きちゃった。ジェイクはうめいてぼくを見た。

「ロケット点火装置を使いたいとこだがね。家に火をつけたかないからな。手を貸してくれんかね」

ぼくは近くに行って横に立った。

「手じゃ。耳がついとらんのかね」ぼくが片方を、つまり片方の手を出すと、マッチをつけてよこした。

「さあ、それをもって行くんじゃ。パイプの火皿に」

ぼくが言われたとおりにすると、ふかし始めた。火皿に詰められたモノが赤くなると、

パイプを口からはなし、マッチを吹き消した。

「ぼくがするのに」

おじさんは、もう何服か吸いながら、こっちを見た。それからマッチをとると、その先を指でつまんでこすり始めた。その手を止めたたん、すぐそれに火が着いた。

見とれてしまった。あんまりすごい技なんでマッチを吹き消すのも忘れてた。ジェイクの指先まで燃える直前に気がついて、慌てて吹き消すと、おじさんはぼくを見た。

「ちょっと気落ちしとるんじゃ、ごめんよ。あのネコがまた同じことをしたんでね。あんたが来るのが何かのきっかけになるみたいじゃな」

「ぼくは何にもしてないよ、ジェイクさん。本当だよ」

「もちろんわかっるとるよ。それと、ただのジェイクでいい」

「また掃除するよ。この間みたいに」

「もう始末したよ、というかアルセニオがしたんじゃ、してるところかな。そろそろ終わるころじゃろう」

アルセニオってだれだかきこうとした時、子供が部屋に入ってきた。ぼくより小さくて、金持ちそうだった。たまに店なんかで見かける、大人と同じような髪型をした子。髪の毛をまん中で分け、きっちりなでつけていて、ちょっとおかしかった。黒い上着とお揃いのズボンをはき、頭と同じようにテカテカした黒い靴を履いてる。ダメ押しに、襟元には街で見かけるおじいさんしかしていないボウタイを結んでいる。前に美術館で見た絵に描かれていた男の人を、そのまま子供にしたみたいだった。

「アルセニオ、こちらがジョン。ジョン、アルセニオだよ」その子は近くにきて手を前で組むと、ぼくにおじぎをした！それから気をつけをすると、手を差し出した。

「お目にかかれてたいへん光荣です」

どうしていいかわからなかったので、握手した。バカみたい。その子はジェイクの方に向き直る。

「言われたとおりに致しました。塩はほとんどなくなりましたが、シミはとれた、と思えます」

「ここにいるジョンがやり方を教えてくれたんじゃよ」

「じゃあ、お礼はきみに申し上げなくてはなりませんね。新しい掃除方法を知るのは実に楽しいことです」

見かけだけじゃなくて、しゃべり方まで変だった。ほかにも何かある。なぜだか前に会ったことがある、会っててもおかしくないような気がした。

「アルセニオは二のダブルの片われなんじゃ。もう一人はジュディスじゃ。あの子はどこに隠れているんじゃろ」

「クロゼットに閉じこめました。古い服や、紙やクレヨンが入ってるところです」とアルセニオが答えた。

ジェイクはうなずいて、パイプを引き寄せた。「ジョンに紹介してあげたらどうだね」

アルセニオはしかめっ面をした。ぼくがあんな顔したら、絶対にムチでぶたれる。動こうとしなかった。

「行きなさい」

「いやです」

「いやでも何でも、行くんじゃ。あの子はもうごちゃごちゃに散らかしちまっとるに違いない」

「どうしてもですか」

ジェイクは、何をけのわからんことを、とでも言うように眉をひそめた。パイプをふかすとクッションにもたれかかり、宙を見つめた。アルセニオはため息をつく、向きを変えて歩きだした。

「一緒にどうぞ」

ぼくはその子について、ドアがたくさんある廊下へ行った。途中で塩の山があったから、踏まないように気をつけた。その子はあるドアの前で立ち止まり、ボウタイをまっすぐに整えた。髪を両手で撫でつける。もじもじしてるので気の毒になった。

「ぼく、この廊下の向こうに住んでるんだ」

「私もです」

「206号室だよ。とうさんとかあさんがいるの」

「私はこの廊下の奥に住んでいます」そう言って、ぼくたちがさっき通りすぎてきたところを指さした。

「ここに住んでるの？ ジェイクと？」

アルセニオがうなずく。「ジュディスもです。私たちはここで一緒に暮らしているのです」

「ジュディスって、妹なの？」

「私のダブルです。反対側に住んでいます」

「どれがきみんち？」

オレンジの部屋を指さすものだから驚いてしまった。ベッドはどこなのか聞こうとした時、いきなりクロゼットから叫び声が聞こえた。大声で恐かった。アルセニオはパッとドアを開けて、飛び込んだ。ぼくも一歩入って立ち止った。中はごちゃごちゃだ。奥の方の、服の山の下に女の子がいた。長い髪はもつれ、顔は汚れている。そのうえ赤い。泣いてたからだ。

「足がはさまっちゃった。痛い。痛い」

アルセニオはすぐに箱や服や紙屑をかきわけ、足のはさまったところを見つけると、引き抜いた。それから気をつけをしてボウタイを整えた。

「ジュディス、こんなに散らかして」

「いいでしょ」ジュディスは紙をちぎっては投げ散らかした。そして紙屑が舞っている間、イモムシみたいにからだをくねくねさせた。それから服を着はじめた。

もともとワンピースを着てたのに、その上にズボンをはき、シャツを着て、もひとつシャツを着て、その上にベストを着た。いろいろな色の靴下を見つけるとそれも全部はいた。帽子に靴も。ドアの内側には鏡があり、ジュディスは自分を見てにっこりし。それからこっちを見た。

「こんにちわ」

「やぁ」

「わたしジュディス」

「ぼくジョニー」

「靴下ほしい？」

そう言って、赤いのをくれた。それから緑のも。次にかぶっていた帽子をくれた。あっという間に着たのと同じくらいの早さで脱ぎ散らかしている。服は廊下に投げ出され、床に落ちるはしからアルセニオが拾って畳んでる。下着一枚になって、それも脱いじゃった。それからとび起きると、キャアキャア言って廊下を走りだした。

「なんてことを！ 捕まえなくちゃ」アルセニオも追いかけて走りだして、ぼくもかけ出した。アルセニオが捕まえたけど、すり抜けた。アルセニオがまた追いかける。でも、オレンジの部屋の前で立ち止まった。

「手遅れだ」とうめいた。

ジュディスはもう部屋の奥にいた。クッションの上で飛びはね、笑いながらジェイクとふざけている。ジェイクも楽しそうで、どうしてアルセニオがそんなにむっつりしているのか不思議だった。

「今はいいです。でもジェイクはすぐに飽きる。そうしたら私たちは帰らなきゃいけないんです」

肩をすくめ、どういうことだろうと考えた。しばらくの間、三人してクッションの山でころげまわり、楽しく遊んだ。でもじきにジェイクが息切れしてきて、遊ぶのを止めると、ぼくとジュディスにもやめなさいと言った。ぼくたちは二人とも止めたくなかったし、ジュディスが跳ねまわり続けるので、ぼくもそうした。ジェイクはもう一度、止めなさいと言った。怒鳴りはしてないけど、本気だ。ジュディスにもう帰る時間だと言った。



「いやよ。いや、いや。ここにいさせて」とジュディス。

「来たばかりじゃありませんか」とアルセニオ。

「お願い。もうちょっとだけいてもいいでしょ」とぼくも一緒になって言った。ジェイクはぼくらを一人ずつ見て、ため息をついた。三対一なのだ。もう一度こちらを見た時、その眼はキラキラしてた。

「わかった。もうちょっとだけ、ドミノをやる間だけじゃよ」

みんな喜んだけど、ぼくにはそれがどういう意味だかわからなかった。ジェイクがアルセニオにドミノをとってくるように言う。アルセニオは青い箱ののったテーブルのところへ行った。あのチカチカ光り、振るとがたがたいうやつだ。両手で箱をかかえて戻ってきた。今度は太陽があたった時の水の波みたいだったけど、やっぱりどこがふたかわからない。

ジェイクはどこか後ろから水の入ったコップをとりだした。最初はのどが乾いてるんだと思ったけど、飲まなかった。かわりにそれを高く持ち上げると、逆さにして箱の上にそそいだ。バカだなあ、そこらじゅうがびしょ濡れになっちゃうのに、と思った。でも、見ると全然びしょ濡れになってない。

床にこぼれるかわりに、水は箱のてっぺんにまっすぐ吸い込まれてった。波打つ青い光りの中に。いきなり、やかんの蒸気を冷たくしたみたいな霧が吹き上げた。あたりが曇って何も見えなくなり、ぼくは目をこすった。見ると、箱は開いていた。すごい。ジェイクにどうやって開けたのか聞いたかったけど、ジュディスとアルセニオは箱の中のものを取りだしはじめていた。ドミノだ。

見るのは初めてだった。真っ白で、黒い丸がいくつつかっている。丸がたくさんついてもあれば、少しのもあった。ジュディスとアルセニオは全部取り出すと、丸が上にくるように揃えた。見るだけのおもしろそうで、次にどうするのかな、とわくわくした。

「ひとりずつどのゲームをするか決めるんじゃ。一回ずつしたら、みんな家へ帰るんじゃよ」とジェイクが言った。

最初叫んだのはジュディスだ。「電車！」そしてすぐにアルセニオとドミノを拾い、正面同士が向き合うように、立てて並べ始めた。ぼくも一緒に並べだしたけど、もう二人がほとんど使いきってた。ジュディスのが一番長くて、ぼくのが一番短かった。ぼくのはあんまりまっすぐじゃなくて、ちょっと曲がってたけど、だれも何も言わなかった。

「あなたが最初よ」とジュディスがぼくに言った。

「いいよ」と答えるとそこに座って、何が起こるんだろうと待ちかまえた。

「やってよ。押すのよ」

「え？」

「こうよ……」そう言って自分の列の一番はじのドミノにさわると、それが傾いて前のにあたり、倒れるとそれがまたその前のにあたって、次々と倒れていった。そしていきなり、見る見るうちに全部のドミノが倒れた。ジュディスはワイと叫び、アルセニオは笑った。ぼくは見とれてしまった。魔法みたいだ。

アルセニオも同じことをして、まるで同じことが起きた。こんどは三人とも笑った。それからぼくのをやると、ちょっと曲がってたけど二人のみたいに倒れた。ドミノが倒れていくのは本当におもしろい。特に倒れていく時の音がいい。ぼくらはみんな手を叩き、ジェイクも叩いた。それからアルセニオが言った。

「次は私のゲームです」

倒れたドミノを取って、アルセニオは次々に積み重ねはじめた。じきに自分の背と同じくらいの塔ができた。てっぺんにもうひとつのせようとしたけど、多過ぎた。塔はがらがらと崩れ落ちてしまった。

ジュディスも造ったけど、高くなりすぎる前に止めて、すぐ隣にもうひとつ造った。二つ目のが最初と同じくらいの高さになると、後ろにさがった。そしてにんまりとしたので、何かやるなと思った。ネズミみたいにすばやく、ジュディスの手が飛び出し、一番下のドミノをはじき飛ばした。塔は傾き、全部一挙に崩れ落ちてきた。おもしろかった。次はぼくの番だ。

ぼくは並べて三つの塔を造った。できあがった時、一番上にのせる何かを探した。何か特別なもの。最初に思いついたのは、あの黒い箱だった。

それはさっきのテーブルにあって、前よりもっと黒く見えた。吸い込まれそうで、じっとしてられない。そばに寄った。触ろうか、触るまいか。手を伸ばした。そのとき、ジェイクが口笛を吹いた。

低く、冬の風みたいに冷たい音だ。ぼくは手を止めてそれを聴いた。ジェイクが口の前で両手を丸めると、音が変わった。時々公園で聴くみたいな高いきれいな音だ。それが部屋中に響きわたると、ジェイクが両手を広げた。掌の中には小さな青い鳥がいた。くちばしをひろげて、さえずってる。

ジェイクはそれを口元にもっていき、息を吹きかけるた。小鳥は羽ばたいた。さえずりながら部屋の中をぐるぐる飛んで、ぼくの塔の上に降りた。小さなくちばしを開いて、ぼくに向かってさえずる。アルセニオに、それからジュディスに、とかわりばんこに歌を聴かせ、最後にジェイクの方を向いた。

小鳥がさえずると、ジェイクは同じようにさえずり返す。それからかれは口を開けた。すると小鳥は羽ばたき、もう一度だけ部屋の中を旋回すると、ジェイクの口の中へ飛び込んだ。恐かった。けど何も起こらない。小鳥が消えただけ。ジェイクは口を閉じ、ぼくた

ちはみんな拍手した。

「いやいや、それには及ばんで、そんなに難しいことではないんじゃ。さて、こんどはジョンのゲームじゃよ」

みんながぼくを見ると、ぼくは膝に目を落とし、肩をすくめた。

「何か考えなさいよ」とジュディス。

「そうだよ」とアルセニオ。

ぼくは首を振ると、「あなたがやってよ」と言った。

二人はジェイクを見る。

「いいじゃろう。最後はわしじゃ。マッチ・ゲームをやるよ」

「マッチ？」ぼくはジェイクが指先で火をつけた細いのを思い浮かべて言った。

「シーツ。教えてあげるからよく聞くんじゃよ」

「ドミノにはそれぞれ、いくつか黒い丸がついとる。一つだけ何もついてないのがあって、それはダブル・ブランクと言うんじゃ。ソウルとも言う。他のドミノもみんな名前がついとる。全部で二十八あって、世界中のみんな、自分のスペシャル・ドミノを持つとるんじゃ。ソウルの次はサンで、黒い線で仕切られた片方には丸がなくて、もう一方に丸がひとつある。ムーンとかアイと呼ばれることもある。その次はダブルで、線の両側に一つづつ丸がついている。ムーン・アイとかスネーク・アイと呼ばれるやつじゃ。スクリームと言うところもあるぞ。次のは片方にひとつ、反対側に二つの丸がついとる。ファニー・マン、またの名はクリップルじゃ。それからダブル・ツー」

「それ私たち」アルセニオとジュディスが言った。

「ツインじゃ」とジェイクがうなずく。「ミラーとも言う。丸は六つまで順に増えていく。一番たくさんついとるのは、片側に六、もう片方に六で、合計十二じゃ。ダブル・ミックス、軌跡、旅路、時には悲しみとも呼ばれる」

ぼくはジェイクの話を理解しようと、黒丸を見ていたけど、じきに目がチカチカして丸がごっちゃまぜになってしまい、瞬きして見直さなきゃいけなかった。名前とかもおもしろいけど、塔を造ってる方がおもしろい。気を悪くはしたくなかったけど、ぼくはそう言った。

「今はそうじゃろう」とジェイクは答えた。「じゃが、わしは未来のことを考えねばならん。わしが未来を考えねばならんのじゃ」

ジェイクが違う向きにドミノを並べたので、黒丸がそろった。

「名前は覚えなくていい。ここでは同じのを合わせるんじゃ。こんな風に」

床のまん中にソウルを置くと、片方の端に半分白で丸一つの、反対の端には半分白で丸二つのを置いた。

「さあ、ジュディアスの番じゃよ」

彼女は自分のスペシャル・ドミノ、ツインをとると、床の上の一つと合わせた。次にアルセニオが、片方に二つ、もう片方に六つの丸がついたのをとった。

「これ何ていうの」

「ゲーフ、長続きしない幸運じゃ」とジェイクが答えた。

「ゲーフ」アルセニオは繰り返すと、床のドミノに合わせた。

ぼくはよさそうなのを探し、片側に六つ、もう片方には何もついてないのを見つけた。それを拾い上げる。

「雪のなかの足跡」とジェイクが言った。「氷の魂、ホーム」

ぼくはそれを、やっぱり六つの丸がついてる方と合わせた。それからジェイクが拾い、次にジュディアスとやって、じきに全部のドミノが並べられた。長い水玉のへびみたくて素敵だった。そしたらジュディアスがこれをぐちゃぐちゃにしてしまった。ぼくは彼女を見る。アルセニオもだ。

ぼくはジェイクを見て言った。「もう一度やろうよ」

ジェイクは微笑んだ。「いいとも、またこんどな。さあて、片づけようか」

みんないやだったけど、口答えはしなかった。ドミノを箱にしまうのを手伝い、全部中に入れると、ふたが前みたいに青くなって、チカチカしはじめた。

「さあ、帰る時間だ」

悲しいのには二通りある。だれかにぶたれた時、またはぶたれるかもしれないと心配な時。もう一つは、楽しく遊んでるのに止めなきゃいけない時。今は後の方の悲しさだけど、最初のよりはました。だってまた遊べるって分かってるから。

ぼくはみんなにさよならを言うと、玄関の方へ向かったけど、ドアの一步前で言い忘れたことを思い出して、引き返した。でも、部屋の入り口で足を止めた。ジェイク、アルセニオ、ジュディアスが、なんだかただならぬ雰囲気だったのだ。見ちゃいけないような気もしたし、邪魔したくなかったけど、そこを離れたくもなかった。離れられなかった。

アルセニオとジュディアスは、部屋のまん中に背中合わせに立っていた。ふたりは目を閉じ、ジェイクが囁きかけている。腰を屈めてふたりの頭にキスした。それから黒い箱ののったテーブルのところへ行った。ぼくには見えなかったけど何かして、一步退く。黒い箱が開いてた。ジェイクの掌にはドミノ。ツインだ。

白く、雲みたいに光ってる。まぶしくて、ぼくは目を細めた。ジェイクはそれをジュディアスとアルセニオの頭の上にもって行って、手を離れた。なんかの仕掛けで、ドミノはそのまま宙に浮いてた。雲みたいに光って浮かんでる。それがゆっくり回りだした。

ドミノが回るたびに、ジュディアスとアルセニオは小さくなった。なぜだか分からないけ

ど、ネズミとたいしてかわらない大きさにまで縮んじやった。もっと縮んで、虫みたいに小さくなった。

それからジェイクはドミノをとって、ふたりの横に置いた。ふたりは左右にわかれて、ドミノの端を掴んで、一生懸命よじ登った。ひとりが線の一方に立つと、もうひとりが反対側に立つ。ドミノはもっと輝いた。さらに輝いた。とうとう光が強すぎて、目をそらさなきゃならなかった。ピカーッと光り、次に見たときは、ふたりとも消えていた。

ジェイクはドミノを箱に戻し、ぼくは自分の言おうとしたことなんて結局たいしたことじゃないや、と自分に言い聞かせた。きびすを返して忍び足で玄関に向かい、ドアを出ると一目散で家へ帰った。

ついていないことに、ぼくが家へ帰った時、とうさんとかあさんはもう寝室にはいなかった。怒鳴りつけられ、どこへ行ってたんだ、と聞かれた。階段にいたよと言うと、嘘をつくんじゃないと怒られた。とうさんがベルトを抜く。

泣いたらますますひどくなるので、ぼくは歯をくいしばった。かわりにジェイクとドミノのことを、アルセニオとジュディス、それからあの箱のことを考えた。みんなのことを考えてれば、ぶたれるのもそれほど辛くなくなる。痛みが遠のいていくみたいだった。

それからしばらくはよかった。とうさんが失業して、かあさんも二、三週間レイオフされたのだ。実際、みんなが家にいるのはいいことだった。とうさんがテレビをなおし、かあさんは食事の支度をして、うちは本当にいい家族ね、と言った。時々かあさんがお金の心配をすると、とうさんは出ていったけど、ビールを手に戻ってくればまるくおさまった。それからふたりして酔っぱらう。

ぼくはテレビを見て、よくGIジョーや他のおもちゃで遊んだ。でも、ジェイク、ジュディス、スネーク・アイ、クリップルとか、別の名前をつけてやった。家にいるのは楽しい。みんなが幸せだった。でもその後にはけんかがあった。

それはちょっとしたことで始まり、とうさんが出ていった。ビールを買いに行ったのかと思ったけど、いつまでたっても帰ってこない。かあさんはますます怒りまくった。ぼくはテレビを消し、おもちゃを片付け、できるだけおとなしくしていた。

結局、今まで見たこともないほどペロペロに酔っぱらって帰ってきた。ふたりは怒鳴りあい、かあさんが靴を脱いで投げつけた。とうさんが高笑いすると、もう片方を投げた。それがとうさんの顔に命中すると、笑いは止まった。とうさんがベルトを引き抜く。

今度はかあさんが笑った。そんなに酔っぱらってちゃ何もできやしないさ、と言った。でもちがった。首のところを叩かれた。ベルトをつかもうとしたけど、とうさんはぐいと引き戻し、また叩いた。かあさんがわめいて、ぼくは恐くなった。もうやめて、と頼んだ。

「部屋へ行ってなさい」と言われたけど、無理だ。ふたりがけんかしてる間、そこにつ

立ってた。ものすごいけんかで、これまでで一番ひどかった。ぼくは泣きそうだった。でも、絶対に泣きたくなくなかなかから、言われたとおりにした。自分の部屋へ行ったのだ。でも、ついに部屋に入ることはなかった。

自分の部屋のドアまで来た時、何かが起こった。何だかわからないけど、いきなり何もかもが変わった。まるで長いこと聞き続け過ぎて、鳴ってるのを忘れかけてたような音が、いきなり止んだみたいだった。ちょうどそんな感じで、とうさんとかあさんのけんかが聞こえなくなった。あたりはシーンと静まりかえり、それからかすかに、本当にかすかに、アリの歌が聴こえてきた。ちょうど四番だ。

「ありんこの行進四列で、フレー、フレー。ありんこの行進四列で、おチビさんは元気にドアから外へ、雨宿りして、ドーン、ドーン、ドーン……」そしてぼくは玄関に向かって歩き、行進して外へ出た。

ジェイクんちのドアは開いていて、ぼくは中へ入った。ジェイクはクッションの上に寝ころがって、パイプをふかし、小さい雲のような煙を吐いていた。ぼくを見るとにっこりして、おいでおいでをした。膝の上にはネコがいる。白黒で毛足の長いやつだ。撫でられて、のどをゴロゴロ鳴らしている。

「すわんなさい」と言われ、腰を降ろす。いきなりぼくは泣きだした。

涙が雨のようにあふれ、止めようとしたけど、もっと泣けるばかりだった。ジェイクがハンカチで鼻を拭いてくれた。涙の湖が干上がるのを待つしかないよ、と言う。なかなか時間はかかるがの。なぜって時は春。積もった雪が全部とけて、流れこんでくるんじゃから。たぶんジェイクはいい加減なことを言ってたんじゃないと思う。だって、ホントに時間はかかったから。でもとうとう泉は湖は干上がった。のどと胸がヒリヒリしたけど、気持ちちは納まった。ぼくがまず知りたかったのは、ジュディスとアルセニオがどこに居たってことだった。

「家じゃよ」とかれは行った。

「ぼくも行ける？」

ジェイクはパイプを吹かしてこっちを見た。「余裕は十分にある」

「行きたい」

「我慢するんじゃ、坊や。家にもいろいろあつての」

「ジュディスとアルセニオに会いたいんだ」

「他にもたくさんいるよ。何千人、何万人とね。行方不明の子、かわいそうな子、身体の不自由な子や病気の子。戦争ではいつもたくさんの子供が犠牲になった。飢饉や伝染病でも。シュメール、ザクセン、ボンベイ、ペルー。どこでも、いつの時代にも」

「え？」

「人はみんな駒を持っているんじゃよ、ジョン」

「駒？」

「ドミノじゃよ。一人にひとつ。前に話したじゃろ」

「見せて」

「すぐ分かる。ここで暮らすのなら場所が必要じゃ」

かれはゆっくりと立ちあがった。ネコがギリギリまでしがみついていたけど、とうとう床に転げ落ちた。ジェイクは部屋を横切って、黒い箱を手にとると、戻ってきてすわった。何だか訳の分からない言葉をつぶやく。もう一度つぶやくと、もともと黒い穴みたいだった黒い箱が、もっと黒くなった。どんどん黒さを吸い込んでるみたいだ。シューッという音がして、いきなり箱が開いた。中にはドミノだ。

上段には長い列があり、ソウルに始まり軌跡で終わるよう揃えられている。地面に落ちて汚れる前の、降ってくる雪みたいに真っ白だ。生えたての歯みたいに。丸は石炭みたいに黒い。ジェイクは、ひとつ、またひとつとドミノを取り出して、床に置いた。

「さあ、選びなさい」

「え？」

「ひとつ取るんじゃ」

そんなの簡単だ。どれが欲しいか決まってる。ぼくはツインに手を伸ばした。ところが、拾い上げてみるとそれはツインじゃなかった。片方に六つの丸、もう片方にはなにもないやつだ。

「ビッグ・アイス。宮殿だ」とジェイクは言った。

「こんなのいらない。別のがほしいんだ」

「なるほど」ジェイクは眉をひそめ、こっちの顔をうかがうような目つきをした。

「ツインが欲しいんだ」そう言って指さした。「あれだよ」

ジェイクはあごをさすった。「うーん」と唸り、髪をいじった。とうとうぼくの手からドミノを取ると、床に戻した。それから全部をかき混ぜる。

「どれでも欲しいのを取りなさい。最後のチャンスじゃ」

このあいだみたいにめまいがしてくる前に、ぼくは欲しいのを見つけた。よし、これだ、と自分に言い聞かせ、深呼吸する。手を伸ばしてそれを拾い上げた。

前と同じのだ。六と何もないやつ。恐くなった。ちらっとジェイクを見ると、こっちを見てないみたいだったので、元に戻そうとした。でも戻らない。手にくっついて離れない。これは魔法だろうか。何が何だか訳が分からない。でもいやだ。また泣きたくなった。

「助けて」

ジェイクはこちらを見て微笑み、ぼくの手からドミノをとった。指で丸をひとつづつ撫

でるとなずいた。

「これがおまえのだよ、ジョン」

ぼくは首を振る。「いらぬよ」

「それでもじゃ……」

「家へ帰りたい」

「そうじゃろうとも」

ぼくは立ち上がって歩き始めたけど、前には進まず、同じ場所のままだった。見まわすと、部屋がどんどん広がっていきみたいだった。椅子、テーブル、クッション、みんな大きくなっていく。ドミノも。床にべったり張り付いてたのが小さな箱へと変わり、それが大きな箱へ、もっと大きな箱になっていった。そしてぼくの頭のずっと上の方で、何かくるくる回ってた。

それは日射しの中の鏡みたいに輝いて、ぼくの体を照らしてる。あれは何だろう。するといきなり、何かが空中でそれをつかんで、ぼくの横の床に置いた。分かった。

それはほかのドミノと同じ大きさで、ぼくはアルセニオとジュディスがどうなったか思いたした。ぼくはあの二人みたいに小さくなったんだ。でも恐くはなかつた。逆に、勇気が湧いてきた。さあ、冒険だ。

ドミノの端をつかむと、腕でからだを思いっきり引っ張りあげ、脚でからだを蹴りあげた。やっとこさ上までよじ登ると、今度は穴に落ちそうになった。反対側の方が安全そうに見える。けどあっちに行くには、まん中の線を飛び越えなきゃいけなかつた。そこにも落ちそうになった。向こうに出ると、ドミノが大きくなり始めた。

どんどん明るくなって、明るすぎて目を覆わずにはいられない。ピカーッと光って、輝きは失せた。ジェイクやネコ、ひょっとしたらとうさんやかあさんがいるものと思い、ぼくは目を開ける。でも、ぼくが目にしたのは大雪原と、はるか彼方の建物だった。雪には足跡がついていて、子供がたくさんいた。けど、これだってもう話しすぎてるんだ。相手もドミノに住んでるなら話せるけど、でもそれなら分かってるはずだから、話さなくていいよね。それにどのみち、だれでも自分のドミノを持ってるんだ。ジェイクはそう言う。つまりみんなもう分かってるってことだよ、そうでなくても、わかることができるんだよね。嬉しいな。そしたら話さなくてもいいもの。どうあっても話さなくていいもの。



## 溺れてしまえ

女はアンドロイドだ。ジョニー・ジュークスには判っていた。ダンスフロアの端で熱狂の渦から離れ立っているその姿は、クールで醒めている。ブロンドに近い砂色の髪はシャープにカットされていた。片側はストレートで肩に触れるあたりで切りそろえ、目を半ば覆っている。反対側は耳の上まで刈り上げた。青々とした頭皮には細い血管が小波のように浮かんでいるのが見える。その血管に入れ墨で縁どりしていた。何千メートルも離れたところから見た水路みたいだ。水の音楽。バンドはクズみたいなリフをして、一気になだれこんだ。

女が人間ではないことを、ジョニー・ジュークスはその目での確に見取っていた。壁の角にしがみつくように立っている。愛想のない目で瞬きもせず、うねるように踊る人波を見つめていた。片手の長い指を、茶色のボトルの底に巻きつけ、脇に置いている。ボトルを口元に運び、流し込む。車にオイルを足すみたいだ。視線は微動だにせず、飲み下だしもしない。終わると、手の甲で口を拭った。唇は頭皮に浮いた血管のように青ざめている。

その半階上でボトルを弄びながら、ジョニー・ジュークスは女を見つめ、わかっていた。女は張り詰めている。刀の鞘のように、壁ぎわに真っ直ぐ立っていた。しなだれかかっている。格好も決まっている。服は黒でブーツだけが赤だ。愛の刺。悲鳴のようなギター・ソロが、踊ってる連中十人の頭をなぎはらう。

ジョニー・ジュークスは見つめ、わかっていた。あの女をモノにしなくては。見たこともないほどイカす女だ。

場面はこうだ。ジョニー・ジュークス、若い男、白人、髭なしが、デフ・クラブのテーブル席にひとりで座っている。格好つけて、ボトルで飲んでいる。必要なら格好つけるために煙草も吸う。前も後ろも童貞。気にしてなかった。今夜までは。

愛はこんな風に訪れるものだと聞いたことがある。音楽のように。突然、心をわしづかみにされるように。過去など関係ない、選択の余地もない。屈伏するまで心をわしづかみにされる。息もできない。心休まることもない。濁り荒れ狂う底知れない海に浮かぶノアの箱船を見つけても、屈伏して自ら海に身を投じる。溺れる方を選ぶ。それが愛だ。

ジョニー・ジュークスは椅子を蹴って立ち上がった。マッチョなライダー気取りで、残りの液を喉に流し込む。革ジャンをはおって、ファスナーを上まで閉めたあと、思い直して半分開けた。肩のポケットからサングラスをとり出してかける。視界は十分にあった。ちょっと睨みをきかせれば、みんな道を開ける。

後ろは二階のバーだった。三階と一階にもバーがある。三つとも混んでいて、ブラック・ホールのように人を吸い寄せていた。甘ったるくむかつくアルコール臭い息が煙草の煙と混ざって、空気を淀ませている。その下ではドラッグへの希望が膨れ上がり、その匂いが毛穴から絶え間なくにじみ出る。押し合いへし合いしつつ、みんな間近の相手にも叫ぶ。三センチ離れて大口を開け、太く厚い舌を絡ませて吸いあってる面ども。誰もタフ・ガイ、ジョニー・ジュークスに気づかない。

人混みをかき分け、失礼と言いつつ進んだ。二人が同時に息を吐いたりして、ナイフ一枚ほどの隙間でもできたら、そこに飛び込む。肩で横向きに割り込み、人混みが揺さぶられて、次の隙間ができるのを待つ。こうして階段にたどり着いた。

階段は見えなかった。密集した人体パーツの下なのだ。そのてっぺんに別のからだが飛び降りてきては、運び去られるか地面に落とされる。汗ばんだ赤いスーツの男が、ジョニー・ジュークスの足元に落ちてきた。脇をおさえて身を丸め、苦痛と安堵でニヤリとする。ジョニーは革ジャンを整えると跳んだ。若く、炎のような自信を持っていた。虫けら人間どもが呻き、その触覚じみた指が彼を引き下ろす。ジョニーは背中から床に落ち、他の人に踏みつけられる前に起きあがった。あの女を捜して視線を走らせる。女は同じ場所にいた。近くに来たら不安になり、ファスナーを弄んだ。タフ・ガイのジョニー、またの名を青二才、空威張り、大格好つけ男は、己れの真実の縁で自分を持て余していた。強烈だ。実はこの子、これまで一回もやったことがない。一度も。2Pでも3Pでも4Pでも、棒やゲージを使ったのも、プラズマ剤も活性剤も選択剤を使ったのも、まるっきりなし。外宇宙並にきれいさっぱり。

ベースが超低周波音を奏で、それが括約筋を弛緩させ、デフ・クラブ中の回路をジャミング。

ジョニー・ジュークスは身なりを整え、胸の内に計り知れない欲望を抱いて行動開始する。垢抜けないにきび面の少年少女や、役員昼食会や気取った無意味な朝食会にでる仏頂面のやつらとぶつかった。乱闘を押し分けてて突き進む。興味はないが、でも喧嘩を見て血が踊る。態度は、クラブのソロ・テーブルで覚えた。ナンパの手口は見よう見真似。暴力は興奮剤。

ジョニーは壁ぎわの女にたどり着き、その目と鼻の先で全身ふんぞりかえる。

「1足す1は1だけ」

女はその綺麗な顔から蛇のような一瞥を抜きはなつ。

「消えな、坊や」

「ジョニー・ジュークス。逢えたんだ。冷たくするなよ」

「メーターは切れてる。端末もダウン。お門違いだよ、坊や」

「ジョニー・ジュークスだって」とばかみたいに繰り返して、女の剣幕に呆然とする。「イカせ。最高」

女の胸が上下（デフ・クラブでため息とは？）、青い唇の端を少し上げる。「鍵なんかないよ、坊や。えらきゃその気にさせてごらん」

ジュークスは微笑んだ。紙のように脆く、気が大きくなっていった。女が顔の向きを変える気もなさそうなので、後ろの群衆を押し退けて真っ直ぐ退く。革ジャンのファスナーを下ろし、女が微笑をくれると、下まで下ろしきった。氷のように滑らかな胸と腹が露わになる。頭上のステージでは、バンドが首を刎る演奏。火が吹き、獣どもがアンプから飛び降りる。ジョニー・ジュークスは踊りだした。

速いが軽くはない。きれいだが優雅でない。動きはシャープに、独特のリズムで慎重に。女は見つめ、感心し、おもしろがっている。この坊やには何か感じる。でも感覚はボトルと肌の膚板でメロメロ。どうも抑さえがきかない。リラックスして流れに身を任せよう。デフ・クラブでの人生はお気楽。

ジョニー・ジュークスは踊り続ける。痙攣とむき出しの形態。頭をよじると、サングラスが吹っ飛ぶ。それをかかとで踏み割って女を笑わせる。彼女はボトルを空けて床に転がし、それをブーツの先端で蹴とばしてよこす。ジョニーはつま先でその首をあっさりへし折り、床ですり潰す。期待をこめて見上げると女が微笑んでいる。ジョニーは踊り続けた。

心をよぎったのは、明るく羽ばたく鳥、船の底で跳ねる魚の尾。火花散らすアーク溶接機。己れ自身の臆病さに捕われてしまう。情熱の、聞く耳持たぬ、向こう見ずな嘘に捕われてしまう。初めての恋と、手に余る肉体の前に自らをさらす。この女を味わうために神殿の列柱を引きずり下ろす。女の肉体のために。そして真紅の海が、汚れた好色な海が尋ねる。肉体って、何の話だ、と。所詮女はアンドロイドじゃないか。

ジョニー・ジュークスはそれですべて落ちついた。知りたくなった。どうすればいいんだろう。俺と同じにその気になるんだろうか。アンドロイドにできるのか。ジョニーはセックスのことは何も知らず、へまを恐れた。そアンドロイドだと何かちがうのだろうか。どうすればアンドロイドを満足させられるのか。

女に近寄り、顔を寄せて、香りを吸い込んだ。女の体内にはクスリが入っている。それに性的興奮のすばやい小分子も。女が呼吸すると鼻孔が広がった。

「俺をキメるかい」ジョニーはかしこまってきいた。

「いいよ」手を動かして指で彼の胸をなぞる。「顔に書いてあるだろ」

ジョニーはバカみたいにニタついた。感覚が爆発して一時的に麻痺を起こす。女に掴みかかりたいのに、接続がうまくいかない。他の人がしてたのを真似て、舌を突き出した。女は顔をしかめて手を引っ込める。何かを思いだしたようだ。

「引っ込めな、坊や」クールに言った。

この命令で口を閉じ、女の顔を不安そうに見つめる。「ジョニー・ジュークスだって」と退却しつつ言う。

「それでいい」少し語調を和らげ女が答える。「あたし、顔でヤったりはしないんだよ、ジュークス」

「ごめん」こんな台詞を言わなければならないのが残念だった。女は気にしていないようだった。指で自分の刈り上げ頭の青筋に触れる。

「この場面、前があるんだ」考え込んで女は言った。

「初めてだよ」とジョニーが反論。

「何かってと」ゲーム運びを考えつつそれに応じた。確かに前にもこんなことがあった。彼にフロアでキメられ、続きをしに部屋へ行った。でも先が思い出せないし、先はなかった気もする。危険な香りにそそられる。女は心を決めた。

「行動開始。秒読み」そう言って向きを変える。

人混みをかき分け、同じフロアのバーへ行くと、だれかの背によじ登ってカウンターにコインを投げる。手を伸ばして栓の開いたボトルを二本つかみ、床に降りると、尻で人を押し分けながら戻った。ジョニーは女の後について、奥の空いたテーブルに向かった。

「風呂なんかする、ジュークス？」ビールを一息で半分空けてから、女が聞いた。彼は首を振る。

「あたしも。あたしの仮説だけど、いつかみんな溺れ死ぬんだ。ここで燃え尽きてからね。人は水から生まれ、水で終わる。理屈に合ってるだろ」

フロアではバンドがセブン・ナインをがなり、ボトルがテーブルでガタついた。俺はもう溺れかけてる、とジョニーは思った。

「あんたは今まで逢った中で一番イカス女だよ」

女はのけぞって笑った。「そろそろ本題に戻ろうってわけかい、え、ジュークス」

「一目見た時から、あんたが心から離れないんだ」

「欲望ってのが流行りだもんね」

彼は首を振る。「これは愛だ」

女が眉をひそめる。「なら本腰入れようか」

女はブーツの片方から小さな彩色ケース入りのプラスチック片を取り出すと、ひとつ剥いて歯茎にくっつけた。もうひとつ取ると、指先でつまんでジョニーに勧める。彼はそれを受けとり、女を真似た。

「あたしの考える愛って、こうだよ」と言いながらも、からだは川のように自分から流出しはじめる。女ははちきれそうな乳首を押さえようと胸をつかんだ。「それはお菓子みたいに箱入りでやってくるんだ。でもラベルがない。だから店へ行っても、買ってるのが何か分からない。そいつは海底の大きな倉庫で造ってるんだ。暗闇の中で箱詰めにして。光があたると壊れちゃうから、暗くなきゃいけない。愛にとって、光は致命的。分かる？ ジュークス」

「どうしてもあんたが欲しい。こんな気持ちになったのは始めてだ」

「昨日の夜もそうだったろう、坊や。ただ、あの時はサングラスをしてたね。あんたの目が見えなかった」

「違う。俺はそんなやつじゃない」彼は傷つき、混乱して言った。

「みんなそんなやつだよ」ボトルを飲み干しながら女は答える。「十分にブーストされれば」彼を見た。

「あたしがやらないって言ったら？ あたしはそこらのニイちゃんネエちゃんに裂け目を開いたりほしくないからね」

「わかった」彼は静かに言って、それからカッとなった。「そんなの構うもんか。本当だ。あんたが何だって気にしない」

女は男をちらっと見て笑った。「あたしをわかった気になってるね、え、ジュークス。遠くからあたしにスキャン入れて、引き金に指かけてわかった気になってる。頭の中で勝手な想像デッチあげて、それで全部だと思ってるだろ」テーブル越しに身を乗り出して、邪険に彼の革ジャンを掴む。「言っただろ、ジャック、鍵なんかないよって。ブツは海底にあって、しかも深いんだ。海ってのがどんだけ深いか知ってるかよ」

ジョニーはおびえた目で女を見てうなずく。訳が分からずきょとんとしていた。女はそれを見て手をゆるめ、椅子に戻った。

「許。まったくやんなるよね」そして微笑むと指で男の頬に触れた。「可愛いじゃない。もう一杯つきあってよ、そしたらランかけようぜ」

彼はわけもわからずうなずき、手つかずのボトルを差し出した。なんとか軌道回復できるかも。女は液を飲み干すと立ち上がり、フロアの奥の暗い廊下へと大股で向かった。歩調は驚くほどしっかりしていた。ジョニー・ジュークスはアヒルの雛みたいに後に従う。そのプログラムは男性性の予告とともに膨張開始。

短い廊下の途中には何も書かれていないドアが三つ。向かいの壁沿いでせわしないの

は、密室で急いで一発キメたがってるダイバーども。憐れな連中、ギョロ目で蒼白顔。もじもじ。混じってるのが、客の小便止め用に入り口で渡される制尿剤を飲み忘れたやつら。男が一人、我慢しきれず、スカートを脱いで隅で放出。

ジョニー・ジュークスのドリーム・マシンが、浅瀬の鮫みたいにその場に参上。女はドアを一回だけノックし、五秒待って、肘から先全部をドアに叩きつける。スライド錠は脆くも弾け、ドアがバタンと開く。次の五秒で、顔の赤いスキン・ヘッドを引きずり出す。男はズボンを膝まで下ろしたままだ。

「マスかいてやがる」と女は吐き捨て、唾然とするジョニーの襟首をつかんで引きずり込んだ。ドアを叩きつけ、ドアの下にしっかりくさびを挿入。念のため、便器とドアの間にゴミバケツでつかい棒。そして男に向かう。

「さあて」女の体が個室を満たし始める。「さて、さて」

ジョニーは餓えて女を見つめる。どうすればいいのか分からない。女の服を引きちぎりたい気もするけど、激怒するかも。これ以上のことをしたことがないのだ。クラブで聞きかじった台詞は役に立たない。目が眩み体はカチコチだ。

女は違った。今の自分のすばやい行動に興奮し、さらに求めていた。意識が遠のき、体は若い惑星のマントル状に沸騰。己れの欲望の対象にとびかかり、上着をはぎ取る。ふるえる指先で、肌を首からへそまでなぞる。骨のようにむき出し。

腹に触られると、ジュークスは女の手首を折れるほどきつく掴んだ。痛み越しに女は微笑した。自分の力に自信が持てた。ようやく手を振りほどくと、男のパンツの紐に手を伸ばす。男は一回、二回、三回と平手打ちをくらわす。男に精気がみなぎる。

肘をつかんで女を持ち上げ、便器にのせる。後ろの壁は割れた鏡で、その上にはクラブの音響室につながるスピーカ。写る自分のかけらは気にもとめず、つま先立ってスピーカに近づく。つまみを最大までひねると、突然その小部屋にノリが出てきた。バンドは致命傷入り口寸前。デフのベースは毛細血管の壁とハーモニーを奏で、肌に血の斑点を露出させる。高音域ではソロのラインが神経の鞘とシンクロし、どうしようもなく筋肉を引きつらせる。男は女に向かい、振るえる指で服を引き裂いた。

女は彼を見る。その少年じみた顔の熱意が記憶に引っかかる。男が両手で豊満な胸を掴み、「まるで本物だ。生き生きしてる」と畏敬をこめてつぶやくのを耳にした時、思いだした。膚板、彩色ケース、ボトル越しに、昨晚のことを思いだした。初めはおかしかったが、やがてちょっと悲しい。あんなことを忘れるなんて、どうかしてる。

男の手を押し退けると、便器から下りた。話をしようと思がつくが、ジュークスはもう膝をついて女のズボンを引きずりおろしている。スポンとある一線を越えてヒップが露になるり、ズボンは足首まで落ちた。男は喘ぎ、女は彼の目の前に裸で立っていた。汗

の滴が女の恥毛を濡らし、紛れもない人間の香りが空中に満ちた。己れの嘘にとまどい、ジュークスは見つめるばかり。

女は微笑みかける。可能な限り親切な微笑を。男に触れて、そっと立ち上がらせた。彼が止める前に、すばやく男のズボンの紐を解き、引きずり下ろす。両脚の出会う正面はつるんとして無毛。折り曲げた肘の内側のようだ。あるいは指の間の性のない水掻き、と女は思った。

ジョニー・ジュークスは下を見なかった。もう十分ショックを受け、今までで一番綺麗な女の体に背を向ける。彼の目が割れた鏡を捕らえる。そこにはアンドロイドの何百という小さな部品が、何百という意識を麻痺させる真実が映し出されている。心は千々に乱れた。その時、バンドの演奏が静かな曲に変わった。無情にしみわたる旋律。死局と肉体の夢もどきを派手に邪魔する、最高の曲だった。ジュークスは意識を失った。曲に串刺し。または、非情な真実の突風に。デフ・クラブでは、原因と結果を区別するのは難しい。

女はため息をつき、あの感覚を取り戻そうと、ぼんやりと自慰にふける。無駄なこと。貼薬ドラッグは切れ、もう一つやる気もしない。ジュークスは身動きひとつしない。誰かがドアを叩いた。

女はズボンを引き上げると、シャツを着た。自分のがすむと、床に落ちていた革ジャンを拾い、何とか袖だけ通してやった。男は不動で、その表情は空中で止まったパラシュートのようにつかえたまま。女はズボンの紐を結び、革ジャンのファスナーを上げると、一步下がって今一度この少年の全身を眺めた。麻痺状態で衰れを誘い、いとおいしいほどだ。女は自分の欲望に混乱し、怒り、恐た。自分が機械とやっていたかもしれないなんて、考えるだに恐ろしい。

「愛には光が致命的なんだ」と女が言う端から、その言葉は力を失う。「キメてみな、ジュークス、きっちりキメてみな」

女はゴミバケツをはたき落とし、くさびを蹴りとばして、男を押し出した。青ざめた少年が入れ換わりに飛び込んで、ドアをバタンと閉めた。フロアではバンドがまた派手にがなっている。場は大ノリで盛り上がっていた。ジョニー・ジュークスは意識を取り戻し始めた。

女はさっさとテーブルを見つけると、男をすわらせた。体裁を保つためにボトルをもたせたかったが、彼の目がキョロキョロと同期して焦点をあわせ始めると、席を立った。フロアの隅にあるドアのそばで、女は立ち止まって振り返る。彼がものほしげにフロアを見渡しているのを見て、ぞっとした。だれかのボトルをひったくり、液を流し込む。そして外に向かう行列に紛れた。

ジョニー・ジュークスはテーブルにつき、ちょっと戸惑いつつも、すぐに自分を取り戻

した。バンドの曲が頭にきつく響く。回路は快復し、心の奥底で愛の刺が動き始める。あたりを見渡す。今夜は決めてやると思っていた。



## CWとのインタビュー

CWの家はとても見つけにくい。都心部の袋小路にあり、すごく狭い路地を抜けて大通りに出るようになっている。番地表示はなく、高い生け垣に囲まれていて、そこにかろうじて見つけられる小道があるのだ。刺のあるブラックベリーの繁みが行く手を阻み、有毒のブナの木も生い茂っている。これほど熱心な招待を受けていたのでもなければ、さっさと帰ってしまったことだろう。しかしこのインタビューは、彼がおよそ三十年ぶりに許可したものだ。おそらく次の機会はないだろう。

この記念すべき日、何かの予感をはらんだ空気が重々しい。ひどい料理が出される、とか。ポット型の雲が板葺き屋根の頂近くに低く垂れこめている。大ガラスだろうか、大きな鳥が軒先に集まっていた。古く朽ちた窓辺の植木鉢には、綺麗な花がこぼれんばかりだ。ヒマワリ、ニワナズナ、キンポウゲ、シスタス、その他見たこともない植物が目に入る。家に近づくと突然道が煉瓦敷きになり、両側には大きな素焼きの鉢がある。空っぽのもあったが、ほとんどののは、まるで壊れて風雨にさらされた彫像の終息の地のようだ。長い首をギザギザに折り曲げられたフラミンゴがある。それに片耳と鼻の欠けた踊るクマ。ある鉢の中では片翼のとれた天使が、アザラシの鼻の上でバランスをとっているし、他のからは頭部が鋼鉄の芯だけになった胸像が突き出ている。玄関の扉に近づき、中の物音に聞き耳をたてたが、いつもの都市の騒音が低く聞こえるだけで、時折カラスが耳障りな鳴き声をたてる。扉にはノッカーがなく、呼び鈴も見あたらない。拳で五、六回叩いてみたが、誰も出てこないので諦めた。招待状に、非情に寝起きが悪いのでご無礼の際はお許し下さいとあったのを思いだし、CWの目を覚ます方法を探した。空の鉢に木のバットが立ててあり、ルイスビル・スラッガーとかなんとか書かれている代わりに「最後の手段」とある。グリップは握り易く、ひとたびバットを手にしたらどうすればいいのかが分かった気がした。最後にもう一度ノックしたが返事がないので、バットを振り上げると扉を打ち壊した。

驚いたことに扉の向こうにまた扉があった。ガラスでできていて、ノブを回したら簡単に開いた。中に入ると玄関ホールは暗く、ドイツ料理の匂いがする。すぐにCW本人が迎えてくれた。

他の人と同様、CWにも体に染み着いた臭がある。豊熟した匂いだ。赤身の肉だろう。握手をすると、玄関ホールと同じくらい暗い部屋に案内してくれる。ランプをつけてくれた時、初めて彼の顔がわかった。

背は低く、ずんぐりしていて腹が出ている。顔中に生やした髭にはパン屑がついてるし、どうしようもないほど絡まっている。太くて濃い眉の陰に隠れた目は読み取れない。眉の上、額のまん中あたりに頭蓋骨に穴が開いてるかのような窪みがある。

かれは擦り切れた肘掛け椅子に座り、わたしにはランプの近くの椅子を勧める。いたるところに本があるので気をつけて歩いた。本棚やテーブルの上だけでなく、床にも積み上げられているし、椅子のクッションの端にもぐるりと挟まっている。私の後ろにも一冊あり、脇にももう少し薄い本がある。後ろのが「アイネーイス」のラテン語版で、横のはジェーン・フォンダの「ワーク・アウト」だ。落ちついたところで、テープレコーダーのスイッチを入れた。

CW: (私が床に置いた本を指さして)「バーバレラ」だ。ご存知かね。

OB: 映画は観ました。もう何年も前ですが。

CW: この題名は曰くつきなんだ。バーバはラテン語で髭という意味。レラはスペイン語の女性代名詞。髭を生やした女ってことだ。ひょっとして半陰陽者かもな。あるいは、剃刀を使うのが好きな女とも考えられる。聖書に出てくるデリラを思いだしたよ。映画はほとんど期待外れだったがね。バーバレラは生意気だけど人畜無害だし、セックスのお供としてはしょせん代用品だ。

OB: 変わったお宅ですね。どうしてこの家を買われることになったんですか。

CW: ここの敷地はもとダイオキシン捨場だった。死の恐怖が、地価を下げたんだ。もっとも突然変異の方が恐かったのかもしれない。わたしはそのころ貧乏だったし、気分も懐具合に見合ってたからな。もう三十年も住んでる。ほんの小さな腫瘍一つできただけだし、すぐに摘出してもらえた。

OB: 「粉々の男」の中で、そのことについて書いていらっしゃいますね。気の滅入る本でした。

CW: そうかい。わたしの記憶では、あの数ヶ月はかなり陽気だったんだが。意気揚々としてた時もあるよ。

OB: 主人公は発狂しますね。確か、偏執性の精神病ですよ。

CW: 腫瘍をとった後、脳が膨張するのを抑える薬を処方されてね、それが精神におかしな影響を及ぼしたんだ。何週間か精神病院に入るはめになって、その間にあの本を書いた。初稿を一週間で仕上げて……その間一睡もしなかった。一週間後にあまりにひどい出来だったんで燃やしたよ。それにヤバいやつの手に渡したくなかったからね。回文の暗号

がいれてあって、下手をすればしかるべき方面に派手な動揺を招きかねなかったんだ。うまくバランスを保つために、最終稿ではそれを反回文に置き換えた。出版してほとんど反響がなかったのが、私の成功した証なんだ。

OB: あなたは、ここ数年のことでとても有名になりました。いろいろなことがあなたの功績とされましたね。それについてコメントをいただけないでしょうか。

CW: 別にないなあ（微笑みを浮かべて）、あんた、せっかく苦労して、とっつきにくい相手に会ってるんだ。何がききたいのか言ってごらん。

OB: あなたがしたと言われている情事はいかがですか。女には子供を認知しろと訴えられ、男にはあなたが病気を移したと非難されてますね。

CW: わたしは大きな文学運動を二つ生み出した。何百という劇やオペラにも協力した。エッセイや小説を書くし、翻訳もする。なのにあんたは情事の話が聞きたいと？

OB: 有名人のセックス習慣は世間の興味の的なんですよ。

CW: 「思春期のつぼみ」かね？ 常識的でありきたりのセックスはファシスト精神の産物だと言いつけてるじゃないか。ファシズムではセックスとその産物を権力の道具とみなす。州政府が有害廃棄物遺棄場にする前、ここに何があったかご存知かな。売春宿だよ。一鳥二石ってやつだ。（含み笑い）政府としては、突然変異の巨大売春婦にだけ注意してればいいってわけだ。

OB: あなたのことを「言語」作家と呼ぶ人がいますが、どういうことかご説明していただけませんか。

CW: 人によっていろいろだな。詩人にとっては構造的な、構築的な感覚だ。散文書きにとっては、むしろ目に見える質の高さ。広告業界の幹部連中にはガツンとくるコピーを意味する。叔父のアーサーは、言葉なんか何の意味もありゃしない、と言っていた。おもしろい言い方だ。そのとおりなのかもしれない。全ては読み手の問題なんだ。

OB: それでは読者への挑戦を信じてらっしゃるんですね。

CW: 何年か前にこんな歌があった。たしかヴァンデラス・アンド・マーサのだったと思う。「あなたの服装なんかかまわない、ただそこにいてくれるだけで……」本も同じだよ。戦わなければ戦いにはならん。もちろん、読み方を知らないというんなら話は別だがね。そうだとすると、パウンドがかつて漢字について言っていたように、ことば自体だって絵文字のような性格を持っているんだ。例えば我々のアルファベットは、現代の生活様式に完璧に合っている。迅速かつ簡潔に、急所を突く。一番雄弁な一刺しは、もっとも深いものではなく、もっともスムーズなものだろう。

OB: 「見え透いた涙」では社会を、皮下注射針、ヴァチカンへの旅、特に深い眠り、となぞらえていらっしゃいます。あなたの作品には多くの人があまりにも冷酷だと感じる一

面がありますね。みんな、われわれの知っている現実とはかけ離れていると思ってるんですが。

CW: そんなのを鵜呑みにしちゃだめだ。みんな夢中になってるじゃないか。

OB: 売上げはずいぶん落ち込んでますが。

CW: ばかばかしい。人は真実だと信じることを書かなきゃいけないんだ。さもなければ、偽りと分かっていることを。言葉は自分のこだわりの力を備えていなければならぬ。それと、これは発音障害の不愉快な苦痛に徹底的にさらされた人からの忠告だと思っていたんだけど、何かを宣言すれば、それなりの報いがあるんだ。ビルマのジャーナリストで「マ、マ、マ、マ、マ」は、抑揚に次第で「馬を助ける」という意味にも、「狂犬がやってくる」にもなる。

OB: あなたがそんな例えを使われても驚きませんよ。あなたの作品の多くで、狂った生き物はサブテキストでした。「進化のリスク」の偏執的なチンパンジーと、「家庭でのいらだち」の過激なオウムがすぐ心に浮かびます。アドリアン・ボロックス卿の「動物世界に慰めを見出すような人は、ネズミに生まれればよかったのだ」という言葉を思い出しました。あなたは逆の考えをお持ちのようですね。

CW: あんたには悪癖があるかね。わたしは、悪癖を持つことが重要だと思ってる。多いほうがいい。その場合は、首尾一貫したふるまいの問題となる。悪癖を持ってはいるが、ひとつだけだと確信した時、我々は落ち込んだり、自分をいじめたりしなくなる。人はなかなか、自分という有機組織をありのままに見て、受け入れることはないものだ。おっしゃるとおり、これは必然的に混乱につながる。人だろうとネズミだろうと、大差はない。作家がこんな状況について書く時は、たぶん実際の経験から語ってるんだろう。

OB: 焦げ臭いですね。何か火にかけっぱなしになってませんか。

(CWは鼻をつまむと、椅子からとびあがった。とびあがるとは言っても、あの年齢と状態の人間に可能な範囲でのものだが。出ていってすぐに戻ってくる。がっかりしてはいるが達観した表情だ)

CW: 肉はもう黒こげだったよ。鍋はたぶん使い物にならんだろう。これな何かのお告げかもしれんな。今でも食べ過ぎなのに、止めようって気にならないんだ。何の話だったかな。

OB: なぜ三十年もインタビューに応じなかったんですか。その沈黙を破り、なぜわたしに？

CW: けっこう、けっこう。ここ何十年間かは非常に忙しかった。代謝的に言えばだがね。認識論と、顕微鏡での仕事で手一杯の状態だった。事実は消化吸収されねばならぬ。耳ざといのは災いのもと、思慮分別には時間がかかるということだ。

なぜあんたかということ、あんたの手書きの字にはハッとさせられるものがあったんだよ。筆跡は運動神経系の親和性を示す。あんたなら気が合うに違いないと確信したよ。それでその通りだったろう。あなたは予定通りに扉を壊したし、それなのにわたしの料理にケチをつけていない。わたしの評価は正しかったわけだ。

OB: お目にかかれて本当に光栄でした。インタビューは今日中に記事にするつもりでしたが、なんだか眠ってしまいそうです。

CW: ごく正常な反応ですな。部屋に満ちたことばのせいなんだよ。大いなる退屈の源。にもかかわらずすばらしい夢の源。

わたしはふらふらと立ちあがった。テープレコーダーのマイクが床のすぐ上でぶらぶらしている。部屋の中の空気は、町中より悪いわけではなかったが、それなのにクスリを盛られたような気分だ。CWが介抱しようと椅子を立ったような気もするが、定かではない。自分でなんとかそこを辞したのかもしれない。出口の扉は見たところ革製で、かなりくすんでいる。扉の両側は葉の大きなバナナの木だ。扉を押すと一瞬にして輝く太陽の下に戻った。さっきあった黒い雲はもうない。

帰りの小道は来るときの小道よりずっと美しい。道沿いに、ひなぎく、チューリップ、すみれが植えられている。小人楓と樺の木陰に石楠花の花が咲いている。小川のせせらぎが遠くに聞こえた。

立ち止まって最後にもう一度家を見る。側面にはツタがびっしりと絡まっている。苔や地衣が窓と敷居に生えている。ネコが一匹屋根の上でひなたぼっこをしているし、ツタの窪みにはつがいのサルが眠っている。本当に変わっている。

早く印刷にまわしたくて、わたしは家に背を向けると道を急いだ。



## 男の恩寵を捨てて

オリンピック開会四週間前、聖火がネバタ州の北部、グレート・ベイシンのどこかを運ばれてつつあり、晩春の雨で広漠たる砂漠の荒野に花が咲いたりなんかしてる頃、Tは欠勤がちになった。上司は子供も大きくなった心優しい女性だったが、ある夕方Tをオフィスに呼んだ。フォーマイカの机の上にはビデオ・モニタが置かれ、中の回路が机に散乱している。古臭いマイクの切れた線が、端からぶら下がっている。Tは不安げに机の上を見つめ、壊れたパネルに手を伸ばした。

「掛けてちょうだい」手を止め見上げる。上司が椅子を勧めた。

「ほら、すわって」かれはキョトンとして腰掛けた。

「最近欠勤が多いわね。どうかしたの」

ぶら下がる配線をを見つめ、首を振った。

「どこか悪いんじゃないでしょうね」

首を振る。

「休むんなら、連絡くらいは入れなさいよ。せめて電話しなさい」

顔を上げると、キョトンとして頷いた。

「ちょっと休みを取ったらどう。もう一年以上お休みを取っていないわよ」

Tはモニタの消えた画面を見つめた。動くようにしてやりたい。

「お金の問題？ そうなの？ お金があるの？」Tは自分の姿が画面に反射しているのを見て、すぐに目を反らした。上司はその急な動きを、自分の質問への答えだと思って、心得顔で微笑んだ。机の一番上の引き出しを開け、札を取り出す。

「ほら。次の給料で返しなさいよ」

Tは金を受け取って立ち上がる。上司はちらっとかれに目をやってから、机の上にかがみこんでモニタの中をいじくり始めた。Tはちょっとだけ待ち、部屋を後にした。

その日は仕事のあと何時間も病院に残り、精神外科から届いた新しいビデオを見た。顔のほとんどを覆っていたけど、その執刀医が誰かは分かった。患者は手術中も意識を保っていた。磁気によって多幸症を誘発され、一種の分裂状態におかれているのだ。執刀助手たちと愛想よく話をしていたが、時々 脳のある部分がいじられている時 まるで話

の意味が通らなくなる。ある時は「顎骨」と十八回続けて繰り返した。

見終わるとTはマスターテープを棚に戻した。見ながらダビングしたテープをコートのポケットに入れる。後手でドアに鍵を掛けると、頭上のパイプを流れる下水の音が静かに響く地下の通路を通過して、病院を後にした。通りに続く重い鋼鉄の扉を押し、霧と冷気の夜に踏み出す。かろうじて街灯が見える。病院もガーゼに包まれているようだ。Tはコートの衿を立て、ポケットに手を突っ込んだ。片方に上司のくれたお金が入っている。すっかり忘れていた。

その金を握りしめつつ、渋い顔をして考えこみながら、バスを待った。ビデオの初めあたりで、患者が金についての歌の出だしを歌っていたが、歌詞が思い出せない。家に大統領が経済政策について演説した時のテープを持っていたが、思い出せるのはレーガンの顔だけだ。それを考えるとTは少し落ちついて、お金をポケットに戻した。バスが来ると、料金箱にトークンを入れる代わりに、札を驚ぶかみにして運転手に渡した。一人で座席につくと、自信が湧いてきた。頭がはっきりしてくる。

オリンピックの聖火が、少年や図書館員、車椅子に乗った両足のない人に運ばれて西に向かうにつれ、Tはアパートに防犯設備を導入していった。それが完了していたから、中に入るとなんとなくホッとした。

Tの部屋は、奥に簡易台所のついたワンルームだった。ガラスの引き戸が狭いコンクリートのベランダへと続いていて、それが裏の小道が見おろしている。Tはガラスを黒ビロードで二重に覆い、上端を天井にホチキスで止め、裾は床にブロックで固定した。他に窓はなく、部屋は昼間でも夜みたいに暗かった。

そのビロードを背に、Tはモニタを置いた。縦に四つ横に四つ、合計十六台を積み重ねる。モニタ群の両側には三脚にビデオカメラをセットし、それぞれのカメラの両脇にキーライトをつけた。ハードウェアは切替機につながり、そこからケーブルが一部屋を横切って、テーブル上のパネルにつながっていた。テーブルの横には背もたれの真っ直ぐな木の椅子。部屋の隅に簡易ベッド。それ以外に家具はなく、天井に一つだけついていた電球は外してあった。

Tはコートをベッドの上に置くと、台所に行った。冷蔵庫からコーラを取り出し、ふたを開ける。一気に半分飲み干すと、戻ってモニタに向かった椅子にすわった。そばのキーボードに軽く手を置くと、指がなじみのキーにしっかりと吸い付く。一つを叩くと、消えていた画面が生命を取り戻した。色つきの光で部屋が明るくなった。

続けていくつかボタンを続けて押すと、その色つきの光は、聖火を手にした競技場の階段を駆け上る男の映像に変わった。その男を何万人もが取り囲み、聖火がともると、歓声を上げ歌を歌った。開会式のテープだ。Tは毎朝これを見ることにしているのだ。



開会式が終わり、画面は聖火ランナーの顔から、この日の競技の一つであるボクシングの試合に切り替わった。しなやかなアジア系の男が黒人を追い詰めていた。二人とも汗まみれだ。黒人の上唇からは血が流れ、アジア人が顔を打つたびに、それが宙に散った。黒人がカウンターでアッパーカットを顎に決め、相手は頭をのけ反らす。腹にもパンチがはいり、一発はビロー・ベルトの反則だった。Tは身震いしてボタンを叩いた。ボクサーが静止する。Tはテーブルの端にあったカセットをとり、パネルに入れた。静止したボクサーの像は外枠の十二の画面だけに残り、中心の四つの画面から消えた。そこに大統領夫人の顔が映し出される。

身頃にピンクの花柄のついた、紫色の絹のドレスを着ている。ハイネックのフリル衿で、半袖。腕には金のブレスレット。

彼女はホワイトハウスを案内している。Tが数ヶ月前に録画したものだ。赤い口紅で微笑み、目は輝いている。取り澄ました身ぶりをして、長い廊下を下る。ドレスの裾がふくらはぎを撫で、くるぶしからほんの三センチのところにあたっている。場面が変わった。

彼女は別の部屋の、凝ったシャンデリアの下にいた。唇を動かしていたが、Tは音を消していた。パレリーナの優雅さで腕を伸ばし、シャンデリアを指さしている。ドレスの袖から伸びる腕の弛んだ皮膚の影が、FUCK という単語をちらつかせた。テープを止める。巻き戻し、拡大画面にして再生する。

レーガン夫人の顔が四つの画面に大映しになった。頭上の画面の外の光源から照らされている。白粉や頬紅の粒が、トーストのパン屑状に毛穴に詰まっていた。カメラが頬から肩へと下がるにつれ、拡大の倍率を上げる。腋の下の肌の柔らかく白い皺に暗く映える、シルクの織り糸の一本一本が見える。Tはテープを止め、画面のひとつひとつを見て、影の中の単語を探した。それは消えてしまっていたが、別の物が隠されているのを見つけた。うぶ毛の黒い先端を、白いファンデーションの粒子が覆っている。たるんだ肌に汗つぶがきらめいている。一滴の精液。視界から隠れてくねる、淡い青筋。

Tは何時間も画面を観察した。かすかな手術の痕が見つかった。腋の下の組織の余分な皺を切除したところだ。ファンデーション粒子の下に、剃刀が皮膚を剃りとったざらざらした部分が見える。かれの目は、剃られた毛の切り株を繰り返し検証した。すごく確実に思える。すごく単純に思える。

Tは周囲の画面のボクサーの肩の静止画像に目をやった。その筋肉が震えている。大統領夫人の腋の下を見る。ボクサー。腋の下。顔をしかめると、ボタンを押した。

レーガン夫人は消え、十六の画面全部にボクシングが映し出された。黒人はさっきよりひどく唇から血を流し、目の上には新しい傷が開いていた。腕を上げて顔をガードすると、アジア系ボクサーのボディブローが続けざまにきまる。一発は辛うじて性器を外れ、

己れを守ろうとからだを二つ折りにしたところで、アッパーカットが顎に入りよろめいた。黒人はロープに倒れ、カメラが頬を伝って流れる血を大写しにした。Tは顔を歪め、椅子から身を乗り出した。場面が変わる。

男子水泳選手がスタート台の上に並び、頭を下げて腕を背後に構えている。背筋は弓なりで、それが突然伸び、弧を描いて水に飛び込んだ。精悍に力強く、鋭利な刃物で水を切り裂くように進む。機械のように身をひるがえしてターンし、Tは畏敬の念にかられた。ついにゴールし、優勝者がガッツポーズをする。かれがプールからあがると体から水滴が滴り、肌がロウのように見えた。Tはそれを一時停止させて拡大した。水泳選手の胸は滑らかで、足と股間には子供のように毛がない。肌はいかにもむきだしで、つい最近金属で掻き取られたようだ。小さな水着が腰に食い込んでいる。締めあげているようだ。

Tは見つめ、スイッチを切った。コーラを飲み干すと立ちあがり、ゆっくり歩き出す。部屋は暑くて、なんだか苛々した。腋の下や股に汗がたまり始め、シャツとズボンを脱いだ。画面のランダムな光が体にちらちら写り、反対の壁に乱れた影をつくる。Tは胸をこすり、コーラをもう一本取りに台所へ行った。

しばらくして気がつく、冷水シャワーを浴びて立っていた。震えており、外へ出て体を拭いた。流しの前に踏み台を持ってきてのぼった。胸の映像が、洗面台の鏡に写る。胸毛は黒くちぢれている。それをこすると洗面台のキャビネットを開けた。

剃刀は新しい。ほとんど感じられなかったほどだ。後でシャワーを浴びつつ、ガラスのように滑らかな気分だった。

翌日は胸がひりひりしたが、その次の日にはよくなった。肌が剃刀に慣れるまで、一日おきに胸と足を剃った。滑らかですべすべした自分の肌にうっとりしながら、毛穴にオイルを擦り込む。仕事には戻らなかった。

テレビでオリンピックの放送がない午前中と、競技の合間とには、前に病院でダビングしたテープを見た。動物実験　犬のカニューレ挿入、鼠の腫瘍誘発　もあったが、ほとんどは人間の手術だった。様々な分野の手術が録画され、研究用に分類されていた。形成及び再構成手術の手順、と書かれたビデオには、関連した手術が多数収められている。乳房形成による豊乳および縮乳、疾患性肥満の脂肪組織切除、腹部皮弁を使った事故切断陰茎幹の再生。緑のマスクをつけた医者が、側面切開の原理を説明している時、その顔がホワイトノイズにディゾルブした。十六の受像機すべてに赤い明かりが点滅して、オリンピック放送の日の到来を報せている。すぐにアナウンサーの顔が写った。側面切開の残像がアナウンサーの笑顔になった。魚のように口をぱくぱくさせているところへ、Tが音を入れた。

アナウンサーはこう言っていた。「金です。昨夜、まぎれもない金メダル。アメリカ

は……」Tはそれを消した。手術の静かな優雅さの後で、その声はあまりに耳障りだった。

画面は表彰台に立つ若者に切り変わった。勝利の敬礼をするかれの手はしっかり握りしめられている。頭上のポールには、アメリカ国旗がはためいている。カメラが近づくと、この間の水泳選手だと思いだした。髪はもう乾いている。Tが探しても、化粧のあとは見られない。トレーナーを着ていて胸は見え、首には三色リボンで金メダルがかかっている。目には涙があふれていた。

Tは長い間かれを観察してから、大統領夫人のカセットを入れた。彼女の顔を中心のモニタに、嬉しそうな水泳選手の静止画像がその周囲を取り囲むように、ボタンを押した。

彼女は二階の書斎でマホガニーの机の横にいた。片手は机の縁に置かれている。机の表面は滑らかみ磨かれて、明かりを反射している。反対の手には本を持ち、それを朗読していた。ドレスのハイネックの衿がのどをぴったりと包んでいた。あごの緩やかな窪みの陰に「ナイフ」という単語が書かれている。あごの横の傷はメイクで隠していた。唇は丹念に赤く塗られていた。Tは拡大してみて、口紅が乾いてひびが入り始めているのに気付いた。

レーガン夫人は、選んだ一節を読み終わると、本を棚に戻した。アメリカ国旗の横に立つ男の絵を指さす。男は、将軍、大統領だった。彼女は微笑んで、隣の部屋へと歩きだした。Tは音声をオンにした。

ハイヒールが木の床に響く。音が前触れ、興奮剤だった。彼女は背の高いドアに向かい、それを押して開いた。そこは寝室で、何年も使われていない高い天蓋つきのベッドがあった。大統領夫人はその端に腰掛けると、キルト作りの歴史を語り始めた。Tは音を消して彼女の両手を見た。細かく血管が浮き、丹念にパウダーをはたいたその手は、話すときには使われていなかった。腕にはめた金のプレスレットは緩すぎるみたいだ。

Tは彼女を止め、首にメダルをかけた水泳選手を見た。手握り締められている。レーガン夫人のは膝の上に重ねられている。彼女の口元は微かに開いていて、かれのは固く結ばれている。Tは大統領夫人の舌の先をうっとり見つめた。ようやくボタンを押す。

二人の姿は消え、体操選手の群れに変わった。少女たちが体を反らせ、床に足を広げ、宙返りをする。Tは足のが胴体とつながる部分の角度を検証するため、ちょうど逆立ちしたところで画面を止めた。場面を中くらいの倍率にして、レオタードの端をなぞって少女の太股を横切る。ヘアは見え、肌には傷がついていない。縦の縫い目をたどって胸にたどりつく。腕を広げているため平坦になっている。ぴっちりしたユニフォームの上から肋骨の形が分かる。

Tは跳馬が終わるまでテープをまわし、少女が着地して鳥のように胸を反らすのを見た。彼女はマットから競技場の隅まで軽快に駆け、男と他の二人の少女に抱きしめられ

た。全員金髪だ。少女の瞳には涙が光っている。

Tはカセットに手を伸ばし、ビデオに入れた。手袋をはめた外科医の手が少女の涙にとって代わる。斜方腹部切開がすでに完了し、結腸の一部の可動化にかかっていた。手際よく指で腸の係蹄を一つ取り出し、滑って中に戻らないよう、その下にガラスの棒を二本差し込んで、排液されるように正面の結腸壁を切開した。テープの次の部分では、永久人工肛門の設置技術が録画されていて、最後は、袋の取り付けや排泄物の処理を含む人工肛門周辺のケアについてだった。

Tは立ち上がり、部屋をゆっくりと歩きまわった。部屋の中はますます暑くなり、毛のない胸と腋窩を汗が覆ってひりひりする。モニタの画面いっぱいにてープのつなぎのノイズが写し出されていた。

Tは自分自身をこすると見おろした。肌は虹のような汗の滴でいっぱいだ。ナイロンの下着の表面には性器の形が浮かび上がっている。

画面に火傷による壊死部分を切除する鉗子とメスの画像が映し出された。かさぶたと壊死した組織が、横に置かれたガーゼの上ののっている。Tは台所へ行った。冷蔵庫を開けると暗い部屋が明るくなった。まぶしさに目を細めつつコーラを取り出すと、冷蔵庫を閉めて、暗がりの中で飲んだ。飲み終わると、テレビで誰かがやっていたように空缶を握りつぶし、ごみ箱に投げ捨てる。それから洗面所へ行くと剃刀を取り出し、頭を剃った。

レーガン夫人は階下へ向かうところで、その手は手すりを滑らかに滑っている。カメラが下から仰角でとらえているので背が高く見える。一段下りるごとにスカートの裾がずり上がり、膝下部分が露になる。Tはクローズアップで肌の上の化粧パウダーの微粒子と、その下の紫の細い血管を見た。絹のドレスが階段を下りるたびに彼女をなでた。

階段の下で腕につけたプレスレットを揺らし、ポーズをとった。角を曲がって絨毯の敷かれた長い廊下を途中まで歩くと、指を口元にもっていった立ち止まった。赤く輝く爪がキラリと光った。

ドアを押して開くと、脇に立った。部屋のずっと奥の方、大きな机の後ろに彼女の夫がいた。かれが顔を上げ微笑む。邪魔が入っても落ちついていて、入っただけで手招きをした。

大統領が立ち上がりかけたところで、Tは画面を静止させた。前かがみになったところで、机に頭をぶつけそうに見える。スクリーンの半数はまたオリンピックを映し始めた。九十キロの男が、四百五十キロのウェイトを持ち上げようと、力んでいる。肘を固定しようとする腕が震える。顔に血が上って膨れている。頭上にウェイトを持ち上げる。ホールド。床に投げ出す。大統領の頭は机の上から十五センチくらいのところにあった。重量挙げの選手は一瞬茫然として後ろによるめいた。Tは画面を静止し拡大する。選手の目の

血管が切れ、白目の部分が赤くなっている。唾液のすじが唇からたれていた。

Tは大統領夫妻に目を戻し、再生ボタンを押した。レーガン大統領は頭を上げると机の横を回り、夫人を迎える。あふれる笑顔の歯には白い冠がかぶせてある。のどのたるんだ皮膚がびくりと動いた。

カメラにむかって優しそうな身ぶりをして、手を差し伸べると夫人を画面の中に引き込んだ。二人は手をつないで並び、互いに微笑み会って言葉を交わす。Tはレーガン夫人のプレスレットが上腕部までずり上がっているのに気付いた。下の肉を締めつけているらしく、遠位の血管が充溢している。話中に彼女はそれを緩め、さりげなく手首まで下ろした。上の方の肌に痕が残り、そこに微かに浮かび上がったのは、男根像だった。

大統領を見ると、隣にいる妻を気にしていないようだ。陽気で力強い。Tがボタンを押すと、重量挙げ選手の静止画像が、同じ選手が国旗のかけられた演壇に立っている場面が変わった。袖なしのシャツとジャージ姿で、そのたくましい首には金メダルをかけている。

Tは最上列の四画面を静止させ、あとのすべての画面を消した。大統領が手を上げて挨拶し、夫人の横顔は光を発している。

立ち上がってゆっくりと下着を脱ぐと、また腰掛けた。横のパネルのスイッチをはじくと、キーライトが二つ、まばゆく点灯した。眩しくて目が痛かったが、瞬きしないようにした。ボタンを押すとカメラがウォームアップした。カメラの焦点は、すでにかれのすわっているところに合わせてあり、じきに胸と腹部の画像が下三列のモニタに写し出された。Tがパネルのレバーを動かすと、カメラのアングルが変わる。カメラが股間へと下がる。性器へと。

床においていた足を椅子の上にあげ、踵をくっつける。そうすると骨盤があらわになり、陰茎と陰囊にライトがあたった。できるだけ影をなくすように、少しでも横にずれる。満足すると立ち上がって台所へ行った。

浅い鍋を取り出し、水を入れてレンジにのせる。火をつけた後、料理用の糸を探し出して水の中に入れた。ステンレス製の肉切り包丁を研いで、糸の横に入れる。冷蔵庫からもう一本コーラを取り出すと、三口で飲み干し、浴室に向かった。

シャワーで体中にせっけんを塗り、股間とそのまわりを剃った。毛がないので体を乾かすのには時間がかからない。台所へ戻ると、鍋の水が沸騰していた。

鍋と病院から持ってきた手術用手袋を部屋に持って行き、椅子の脚元に置いた。前と同じ姿勢をとり、一番上の列のスクリーンを注視する。大統領と夫人に勇気づけられ、続けざまにボタンを押して二人の画像を周辺十二のスクリーンに広げた。中心の四つには己れの性器。明るい照明を浴びて青白く無毛。

Tは水泳選手を見つめたように、じっと自分自身を見つめる。手を伸ばすと力強くそそり立つまで擦った。耳には聞こえない国歌にあわせ、亀頭がかすかに上下に脈打つ。レーガン夫人の金のプレスレットが手首で揺れていた。大統領は微笑んでいる。

Tは身を乗り出して手術用手袋をパチンとはめた。淡い緑色で、自分の手が他人の体の一部のように見せている。指を湯に入れて糸を取り出し、また椅子にしっかり腰掛けた。自分自身には目をやらず、画面に映し出される自分の画像を見ていた。ペニスは硬直し、その姿は女性のような。手には震えもなく、糸の端をつかみ、ペニスと陰囊の付け根にそれを巻きつけた。糸をきつく締め、外科式に結ぶ。もう一度結ぶ。大統領は微笑み、寄り添う夫人は背を伸ばし、信頼しきっている。Tは一瞬集中力をなくした。頭がくらくらして、声が聞こえたような気がした。その一瞬は過ぎた。

Tは画面を見つめる。自分が中央で、レーガン夫妻がそれを取り囲んでいる。身を乗り出して包丁を取る。照明のもと、その刃は黄金のようにきらめく。親指と人差し指で亀頭をしっかりとつまみ、Tは切断を開始した。

## 家事

わたしはここにひとり。先週カーチスが出ていった。追い出されたと言うべきか。後悔してはいない。唯一悔まれるのは、もっと早く追い出さなかったことだけだ。手元にあるものを保存するなら、この別れは必要だ。集中する必要がある。今は、これまで以上に意識を集中しなくてはならない。

ことの始めを考えると、自分たちの無知さ加減には笑ってしまう。家を買いたいと思っていて、不動産業者に、隣り合わせの二軒が売りに出されているところへ連れて行かれた。二軒とも今世紀初頭に一緒に建てられ、うりふたつの造りだった。どちらも板葺き屋根の二階建てで、東向きの大きな窓があった。北側の家は南側のより荒れていて、近所の人たちに尋ねてみると、もう何年もこんな状態だという。話によると、ペンキの風化も、屋根の壊れ方も、こちらのほうが早いのだ。それに家の前の歩道はいつもひび割れて雑草が生えているらしい。カーチスは北側のほうがずっと安いと指摘し、構造やファサードに何か問題があっても、差額で簡単に修せると言った。わたしは、自分には古典文学の助教授として十分な固定給があるし、隣の家が塗り直されたばかりで掃除もされてすぐに住めるのに、改築の手間をわざわざかけるなんて、不必要だしばかばかしい、と主張した。そのうえ、その時点でいやな予感がしていた。おぼろげではあったが、尻込みするには十分だった。カーチスは、わたしが迷信を根拠に物事を決めていると文句を言ったが、こちらとしては、この陳述に対し、返答をもって重みを与えたりはしなかった。間もなく、わたしの気に入った方の家を購入した。

今では、二人とも間違っていたのだと思う。この界限そのものを避けるべきだったのだ。隣の家は他の家にも影響を及ぼし、それを一番強く受けたのはわたしたちの家だったのだ。その壁はわたしたちのと境を接していて、両者の親密さは逃れようもなく深い。シャム双生児のように循環系を共有しているのだ。ネズミやアリの密やかな通路を共有し、二軒の間にはゴキブリや白蟻の巣がある。これはわたしの妄想ではない。罨にかかってちぎれたネズミの足や、死の微笑を浮かべたネズミを見ているのだ。何時間も机に向かって何かの侵入を待ち受ける日々もあれば、パイプから聞こえる絶え間ない水滴の音が、隣家からこちらに差し向けられた、醜悪で疫病に満ちた下水の前兆だと確信する時もある。

去年の梅雨時、細く光る跡が娘の部屋のじゅうたんを横切っているのが目につくようになった。ある夜、泣き声で目を覚まして娘の部屋に入ると、何か冷たい肉のようなものを踏みつけた。のどがけいれんし、その瞬間、輝く小さな丸い目がベビーベッドの囲い枠の間からこちらをじっと見ているのに気付いた。化け物じみた妄想にとり憑かれ、電気のスイッチを探して狂ったように壁を叩きまわった。やっとスイッチを見つけて闇を追い払うと、すぐに自分の想像の突飛さ加減が分かった。ベビーベッドの中で娘はもう眠りに戻っていた。その隣には目のきらきらした熊のぬいぐるみがあり、床には小さな斑点が二つあった。触ってみて飛び上がった。ナメクジだ。足の裏についた緑の血の中にも、潰れたナメクジのかけらが見つかった。なんとか浴室まで行くと、便器に吐いてから、ローブを脱いで、せっけんとお湯に体を浸した。

それから数週間というもの、刺すと肉がぼたぼた落ちる、手足のない妖怪と戦っている夢を見てうなされた。負けたことはないが勝ったこともない。戦いは悪夢のように果てしなかった。

カーチスは、その夢の原因を始末すべきだと言った。つまり、娘の部屋にはびこるナメクジを排除しなければいけないということだろう。夫の忠告を受け入れ、壁と床材がぴったりと連結せず、広いすき間が開いているところをうめた。北側の壁だった。直しながらも、このすき間はまたできるだろうな、それは隣の家の圧迫でできる入り口なんだと感じていた。それがタニヤ、つまり家族中で一番無防備な人間に向っていると頭に浮かんだが、すぐにその考えを打ち消した。夢のせいで、神経が参っているにちがいない。穴を塞げば悪い夢も消せると信じているカーチスのように考えようと努めた。夫は意志も強いしに实际的だった。自分に自信が持てなくなった時、女が頼りにできるタイプの男なのだ。

三月のいつだったか、庭にレタスを植えた。数週間後それが芽を出すと、毎晩カタツムリやナメクジ狩りをしなければならなかった。懐中電灯と鍬を手に、カーチスとわたしはぬるぬるした生物をつまみ潰した。決して楽しい作業ではなかったが、百匹以上殺したら吐き気がしなくなった。間もなく悪夢も止まった。

五月半ば、タニヤは満二歳になった。お茶目で元気いっぱい、利発で可愛らしい子供で、好奇心にはきりがなく、いつも世界をひっくり返そうと画策している。隣の敷地には雑草や刺だらけのブラックベリーが伸びてくるのにも負けず、家の庭は花でいっぱいだった。わたしは大学の夏期講習を引き受けた。タニヤには子守をつけてくれるし、家を抜け出すことができるのだ。六月が近づき、わたしは最高に充実していた。家庭の外での新しい責任に、わたしは有頂天だった。娘が子供部屋の廊下で無邪気に遊び、夫がやっと自分の仕事に満足感を覚え始めていることにも有頂天だった。自分には障害を克服する力があるんだという自信がわいてきて、わたしはまず手始めに隣の家に立ち向かった。



最初はそのまま放置して、自分の意志の力でそれを些細な存在に変化させるようにした。朝、前を通る時には目の焦点をずらし、雲より淡く夢ほどの現実性もない存在だと想像した。屋根は小鳥の背で、屋根板がふさふさのお腹なんだと考えた。風が吹けば、家が飛んでいってしまったふりをするのも難しくはなかった。

後でもっと強力な方法を編み出した。心の中で家の壁同士を溶け合わせ、遠近感覚と視覚の教えを喪失させるのだ。強固な形態をわたしは崩し、複雑な幾何形態を溶かして、もっと単純な次元に落とす。家は少しずつ畳み込まれて、交差する線二本から成るただの平面になった。その二本を一本に溶け合わせ、その線を点にする。一週間近くこの点と格闘し、大変な努力の挙げ句、それを消滅させた。

家は消えた。宿敵をなきものにしたのだ。今、前を通り過ぎても何も見えない。空間すらない。わたしをパニックに陥れ、健康を損なわせた波動から、やっと安全になった気がした。ほっとしてわたしは自分の家に関心を戻した。

あの夏、幸せだったけれど、わたしは自分をもっと与えられるのを知っていた。わたしの内部に異常なほどはびこっていた関心事から解き放たれ、わたしはカーチスに、自分が示せるはずの最大限の愛を注ごうと誓った。

わが家にもっと注意を払い始めた。仕事から帰って掃除をし、こざれいに保つよう心掛けた。台所と浴室に毎日モップをかけ、他の部屋のじゅうたんにも二～三日おきに掃除機をかけ始めた。汚れた食器は、昔は頭にくるだけだったが、今では怠けるなという警告になった。仕事、子供、結婚生活、それに新しく始めたこの日課で、絶えず追い立てられる思いだった。なんとか手を打たねばと、数週間奮闘した後、年に一度の休暇のための貯金で食器洗い機を買うことにした。休暇旅行がなくなるのは確かに遺憾ではあるが、その不満は、わたしの満足と安堵で十分過ぎるほど報いられた。食器はついにしみ一つなく、カウンターも清潔で、わたしはふたたびすべてを仕切っているのだ。

この日課を数週間続けると、わが家について、これまで気がつかなかったことが目につきだした。例えば北側も南側も隣の家に隣接していて、そのため窓は東と西しか向いていないにもかかわらず、どの部屋も光は全て、まぎれもなく南側の壁にあるのだ。晩秋から冬にかけて南から北へ傾く実際の太陽光線のことではない。むしろ放射光、空中の明かるさのことだ。南の壁に、何かの輝きか放射がかかっているような感じで、しっくい質やペンキの色の違いとは思えなかった。逆に、部屋の北側は永遠に太陽黒点のようだった。まるで回りの何かが散乱光を吸収し、影の中に捕らえているかのようだ。午前中も午後も同じだった。人工照明のつく夜でさえそうだと発見した時は驚いた。

わたしは、暗い方の壁にかけてあった絵やポスターをはずし、可能な範囲で南側に移した。それから四～五日というもの、心の中でテーブルと椅子をあちこちに動かして、北か

らの影の境界線の手前に収めるようにした。結局、壁から一メートルくらいのところに落ちついた。そこは十分に光があって、なおかつ部屋の対称性を壊さなかった。カーチスはこの模様替えに懐疑的だったが、わたしが自信たっぷりなのを知り、自分たちの関係を信じて、やってみろと言ってくれた。感謝の波がからだを走り、何か特別なことをしようと決めたのを覚えている。

翌日、タニヤを子守のところで下ろした後、買い物に行った。カーチスが最近友達のはいてるスラックスをいいなと言っていたので、それを買うつもりだった。繁華街のショーウィンドーでそれを見つけ、店員にまだ誰もそれを試着していないのを確認してから、試着室に入り着てみた。ローズカラーできつめに作ってあり、ぴったりしていたので閉めるのに息を吸い込まなければならなかった。鏡に写る自分が別人のように見えたので驚いた。まるで生地そのものに活力が浸みこんでいるみたいだ。店員は遠慮して何も言わなかったが、その威力を知っていたに違いない。帰りのバスの中、わたしは胸を高鳴らせて膝の上のパンツをしっかりとつかんでいた。

タニヤを早めに寝かしつけると、家の中がきれいに片づいているかどうかさっと見回った。少しだけ傾いている絵があってまっすぐに直した時、窓を洗わなきゃいけないことに気がついた。明日することに決めて浴室へ行き、湯をはった。湯を入れている間、ローブに身を包んで寝室を見回り、朝から積もった埃を拾った。

普段はお風呂に入るのは好きでないが、性的行為の前にはふさわしいと思う。なぜだか分からないが、不定形で透明な水の感触が、心構えをさせてくれるのだ。ところがこの時は水がきれいじゃない気がした。水面に油や絡まった髪が浮かんでいるのを見つけ、その下に不衛生なものが渦まいている力を感じた。垢まみれになっていくような気がして慌てて立ち上がると、栓を抜いて水がすっかり流れてしまうのを確認した。見届けてから、バスタブの中に戻り、シャワーのコックをひねった。肌が赤くなるまでごしごし洗い、やっと不潔さの苦役から逃れられてほっとした。

体を拭いてから、服を着ようと寝室へ行った。スラックスがベッドにひろげてあり、わたしは気分が明るくなって、うきうきしながらそれに何度も目をやった。スラックスをはくと、肌がひっかからないよう気をつけてファスナーを閉め、太股の皺を伸ばした。クロゼットから大きな鏡を引っ張り出すと、壁に立てかけて前に立った。

後ろを何かがよぎり、わたしはサッと振り向いたが、姿を捉えるには遅すぎた。鏡に写る姿に再び目をやると、スラックスに視線が釘付けになった。色がローズカラーから深紅に変わっていて、魅惑的だったのがわいせつな感じになってしまっていた。また何か後ろをよぎり、振り返った時、蛇のようなものがちらっと見えた気がしたが、それが何かつきとめる前に消えてしまった。寝室が薄暗くなってきたので明かりをつけた。スラックス

がもっと深い赤に見えて、表面に小さな毛が見える気がした。すぐにその毛は、わたしの鼓動にあわせて動きだした。

光の加減かもしれないと思った。明かりをつけたのに、あたりはどうしようもなく暗くなってきたように思えたのだ。同時に部屋の中が息苦しくなってきた、深呼吸してもものが詰まることに気付いた。鏡の中の顔がだんだんぼやけてきて、その時点では原因不明の暗闇のせいで、その細部のすべてから生気が抜けていく。この暗闇は、部屋の総てを包み込むまで広がった。鏡から身をふりほども、ぼやける部屋と圧迫する壁から何とか逃げようとした。しかし全ては闇の中で、突然暗闇の原因を悟った。うっかり鏡を北側の壁にたてかけ、隣の妖怪が入ってこられる窓にしてしまったのだ。パンツに夢中になっていたせいで、墓穴を掘ってしまった。

無理矢理笑おうとしたが、部屋に響いたのはパニックの叫びだった。夜の獣が四隅に横たわり、細い指がわたしの肉を求めてまさぐるのを感じた。服の生地は生きていて、暗闇の中で毛が輝いている。恐怖にかられ、出入口となった鏡に飛びかかると、足から靴をひきはがして、ヒールで鏡を叩きつけた。うなり声が出て、一瞬の暴力、そしてガラスがきしんで砕け散った。木っ端微塵になった目が飛び散り、床に落ちて危険な模様となった。部屋が一瞬明るくなった気がしたが、すぐに暗闇がすべてを制し、わたしは床に崩れ落ちた。

それから何が起こったのかよく覚えていないが、カーチスが帰宅する前に割れたガラスと鏡の枠を片づけ終えていた。別のスラックスをはいていたが、今でもあのスラックスがどうなったのかよく分からない。何が起きたのか説明しようとしても、ほとんど筋が通らない。午後の時間の大部分がなぜか記憶から消え去ってしまったのだ。わたしにはてれくさかったし、少なからず恥ずかしかった。カーチスは仕事でいやなことがあって機嫌が悪かった。全て忘れてしまうのが一番楽だ。わたしたちはさっさと夕食を済ませ、早めに寝た。その夜、悪夢が戻ってきた。

それから一週間、二週間とたつにつれ、家の状況はだんだんひどくなった。カーチスの仕事はますます大変になり、夕食をひとりで食べる日が続いた。カーチスがいないせいか、他に何か不安の種があるのか分からないが、タニヤがつきまとうようになった。とにかく、娘のこの新たな不安は、わたしに余裕がほとんどない時期にやってきた。わたしは自分の戦いで手いっぱいだったのだ。

鏡の一件の直後に、わたしは大学の夏期講習の職を辞した。自分の家と家族の安全が脅かされているのは、些細な仕事にさえ集中できない。わたしはこの脅威を排除するのに必要なことは何なりとする決意だった。

家で過ごす時間が増えて、自分の決断がいかにタイムリーなものだったか悟った。隣の家から毎日何かが入り込んで来て、それを阻止するのに全力をあげた。鏡や光を反射するガラス類を全て取り除いたあと、壁をクレンザーで磨いた。それでも色のはげたところが残り、ひびが入って風のない日も冷たいすきま風が入ってきた。床も、敷物に不自然に擦り切れた痕がいくつもついていて、カーペットの留め鉤が一つ、なぜか外れていた。ほこりや糸屑のたまりかたも、いつになく早くなったようで、日に二回掃除機をかけなければいけなくなった。これは十月のことだったと思う。二週間前に匂いがするようになった。

地下室から匂いだしたのだが、数日で家中に広まった。最初は下水管のどこかに、異様に濃い汚物が詰まったせいだろうと思ったが、トイレにも家中の洗面台にも異常なかった。次は今までに知られていなかった浄化槽のせいではないかと想像した。たぶんネズミかなにかが地中深くで掘り当て、穴を開けて臭気を放出させたのだろう、と。ばかげた想像だが、あの時はなんとかして自分をごまかしたかったのだ。だがその時点ですでに本当の原因は分かっていたのだと思う。

悪臭はいたるところで匂ったが、場所によって性格がちがった。わたしたちの寝室には広大で硫黄じみた暗雲のように垂れ込めて、どうしようもなく臭く、入ると腹部にひきつけを起こした。居間では、えぐい匂いが壁に沿って漂い、わたしが十分に部屋に入りきったところでのどを詰まらせる。下の階では空気がひどい悪臭を放ち、じととして白カビや真菌の温床と化していた。

悪臭は昼も夜も消えることなくわたしに襲いかかり、空気を毒した。このころには原因に確信を持っていて、この攻撃のしつこさも、自分の決意を試す試練として受け止めた。掃除の回数を倍にし、さらに倍にした。もはや床がきれいなだけでは不足だ。壁も洗わなければ、同じく天井も、クローゼットや窓も。それぞれの部屋の匂いを消すために芳香剤を買い、日に何度も鼻がつんとするエアゾールをスプレーした。生地には匂いが染み着くのを防ぐため、頻繁に服を着替えるようになり、からだも朝昼晩と洗った。努力のかいあって、ようやく悪臭を消すことができたが、そのためにはわたしが絶えず断固とした警戒を続けなければならなかった。そんなことはたいしたことじゃないと思い、新たな活力と希望に満たされた。ようやく自分の力を回復し、じきにまたすべてを仕切れるようになるだろう。

こうした見通しで気が楽になり、二～三日は問題が解決したのだと信じこみさえした。振り返ってみると、希望が現実と取って変わっていたのが分かるが、混乱の日々に一息つきたいと思った自分を責めることはできない。家のために戦っていたのみならず、タニヤやカーチスとの争いも増えていたのだ。二人とも、一家の安全に対するわたしの関心をわかってくれないようだった。それどころか、身を引いて、わたし一人をますます孤立状態

に取り残そうとするようだ。今までにないほど家族の助けを必要としているこんな時に。最初は理解しようとしてみた。カーチスは仕事が大変で、他の問題をしょい込むことができないのだ。それにタニヤはほんの子供なのだ。こんな荒廃に責任を持つことができるものか。

にもかかわらずわたしの疑念は膨らみ、すてばちに近い行動として、二人に立ち向かおうと決めた。まずは娘からだ。

次の日は娘を子守に預けず家において、無理矢理子供部屋の北側の壁に向かって立たせた。その日の朝はスプレーをせず、悪臭が我慢できないくらいになるまで待った。それでひどい匂いがするでしょ、と訊ねた。

娘は首を振るが、その無邪気な顔につくり笑いが浮かんでいる。

「嘘をつくんじゃないありません」と言って娘をつかむと、鼻を壁に押しつけた。「嗅いでごらん」

わざと泣きだしたので、ひっぱたいた。よけい泣いたが、その時はもう匂いに我慢できなくて、わたしは部屋を飛び出した。その夜、カーチスはわたしが病気だと言った。

こうなるのはわかっているべきだったのだろう。このところお互いに不信感を抱いているようだったし。だが、この時は思いやり欠ける間の悪い裏切りに思えた。もしカーチスが、わたしのように家の中の悪臭をなんとかしようとかあがき続け、苦しんできたというのなら、この意見もせっかちだけど仕方ないとして水に流しただろう。でもそうではなかった。夫の批判は明らかに、わたしを挑発してますます孤立させようとするものだった。お望みどおりの効き目があり、口喧嘩の後には手がでて、それが暴力になった。ひどく殴りつけられた時突然ひらめいて、敵の本当の姿を悟った。泣いて引っかきながら、わたしはそいつを家から追いだした。

それが数日前のことだった。今、わたしはここにひとり。タニヤと一緒にだと思える時もある。ベビーベッドには、微妙に動く姿がある。話をしようとしているのだろう。夜はそれが微かに輝く……暗さを一層つのらせる影の中の、唯一の発光体だ。わたしは自分の残飯をとっておいて、食事を運んでやる。良い子になって、もう泣かない。たぶん他の虫けらが、舌にしゃべり方を教えたのだろう。

隣の家は復活し、自分の理解がいかに浅はかだったか思い知った。木やしっくい、釘、ガラス、そのどれもわたしを脅かすものではなかった。家そのものも、わたしを脅かしはしない。しょせんはただのエージェントになのだから。わたしに歯向かうのは、それが生まれた領域、その過去、現在、そして未来だ。地中に息づく生命だ。植物や雑草の変形した種の中にある生命。それが芽を出し、わたしに反抗して根をはる。地中を掘って家の壁

に入り込む、ミミズのように悪意のある根。

わたしは窓をリノリウムで覆った。家をきれいにしておきたいのだ。

きのう、悪臭を撃退する方法を考え出した。カーチスが暖炉の横に置いておいた軸の長いマッチで、鼻孔を焼灼したのだ。しばらく切りつけるように痛かったが、今では鼻への攻撃には動じない。わたしの意志は固くなる。わたしは日々強くなっていく。

今朝、赤いパンツを見つけた。クロゼットの中、汚れたシートの下にあった。色あせたみたいで、足のところにぎとぎとした跡がついている。縫い目にカビが生えて目立つ模様になっている。

やっと理解できた思いで、パンツをそっとはき、ウェストを閉めた。すべての明かりを消す。クロゼットの中に横たわるにつれ、生地が蜘蛛の巣みたいに肌にぴったりとくっつく。わたしの意志と同じくらい濃厚な闇の中で、カーチスの残していった服をハンガーから引きずり下ろし、恐れもなくそれに埋もれた。このように身を横たえ、今や誘導灯、エサとなり、わたしは自分を生け贄として捧げる。

## 華麗なる魅惑

カプセルのように長い顔。鏡の目。

「クレインさん、こんにちは。今日は何か問題はありますか？」

わたしはまばたきをする。

「ない？ そりゃ結構。ちょっとチェックに立ち寄っただけですよ」顔がニュッと現われ、わたしの心中に安堵が湧き起こる。

「心臓はジャガー並に強力。そしてその他は.....きっと気に入ってもらえますよ」かれがボタンにさわると、わたしの胸は躍動し始める。目がはっちり開く。かれはうなずく。

「ほらね。青春時代よりも若い。ねえ、あなたははまだ生きている者の中で、最長老なんですよ」

サンドラ、あいつのことは忘れろ。あいつだってこうなることを願ってるはずだろう。われわれはここに家を建て、生活を始めるんだ。あいつの墓の上に。

「あなたが始めたのは、えーと」かれはポケットから本を引っ張り出し、ページをめくる。生き物が茂みをガサガサ通るような音。「八十年以上も前ですか」

わたしは二回まばたきをし、微笑もうとする。顔に手がとんでくる。

「それは勘弁してくださいよ、クレインさん。新しい歯が生えそろうまで、くちびるをタイバックして固定してあるんですから。もて方というのは、くちびると歯茎のかみ合わせの完璧さにかかっているんですからね。とにかくリラックスした方がいいですよ。わかりますか」

二回まばたく。

「結構。じゃあ、これで失礼。ああそれと、わたしは今回のランでは戻りませんから。キルデアされることになってるんです。無垢な若者への信頼とか、あの手のことですよ」低くて柔らかいかれの声は麻薬だ。

ありがとう先生、ありがとう。わたしはまぶたが痛くなるまで、何度もまばたきをする。かれはわたしに微笑む。

「自然は優秀なものを愛するんですよ。また会えるといいですね」かれはきびすを返し、立ち去る。そしてわたしは、かれの必殺のスタイルに包まれて、心安らかに横たわる。

しばらくすると別の男が来て、独り言をブツブツ言っている。男がわたしに近づき、暗い月が迫る。わたしは。そいつは首を振る。

「あんた、かわいそうになあ」

男が消える。腕が浮かび上がり、ボトルをいじり回す。白い袖、わきの下に汗じみ。ロレッタのズボン。海岸、そこで彼女を愛した。汗の他の匂いは、強烈な海水。今はプラスチック臭、ゴム製のヘビが鼻に差し込まれている。たいしたジャングル。眠る。

後でランディが来る。いらいらすると、空気を飲み込み、のどでパチンと鳴らすのが癖だ。話す前にやつだとわかる。

「やあスワン」にこっと笑うと、金貨の輝きが口からこぼれる。「契約書を持ってきたぜ」まばゆい光が見える。ランディの虹のような顔が空中に浮かぶ。白いガチョウを振り回す。

「あと二週間で、きみのための準備が整うってさ。今回の娘はすごいぞ。名前はシャーリーンだ」

シャーリーンか。青白い肌。つるつるのひざ。結婚しよう、美人コンテストの女王かな。シャーリーンって誰だ。

「有名とは言っても、まだマイナーだな。スポーツが得意で、家庭的で、台詞は親切で気づかいと励ましだけに限定。やつらは彼女を君に紹介したがっている。彼女の出発点としてね」

シャーリーン、愛してる。結婚してくれ。ゴミ出し係を雇おう。きみのお父さんになろう、そばかすだらけの隣の少年になろう、ミルクセーキのデート相手になろう。いつもきみだけを想ってたよ、ロンダ。君の足はぼくのあこがれ。シャンパンを飲んでワルツ。きみのために髪をピンクに染めてくれた。

ランディのパンケーキ顔が明かりをさえぎる。「スワン、きみは本当にすごいよ。おれのおばあちゃんは君に卒倒した。ママもだ。今はサラが夢中になりはじめだ。十二になったばかりだったのに。きみは定番だよ、まったく」

電球目玉、やつのシロップ声。朝食用にわたしのシルエット。ほら、ぼくの鼻筋、君のために整形した。セリーズ、拳銃を手に入れたぞ。ぼくはカウボーイ。むち打ち拍車をかけ、疾走する。愛のため。

「きみのほうも準備しとくって言うておくから」手の上を皮の魚がばたつく。「ほら、サインするのを手伝おう」

ガリ、ガリ。皮膚がちょっとはがれる。ランディがのどで息を鳴らし、引っ込む。光が顔に当たる。

「そろそろ行くぜ、大将。じゃあな、またそのうち」かれは去り、わたしはヘビと魔法



とともに横たわる。

しばらくして、暗い月が戻ってくる。空中から何かを引っ張り出し、わたしの腕に巻きつける。シュコ、シュコ、シュコ。黒いコケが男のあごにへばりついている。男の目が左右に動く。わたしはまばたきをし、唇を引き上げる。

「その調子、しっかり笑いな。あんたの能は華やかさだけ。死ぬときだって華やかにね」やつの顔が大きくなる。「あの女どもはあんたなんかいらねえとさ、ロボット君。もうあんたなんか用無しだとさ。もう乾燥プラム男なんか、干からびた棒つきれなんかね。いくらあんたが華々しくてスポーツカー持ってて歯にダイヤモンドを入れて、目が輝いていてもだ。もともと誰もあんたなんか求めちゃいなかったんだよ、他のロボットを連中、あんたを愛することになってるロボットども以外はね。あんたの雑誌用の蝶ネクタイや、あんたのケツにまでキスする牙ども。スターさんよ、笑顔にキスされて、どんな感じだった、金玉にルビーでもつつこんでくれたかい。ダイヤモンドで飾ったってな。縛られたことはあんの？ 何のひもで？ 今のあんたも縛られてるぜ、映画人間さんよ。がんじがらめにされて、でも誰もあんたの手にキスしには来ねえんだ」

黒い月に水平の裂け目が出来て、ミルクのように白い柱列がのぞく。それぞれにダイヤが埋め込まれている。胸を重力が圧迫する。

「かわいそうになあ、おい。もうどのぐらいになるんだい、これで何年目だ？」

男はわきに沈み、わたしは息をする。ご老体、命を乞う乞食。白旗がはためく、それとも翼だろうか。

\* \* \*

「旦那さまにです。スタジオから」男はベッドの隣のテーブルに箱を置く。

「ありがとう、アッカーマン。ジャムをもう少しくれ。それからパンくずを集めておくれ」

指でスイッチを撫でると、テレビがブーンとうなってつく。太った顔が画面一杯に映る。

「スワン、久しぶり。元気そうだね」

「元気だよ、ビリー」ナプキンで口の端をぬぐい、そのあとトレイの上に落とす。「ランディが言ってたが、もう準備万端だってね」

「今回は必勝モノの娘を押さえてあるぜ、スワン。名前はシャーリーン。会ったことないかな……」

ぽかんとしてみせる。

「ない？ 同じ場所でやったって聞いたけど」

「ビリー、ぼくは基本的にこの部屋を離れないんだ」

かれのゆがんだ目は、もっと知りたがっている。いつものことだ。沈黙が流れる。

「そうか。いや、おれも聞いただけだけどね。とにかく、ちょっと顔が見ただけ。良さそうじゃん。横顔を見せてくれ」

左側を見せ、ちょっとあごを上げる。鼻の穴がふくらむ。海だ、ステラ。海がおれを呼んでいる。潮の味で、血が騒ぐ。羊はだめだ。心が泥で詰まっちゃう。おれには水が必要なんだ、ステラ。そしてお前が。

「いいねえ、スワン。あごは完璧だ。おでこの仕上がりもいい。大胆だが、思慮深そうだ。おれたちが狙ってた通り」

「いつ始めるんだ、ビリー」

「明日だ。シャーリーンの撮影はもうはじまってる。きみと彼女のテニスのシーンをちょっと引き延ばしたんだ。華を添えたりして。ここ一日二日で放送になるはず」

わたしはほほえむ。「もう彼女に恋しているよ」

「そうかい。幸せそうだな」

「いつも幸せだよ、ビリー」きみといるとどうしようもないんだ、ドリス。ぼくを明るくしてくれる。きみの手を食べてしまいたい。きみの手からね。キャンディ、キャンディ。

「きみには驚かされるよ、スワン」彼は首を振る。「きみを作ったあとで、鋳型は壊されちゃったからな。本当だよ」

気持ちが乱れる。「わたしはただの普通の男だよ、ビリー。本当に平凡なだけ」

「そうだな。さて、もういくよ。気を付けてな。また明日」

画像が消える。

わたしは起きて部屋の中を歩き、からだの調子を見る。若がえり、肺は勢いがあり、肌にはハリがある。若い心、そして思考は明晰で、記憶もほどよい。鏡を見てビリーの言った通りなのができる。顔はまったく新しい趣向で、霊感的だ。ポーズをとってヒップを引き締めてみる。いいぞ。シャーリーンのことを考え始める。

ランディの話では、スポーツが好きだという。スポーツは知らないが、すぐにできるようになる。身も心もそれを求めている。シャーリーンが好きだ。もうとっても好きだ。

ラケットを振るみたいに腕を動かす。鏡に笑いかけ、カーグライトが光を浴びせてくれる。その光を歯に、唇に、男らしい嗅覚に当てる。ファンが髪にそよ風を送り、髪が揺れる。テリー、ぼくと暮らそう。ぼくはブタにえさをやるし、一家を養うから。きみが愛の光を照らしてくれれば、ぼくはスポットライトから引退しよう。わかるかい、そんなものはきみがいなくっちゃ無意味なんだ。

「失礼ですが、旦那さま。他にご用はありますか」

アッカーマン、その物言わぬ目。かれはパンくずの散らばった銀のトレイを持っている。

「風呂の準備をしてもらおうか」

「かしこまりました。入浴剤はチェリーで？」

「うん」

かれはバスルームに向かい、戻ってくると、トレイにはつぶれた入浴剤のパッケージが乗っている。

「お湯を張っております、旦那さま。泡が立ち始めております」

かれの態度には、何かがぞっとするものがある。

「ありがとう。下がっていいぞ」

数分後風呂に入り、蛇口を閉める。空気が甘く、いい気持ちだ。熟れた果物のにおいだ、一息吸い込む。鼻歌を歌い、チェリーの海にすべり込む。エスターと、その笑う人魚たち百人と一緒に、

\* \* \*

翌日セットで初めてシャーリーンと会う。生き生きとした赤毛でしっとりした肌。丘を燃え上がる炎を思い浮かべる。出会うと彼女はにっこり笑う、家庭的な感じだ。その場でわかった。何をしても彼女ならわかってくれる。

「散歩しない？」と彼女が腕をからめてくる。

「走ろうよ」と答えつつ、これで正解なのを確信。

彼女は笑い、二人は出発する。日光で彼女の髪はちょっと赤くなり過ぎ、わたしのはちょっと明るくなり過ぎている。だが、まあいいか、恋なんだし、後で正しく見えればいい。

グラウンドを走りながら話すと、みんなが指さして見つめる。ランディはやることをやってくれた。わたしは微笑み、新しい大胆な顔と白い歯を見せてやる。シャーリーンは誇らしげに見つめる。

「ジョギングは好きだ」彼女に言う。

「わかるわ」と彼女が答える。「あたしも」

「それにテニス？」

「ええ、スワン」彼女が微笑む。「それも好き」

走りながら彼女の頬にキスをする。「愛してる、シャーリーン。生まれてからずっと、きみみたいな人を待ってたような気がする」

「あなたといると幸せよ、スワン。まるで高飛び込みしてるか、家で静かにくつろいでいるみたい」

少年のようにわたしは微笑み、曲がってメインストリートに出る。広い通りで、高いヤシの並木がある。先になったり後になったり、お互いの歩調を合わせながら縫うように進む。見つけてもらえなくても構いやしない。二人で魚とヤシの実ジュースを食べて暮らす

んだ、スーザン。ぼくは砂の城を築き、そこのはね橋を上げてしまい、二人きりでずっと暮らすんだ。

「好きだよ」

「愛してる、スワン」

「きみの髪は茶色だったんだね」

「赤よ、スワン。赤だってば」彼女が笑う。

「ココナッツだ」

「おいしそう。海まで競争しましょうよ」

彼女は飛び出し、わたしが続く。車や兵士やカニがいないか気をつけながら。

翌週いっぱい二人で映画に取り組みながら、予想通りに二人の生活も混ざり合う。わたしにとって社会生活と私生活は、言葉こそちがえ、同じものだ。そういうわたしは幸運なのだろう。ひとつの微笑が二役、髪型も、靴だってそうだ。仕事がつらいなんてことは絶対にない。単に自分らしく生きるのが仕事なのだし、生きるのは楽だ。

製作の二週目、わたしたちは結婚する。そしてランディが実に完璧な結婚式を手配してくれる。フォーレストヒルズに飛び、中央裁判所で式を挙げる。それからシャーリーンとわたしは、ファンをしたがえて海岸までジョギングをする。夏。二人で昔風のフィッシュフライを食べる。シャーリーンはピンクを着て、とても素敵だ。わたしはブルーを着てたくましい体で、カメラマンたちは忙しい。最後に二人はヨットで水上スキーをし、笑い、手を振り、テレビカメラは回り続けだ。

船のデッキにはアッカーマンがいて、細面で海を見ている。

「船へようこそ。旦那さま」

「ありがとう、アッカーマン。シャーリーンは知ってるね」

かれは軽くお辞儀をする。「よくいらっしやいました」

「ありがとう。ご一緒できてうれしいわ」

かれはかすかに微笑みながら、こちらに向き直る。「シャンパンはいかがですか、旦那さま」

「もらおう。グラスを二つね」

「ピンクシャンパンですか」

きみのためのピンクだよ、ロンダ。きみの瞳に似合ってる。きみのためならどんなステップでもこなそう。ぼくはただただ踊りたい。

「ワルツが聞こえるね」

「いかがしました、旦那さま」

「ワルツだよ。いちにっさん、いちにっさん」彼女の手を取り、床の上をくるくる回り

始める。音楽ははっきり聞こえるが、彼女は腕の中で身をすくめている。わたしはつまづき、爪先を踏んだりしてばかり。

「ダーリン」わたしは謝る。「ちょっと疲れたみたいだ。しばらく休もう。シャンパンでも飲もうか」

台詞が彼女の顔をしかめさせたが、わたしにキスをしてそれもおさまる。「ピンクでいいの？」

記憶がきらめいて消える。

「そうだ、ピンクだ」

「アッカーマン、グラスを二つ。冷えたのをお願い」

かれは彼女に目を移し、わたしは変化を感じる。かれは素早くうなずく。「承知いたしました」

シャーリーンはこちらに向き直る。彼女のピンクのドレスに、オレンジの日の光があたっている。彼女の輝く体に、明るい魚が飛びはねている。

「エスター」と熱っぽくつぶやく。「愛してるよ」

映画を仕上げたいので、ハネムーンはなし。それがいけなかったのかもしれない。働けば働くほど、次々に妻たちが訪ねてくる。シャーリーンとの時間がどんどんなくなる。二人でテニスやスキーや水泳をしている最中に、犬の首輪みたいに甘く優しいセリズが訪ねてくる。それからステラが、顔にしわを刻ませてやってくる。わたしにはどうしようもない。わたしは正直で、善良な夫だ。不倫や放蕩とは無縁。そんなことをする必要もないだろう。わたしにとって、愛は純粹で単純なものだ。わたしの生活は、映画でのせりふ通り。それがわたしの人生。

シャーリーンはわかってくれる。彼女はわたしを理解している。しばらく牧場にいたり、二本マストの帆船にいたり、バンド付きのダンスホールにいてもねたんだりしない。彼女は微笑みながら、わたしが戻るのを待ち、それからサーブを放ち、こちらの手元にきれいなボレーをする。彼女は黄金のように素敵で、他の妻たちに劣らず貴重だ。

ランディは落ち着けというが、ビリーは怒っている。わたしがうわの空だと言い、スタジオに損をさせていると言う。

「シャーリーンだ！」と彼は私に叫んでいる。「シャーリーン、シャーリーン、シャーリーン！ テリーじゃないぞ、スワン。ドリスでもステラでも、他の誰でもない。やつらはここにいない。誰もいない。これはシャーリーンだ。シャーリーンだぞ」

そんなの知っている。知らないはずがないだろう。もちろんこれがブロンズの肌の、微笑のシャーリーンだ。わたしの大切な人、フォーティ・マッチ、ゲーム。わたしの妻。

でもどうしたらいいんだ、ビリー。エスターが笑って水の中へと誘い、ロンダが絹のよ

うなヒップを振って踊っていたら。わたしは紳士だし、彼女たちだってわたしの妻なんだ。投げなわをしなくてはいけなかったらするし、海にいたら魚を食べる。盲人にも農夫にもなれるんだ。城を建てヤシを植えそこで暮し、キャンディと夜には拍手をする。それが必要ならそうする。それ以上にだってやる。ああ、やるとも。歌い、馬に乗り、泳ぎ、齒にはダイヤモンド、白鳥が群がり、そして華麗に。ダンスも出来るし、わが微笑は黄金。わが腕はつばさ。わたしは飛べる。

## 暖かさの約束

腹部の皮膚は冷たいが、暖まりつつある。樹の皮に横たわっている。空腹、体温上昇。まぶたが開く。目が一つ見る。待つ。

遠くで低いうなり声がひびく。空閑地は明るく無音。鳥の声もなく、ネズミも跳ねない。暑さ、真昼、おとろえ。静寂。

一匹の蝶がひらひらと、大きな葉の後ろに消える。別のが陰から現れ、青い羽の目をはためかせる。美しい生き物、動きは下品で、昆虫の魂の痙攣だ。ツタのヴェールをはばたき抜け、赤い花にとまって輝く。一度、二度羽を打ち合わせ、空中に飛び出す。待ち構える枝に近づく。

日の光が木の葉や枝を突き抜け、蝶に触れ、刺す。羽ばたき。目が動き、口が動き、肉が一閃。舌が飛び出し、捕らえ、引っ込む。蝶が消えている。目が閉じる。飢えが癒える。体は満足し、体温上昇。

「不安だ」とロジャーが言った。ジルは、長くて幅の狭い米ドル札用に作られた財布に、大きすぎる札を突っ込もうと財布と格闘していた。

「本当なんだ」

彼女はかれが本気かどうか顔をあげて見た。かれなりに本気らしい。少なくとも彼女はそう思った。だから後ろのポケットに、やりかけの作業を詰め込んだ。

「どうしたの、大丈夫よ」彼女は手を腕においたが、かれの眉根にはしわが寄せられたままだった。彼女は戦術を変えてみた。

「ううん、あなたの言う通りだわ。ひどいことになる。どうせ一日中浜辺にすわってるだけで、雨が降らなくても暑すぎたり、暑すぎなかったら蚊に刺されるし、蚊がいなかったら何かほかのダニや目に見えない虫に刺されるのよ、ううん、何かもっと悪い熱帯性の目に見えないやつ、死ぬほどの毒性はなくて、かゆくなったり腫れたり、そしてもっとかゆくなって……」彼女は一息つき、話し続けようとした。

彼女はおどけるのが得意ではなかったので、他の人との関係ではこのようなことはしなかった。ロジャーを笑わすために彼女はからかい方を覚えた。笑うとかれは、自分に対す

る堅苦しさを和らげることもあった。

「そうだね」と彼はぶつぶつ言った。「まさにそうなるだろうな」しわはもっと深くなり、突然かれは顔を上げた。笑い、ジルをぐいとつかんだ。

「俺、どうかしてる」彼女を抱き締めながらそう言った。「絶対そうだ」

「そうよ」

「どうしようもないんだ。楽しく過ごせないんじゃないかと心配なんだ」

「落ち着いてよ」二人で歩きながら彼女は男の手を取った。「マルガリータを飲みましょう」

「俺が酔っぱらってるのが好きなんだろ」

「ちょっと気を抜いているあなたが好きなの」

「そうだろうね」彼は彼女のほおにキスをし、唇をゆっくりと耳元によせて舌をはわせた。

「ここじゃ嫌だわ、ロジャー。ホテルに戻りましょうよ」

「ね、茂みの陰にこっそり行こうよ。急いでやろう。自然の中で」

「誰かに見られるわ」

「いいじゃないか。見られたって困りゃしない」かれは彼女の腕をつかんだが、彼女は相手を押しつけた。

「冗談はやめてよ」

「落ち着けて」とかれは、さっきの台詞を返した。「お固いなあ」

彼女は身をこわばらせた。傷つき怒った顔をして顔をそむけた。

ロジャーは彼女が帰っていくのを見ていた。村の音、鳥や子供たちの声や、ジュークボックスの音楽が流れていた。自分を呪った。

「ジル！ ジル！」

道にほこりを舞い上げて、彼女の後を追った。石をよけ、別のにつま先をぶつけた。追いついた時、謝りながらもびっこを引いていた。彼女はひたすら無視した。とうとう男は前に走り出ると、振り返って彼女と向き合った。彼女は止まるしかなかった。

「ごめん。俺が悪かった。本当に」

「何であんなことするのよ」

「わからない。傷つけるつもりはなかったんだ」

「そうなの？」

「そうだ。傷つけたくなんかない」

「本当に？」彼女は驚いたようだった。

「本当だ」



「じゃ、やめて。変なことしないで」

「気をつけるよ。時間はかかるけど、直すようにしてるから」

「すぐに直して。いいわね」

彼女は男の腕にふれ、そして抱き締めた。

ロジャーはホッとして抱きかえした。

「ホテルに戻りましょう」ジルがつぶやいた。

「そうだね、戻ろう」

「まずキスして」彼女の目はもう閉じていた。

二人はキスをした。手をつないで歩いて戻った。

ホテルのフロントになっている低い木の台の後ろで、二本の枝がからみつき、そこにハンモックがかかっていた。そこに眠そうな目をした男が沈み込んで、縁から片足をだらしなく垂らしていた。その後ろの壁には二枚の板が打ちつけられていた。上の板は白く塗ってあり、ホテルの名がふぞろいな大文字で書かれていた。「三頭荘」。もう一枚は塗装もなく、ボロボロだった。スペイン語と英語で「チェックアウト二時。遅れないで下さい」とある。デスクの脇にはメキシコビールと各種ソフトドリンクを詰め込んだ、大きなクーラーボックスがあった。子供、小さな女の子が隅に立ってコークを飲んでいて、ロジャーがカウンターに近づくのを、黒い瞳で追ってくる。ロジャーはルームキーを置くと身を乗り出し、ハンモックの男に笑いかけた。

「ブエノス、ディアス。コンニチハ」

「ヤア」男の口のあたりからぶつぶつ言う声が聞こえた。

「ゲンキカイ」

「ココへ、ドウゾ」

ロジャーはうなずきいて笑い、そうしながら次に何を言おうかと考えた。その男カルロスとは昨日の午後に話していた。村のこと、平和なことや訪ねてくる外国人について話した。会話は弾んで、カルロスは生き生きしていた。今、午前中でまだ暑さがその本番を迎えていないというのに、この男は疲れているようだ。

「暑いね」ロジャーはそう言って麦わら帽子を持ち上げ、髪をとかした。もう汗ばんでいた。

「後でもっと暑くなる」と男は大儀そうに言った。

「きつい夜だったのかい」なぜこんな早くから男がぐったりしているのか、ロジャーは妙に好奇心をそそられた。

カルロスは、自分のゆったり平穏をこわさない程度にかすかに頭を動かして、視線を口

ジャーの方に向けた。口がぼかんと開き舌が乾いた唇に輪を描く。のどから低いこだまのような音が聞こえ、それが言葉だとわかるのにちょっと時間がかかった。

「疲れてるんだよ。まだ寝てるんだ。後で来てくれ。暑くなったら。人によっては、暑くなると……」ため息。「元気になるんだ」男はふたたび眠りに落ちた。

ロジャーはそれを見つめた。少女を視界の片隅に映った。彼女はロジャーを見ていた。

「この人、大丈夫？」かれは尋ねた。「ダイジョウブカ」

娘はコークをすすった。

「カレ」と指差した。「ゲンキカ。ダイジョウブカ」

娘はすすった。ようやく、うなずいた。

ロジャーは顔をしかめて立ち去った。ジルが右手の階段を下りてきた時には、頭をふっていた。ジルはバッグを肩にかけ、ビーチに行く格好をしていた。

「どうかしたの」

「おやじだ」かれは指さした。「カルロスだよ。具合が悪いみたいなんだ」

「話したの」

「ああ。ただ疲れてるだけだって言ってる。後で暑くなったら起きるとさ」

「変なの。暑いとあたしは眠くなるのに」

「俺もだ」

二人は歩き出した。

「あの人が心配なの」

「いや別に。ただ理由を知りたいんだ」

「うん。まあ様子を見ましようよ。しばらくいたら、あたしたちもそう感じるのかも」

「そうだな」と答えたものの、納得はしていなかった。

「気にしちゃだめよ」彼女が背に腕を回してきた。「ここには自分たちのために来てるのよ。あの人のためじゃないわ」

「うん、それもそうだ」

二人はしばらく黙って歩いた。

「マーケットに行く？」とロジャー。「後のために何か買おう」

「いいわね」

二人は町の中心に向かった。潤れた噴水を過ぎ、マーケットに続く砂利道を右に曲がった。積み重なった木材の下につながれた口バを過ぎ、もう少し先でブタを抱えた女と並んだ。ブタはキーキー鳴き、女はブタを地面に降ろして、首につけた短い縄で自分の脇に押さえつけた。ジルはかがみ込み、舌を鳴らしてブタの注意を引こうとした。女は変な目で彼女を見つめ、ブタをぐっと引っ張った。ジルは馬鹿ばかしく思いながら立ち上がった。

二人は路上散髪屋を通り過ぎた。粗末な木の椅子がほこりっぽい地面に置かれ、その隣の木にでこぼこの鏡がかかっている。その先には「葬儀屋」と大きな黒い字で書いてある長い白の建物があって、奥の物置にふたを開けた棺桶が並んでいた。男が正面のポーチでピーナッツを売っていて、古いキャンベルスープの缶でピーナッツを量っていた。マーケットは道を渡ったところだった。

中に入り、ごちゃついた露店の間をうねりながら進んで中央の広場に出た。そこは女たちでいっぱい、多くは野菜や果物を高く積み上げたテーブルの横に立っていた。他の者は足を組んで地面にすわり、自分の前のモスリンの古い布に食品を広げていた。混みあい、騒がしい場所だった。ジルとロジャーは店から店へと人混みをかきわけてまわり、マーケットで最高のパパイアを見つけたとロジャーが確信するまで触ったり匂いをかいだりした。ロジャーはそのパパイアを買い、帰ろうとしたところで、あるものが目に留まった。

すぐそばに、浅黒くてやせた男が地面にしゃがんでいた。ぼろぼろのシャツを着て、傷だらけの帽子を目深にかぶっていた。その足元には粗末な麻袋が置いてあった。男は片手で袋の口を持ち上げ、もう片方で中をまさぐっていた。隣に立っていた女がかがみ込んで、目で男の動作を追っている。男が素早く何か言うと、女はうなずいた。男は手を引っ張り出した。手には二匹のトカゲがしっかりと握られていた。大きい。爪は後ろに縛ってあり、膨らんだ白い腹が小さなフィゴのようにびくびく動いていた。生きている。

ロジャーは、男が生き物のしっぽをつかんで女の方にぶらぶらさせるのを、釘付けになって見ていた。女は手を伸ばした。指の先で緑色のでこぼこな背中や頭をなでた。そつと彼女はその腹を握った。ロジャーは身震いし、その女は顔を上げた。そのしなびた顔は朝のまぶしい光の中でこわばった。突然女が笑った。数本残っている歯は金でふちどられていた。

女は何か言い、ロジャーは聞き取れなかったけれど、わかったかのようにつぶやいた。彼女はまた笑い、男に向きなおって早口で話した。一、二度彼女はロジャーの方に見ぶりをした。彼女が話し終ると男はうなずいた。男は彼女に生き物を渡して立ち上がった。背は高くない。片手でロジャーに手招きした。

目は黒くてまつげがなく、まぶたはほとんど見えなかった。微笑むと顔が砂漠のようにひびわれた。

「ナニカゴヨウデ」

「ナニモ」ロジャーはつぶやいた。

男は笑った。「ナニモ？」

ロジャーは頭を振った。吐き気がした。

男は片手をこちらの肩に置いてひざまづき、いっしょにロジャーを引き寄せた。ジルはそばに立っていたが、他人ごとなので退屈していた。

男は片手で布袋の口をつかみ、もう一方の手を深く中に突っ込んだ。静かに彼は手を引き出した。

ロジャーの心臓は高鳴った。唇に玉のような汗が浮かんだ。男の手の中に太い尾が現れた。縛られた足、それから背中、こぶがあって緑色だ。思わずロジャーは手を伸ばした。冷たくてひだのある皮膚に触り、でこぼこの背中をなでた。その頭や丸い鼻づらに触れ、あごを持ち上げて、その頭が自分のと向き合うまで引いた。

その目はまばたきして開きっぱなしになった。舌がおどり出てきてロジャーの手をなめ、引っ込んだ。ロジャーはそれを見つめた。太陽が首筋にあたっていた。ぼんやりとその暖かさを感じた。

手が背中に触れた。ロジャーは飛び上がった。

「え？」

「立ってて飽きたって言ったの。あなた残るんなら、後でビーチで会いましょうよ」

かれは気を取り直そうと、頭を振った。「いや、待ってくれ。大丈夫だ。俺も行く」立ち上がり、めまいを感じた。ジルの肩に手をのせた。

「大丈夫？」

「ちょっとめまいが……」

それがおさまるのを待った。

「もう平気だ」

「ホント？」

「ああ。大丈夫」

「よかったわ。行きましょう」

彼女は歩き出し、すぐにロジャーも後を追った。数歩進んでからちょっと立ち止まり、振り返った。後ろで女がバナナを一房計っていて、その隣の女は切ったパイナップルからハエを追い払っていた。その向こうにもっと人がいて、その人混みの真ん中で、老人と女が麻袋の上にかがみ込んでいるのがちらっと見えた。向き直って、かれはジルに追いつこうと急いだ。

日陰でさえ暑さが支配していた。熱気は綿花のように空中に漂っていた。ジルは顔をぬぐい、本を置いた。ビールに手を伸ばす。生温かったが、口の中に比べれば冷たい。彼女は缶の上でライムを絞り、縁からその絞り汁を吸って、続けて缶から一口飲んだ。唇の泡をぬぐい、もう一口飲んだ。彼女は満ちたりていた。

その隣でロジャーは、砂に顔を突っ込み、うつぶせにからだを広げていた。「日に焼けちゃうわ」と彼女は言った。

「ああ」

「脚の後ろが本当に真っ赤よ」無意識のうちに、彼女は自分の椅子を、移動するヤラッパの木陰の中央に動かした。

「日向から出たほうがいいわ。じゃなかったらもっとクリームをつけなさいよ」

「めんどくさいなあ」かれはぶつぶつ言った。

「そう。でもそうしなきゃ」

「ああ」

「強情ね」

「なんだって」

「なんでもない」

かれは目がさまし、頭を上げた。「強情って言ったな」

「そうじゃない」

「俺はリラックスしているんだ」

「よかったわね」

「ほんとだよ」かれはまた砂につつぶした。

「何を考えてるの」とジル。

「何にも」

「ペソ銀貨のことでしょ」

かれは笑った。「トカゲ」

「トカゲがどうかしたの？」

「やつらはリラックスする方法を知っている。暑ければ太陽の中で寝ている。食べたくなったら食べる。寒くなったら何もしない」

「いいわねえ」

「ああ」

「鳥に食べられなければの話だけどね」

「鳥は大物は食べないんだ。大きいのは食べない」

「イグアナみたいなのはだめね」

「そうだ。イグアナは食べない。大きすぎる」

ジルはまたビールを飲んだ。「何でそんなこと考えているの」

「さあね。なかなかいい生活みたいだしな。食っちゃ寝、日光浴……」

彼女は笑った。「休暇が役にたってるみたいね」

「まだある」とロジャーは彼女の方に身を乗り出した。「舌がすばっこいんだ」  
かれは自分の舌をさっと出して、彼女のふくらはぎをなめた。「ゲっ」と地面につばを吐いた。「きみって不味いな」

彼女は笑った。「シー・アンド・スキーの六番、サンオイルよ。次は唇にしてみたら」  
かれはビールで味を洗い流そうとした。それから飛び上がって海に走った。子供のようにしぶきを上げて泳いだ。ジルは首を振ってそれを見ていた。正午で、うだるような暑さだ。水の中にいるのはロジャーだけだった。

彼女は男がビーチをとぼとぼ歩いてくるのを見つけた。腕に細長いタオルをかけて、飲み物をのせた盆を運んでいた。彼女は自分のビールを持ち上げ、指さした。

「もうヒトツネ」彼女は言った。

男はうなずき、ジルはその缶を飲み干した。そして椅子にもたれて目をつぶり、暑さとアルコールに身を任せた。

そのあと帰る時になって、タオルを集めパイアの食べ残しを捨ててから、彼女はロジャーを捜した。かれは戻ってきて、少し話をしてから、また飛び出していったのだ。

名前を呼んだ。いらいらしてまた呼んだ。ひとりで戻ろうと決めかけた時に、砂の上の痕跡を見つけた。何か大きなものを海沿いに引きずったような、幅の広いみぞだった。それは最後にロジャーが砂の上に寝ていた所から始まっていた。ジルは肩にディパックをかけて、その跡をたどった。

少しの間、みぞは海岸と平行に走り、砂山を通り越して急に海の方に曲がった。それは湾に向かって並んでいる岩の最初の、低い岩の下で途絶えた。海岸に近い岩はウニや小石だらけだった。時刻は日没近く、潮は低くて、岩は乾いていた。彼女は上に登った。

その表面は険しくはなかったが、鋭くて影になっていた。彼女は注意深く道を選び、数分後に頂上に着いた。低い太陽が彼女の顔を照らし、ちょっと目がくらんだ。目が慣れてから、反対側を見下ろした。

そこは平らになっていて、向こう端は波間になだらかに落ちていた。ウが数羽ペリカンと混じって、翼に油をぬっていた。そのはずれにロジャーが、岩の上に腹ばいになって寝ていた。頭は沈む太陽に向いていた。

「ロジャー？ ロジャー、大丈夫なの」

彼女は心の中から足の切れそうな岩の破片を締め出し、下り始めた。大きな鳥がねぐらから跳ね上がり、鋭く叫んだ。

「ロジャー！」

夫にたどり着き、背中に触った。

「ロジャー」その頭を持ち上げた。「ロジャー、答えてよ」

かれはまばたき、ゆっくり伸びをした。腕を伸ばし、身を起こした。

その胸と腹は、ひっかき傷と乾いた血の筋だらけだった。かれは首を左右に回した。

「ジル」とかれは夢見心地に言った。

彼女は息をのんで待った。

「とっても安らかだったんだ。岩はすごく暖かった」

彼女の声はこわばった。「大丈夫なの」

かれはまばたきそをした。「どうかした？」

「冗談はよして、ロジャー」

「いや、本気だよ。どうかしたの？」彼女を見ると、怒りをつのらせているのがわかった。「ジル……」

「やめてよ」彼女は叫んだ。「やめて、やめて！」彼女は泣き出した。

かれはおろおろした。「わからないなあ。俺が何をしたんだ」

「こっちがききたいわよ」

「わからない」かれは考えようと努力した。「一人でうろついてたからか」

彼女は震えていた。

「すぐに戻るつもりだったんだ、ジル。ただ、成り行きでこうなったんだ。眠っちゃって。太陽がとても気持ちよくて……」

「死んだのかと思ったわ」

「何か言っておけばよかった。どこに行くのか言っておけばよかったんだ」

「まさかずっと這ってったの？」

かれは傷にいくつか触れてみて、ニヤリと笑った。「どうもそうみたいだなあ。狂ってる、よな」

「何か変よ、ロジャー。あなたって怖いわ」

「そんなつもりはないよ」

彼女は責めるようにかれを見た。

「ごめん。本当に」

「戻りましょうよ。いいわね」彼女は涙を拭いて、かれを助け起こした。「手当てしなきゃね」

「痛くないよ」

「蒸し返さないで、ロジャー」

「ホントだって……」

彼女がにらむと、ロジャーは黙った。彼女は振り返って、ゆっくりと注意深く岩を登り始めた。ロジャーは彼女がてっぺんまで登るのを待って、それからあわてて彼女の後を

追った。

二人がシャワーを浴びて服を着た頃には、もう日が暮れていた。ピンクは紫に変わり、明るい星が空に輝き始めていた。疲れた漁師が、遅い漁から帰った船を停泊所に入れていた。湾のあたりで引き潮がもう浅い水足を消し去っていて、小さな船が泥の中に泊まり、杭や木の枝につながれていた。女や子供たちが、今日の水揚げの軟体動物やヤリイカやサカナを競(せ)っていた。少年がバショウカジキのヒレを扇子のように広げたり閉じたりして遊んでいた。部屋の外のポーチに、ジルはビールを持って立っていた。一口飲み、手すりに寄りかかる。そして外を見つめた。

ロジャーがシャツも着ずに裸足で現れ、歩み寄ってきて彼女にすっと腕を回した。首筋にキスをした。彼女は何かつぶやき、彼の方を向いた。二人は短く唇を触れあわせ、するとロジャーが体を引いた。そしてあくびをした。

「眠いな」

「日に当たりすぎたのよ。胸は大丈夫？」

彼は胸にさわった。「いいみたいだ」

「クリームはつけたの」

彼はうなずいたが、ジルの目にはもっと必要に見えた。皮膚はしわがよってがさがさで、上の層が下の層からはがれそうだった。

「あなた、肌がカサカサじゃない」と彼女は、彼の肋骨に沿って指を走らせた。肌はひだになり、一片がすべり落ちた。彼女は手を引っこめ、床に落ちた皮膚を見つめた。

「確かにそうだね」かれは腕をこすって皮のうろこをばらばらと落とした。

試しに彼女は皮膚がはがれた所をさわってみた。「痛くないの」

「ああ。全然」

彼女は顔をしかめた。「何かおかしいわ、ロジャー。医者に見てもらった方がいいと思うわ」

「俺は平気だよ」

「日に当たりすぎてるわ。あなたちょっと不気味よ」

「太陽が好きなんだ」

「あなたは太陽に慣れていないのよ」

「俺は気にならないけどな」かれはあくびをかみ殺した。

「結構。勝手にしたら」彼女は酒を飲み、海を見つめた。

「なあ、ジル。ふくれないでくれよ」

彼女は言い返そうとしたが、やめた。そしてため息をついた。「あなたのことが心配な



の、ロジャー。今日のビーチの出来事は怖かったから」

かれは彼女を抱き締めた。「大丈夫だって。約束する」

「ホント？」

「本当。ちょっと疲れてるだけだ」

「多分食事をしたら元気になるわ。さあ、服を着て出かけましょうよ」

部屋でかれはシャツを着てサンダルをはき、すぐそのレストランへ行った。夕食に二人は新鮮な魚とライスとトルティーヤを頼んだ。ジルは勢いよく食べたが、ロジャーは皿にほとんど手をつけなかった。食べるより寝たいと思ったのだ。食事が終わる頃にはその欲望に逆らうのをやめた。頭が横に垂れ、かれは目を閉じた。

ジルは急いで食事を終え、会計を済ませ、それからロジャーを揺り起こした。容易ではなかったが、最後には何とか立ち上がらせた。半ば抱え、半ば引きずるようにして、彼女はついにかれをホテルに連れ帰った。

早い時間で、まだ子供たちが起きていた。フロントの少年が部屋の鍵を彼女に渡した。少年はにっこりして空中で指をくるくるさせた。ジルは笑い返し、酔っ払っているとかそんな意味だろうと思いながら、ロジャーを肩にかついで階段に向かった。目の片隅には、ハンモックに深く沈んでいる老人が見えた。その隣には黒い瞳の少女がいた。こちらを見つめている。

ジルは唇をかみしめて顔をそむけた。息を吸って、彼女はロジャーを部屋に引っ張っていった。

翌朝ジルは、おんどりの声で目をさました。網戸に伏せてある木製のよろい戸から細い光がもれていた。よろい戸はいくらか暑さをふせぎ、音は通したが、ないよりまじだった。

彼女は一枚シーツを蹴飛ばし、手探りでトイレに行った。用をすませてから窓に歩み寄り、レバーを下ろした。光が差し込み、明るすぎたのでよろい戸をばたんと閉めた。

彼女は目をこすり、服を拾った。隣にはロジャーが眠っていた。

服を着て急いで部屋を出た。時刻は午前の中頃で、漁船はもう出てしまっていた。潮が満ちてきていた。ジルはあくびをして伸びをした。朝食の時間だ。

近くのレストランを見つけ、玉子とベーコンにトースト、コーヒーを頼んだ。ロジャーのことを考えながらゆっくり食事をとった。これが続くようなら医者頼もうと決めた。そう考えたら元気になった。金を払って部屋に戻った。

ドアを開けると、ロジャーが起きていた。壁に寄りかかり、彼女に背を向けていた。腕を広げ、手のひらはなめらかな壁の表面にぴったりつけている。爪でしっくいひっかく音が、空をひき裂いた。

「何してるの」

かれは腕を伸び縮みさせていた。

「ロジャー？」

「なーん？」

「何してるの」

「別に」

「聞こえないわ」

「別に何もしちゃいないよ」その声は荒っぽかった。

「こっちを向いてよ。よく聞こえないの」

かれは首をかしげた。「ちょっと待って」

彼女はいらいらと待って、ながめた。かれのあごは上下に動き、手のひらは壁をこすっていた。やっと彼は腕を下ろして、ゆっくり振り返った。舌先が突き出でて唇をなめ、ひゅっと口の中に戻った。そして臆病そうに笑った。

「おはよう」

「もうお昼よ」

「道理で腹が減ってるわけだ」

「何をしてたの、ロジャー」

「何のこと？」

「つまり、何で壁にくっついてたの」

「わからない。ちょっと遊んでたんだな。どんな具合か見てたんだ」

「どんな具合って、何が？」

かれは肩をすくめた。「わからん。どうでもいい。大したことじゃないよ」

「どうも気に入らないわ、ロジャー。どこか変よ。医者に行きましょう」

「ただの休暇じゃないか、ジル」

「あなたの行動は変すぎるわ」彼女はロジャーに歩み寄って手を伸ばした。はじかれたように、それを引っ込めた。もう一度さわった時には、指先が震えていた。

「どうかした？」

「あなたの肌が……」

「何、何だい、ジル」

「冷たい」

「暖めてくれ」かれは近づいてきた。「お願いだ」

かれの鼻の穴が広がり、乾いた息が彼女のほおにかかった。舌がすばやく出て彼女の髪を、耳をなめた。彼女はふるえ、かれにからだを預けた。荒っぽく男は女を脱がしにか

かった。その指は不器用で、手伝ってやらなければならなかった。彼女はシャツを脱ぎ、それからショートパンツをけり下ろした。

二人は裸で立ち、顔を見合わせた。ロジャーはのどで低い音をたてた。息が荒い。ジルは腕を持ち上げ差し伸べた。かれを引き寄せた。背中に食い込む小さな爪と引っ掻く肌を気に留めず、かれをベッドに引きずりこんだ。

両足の間をくすぐる舌で、彼女は一回達した。不思議な感覚で心地よく、暖かな小麦畑の上を漂っているようだった。顔のほてりは去ったが、喜びはしばらく続いた。ロジャーは彼女の隣に横たわり、彼女の胸のかすかな動きを見ていた。嵐が通り過ぎ、かれの表情には大きな静けさがあった。その目は穏やかで、心は寛容だった。かれはのどからかすれた声を出し、彼女にささやきかけた。

「愛してるよ、ジル」そよ風に吹かれたように、彼女はかすかに身じろぎした。

「ここに連れてきてくれてありがとう……」やさしくかれは自分の腕を持ち上げた。

「平穏と休息を見つけるのを……」羽のような舌は柔らかく、最後に彼女に触れた。

「……助けてくれて」

かれは彼女からすり抜け、ベッドから床におりた。掛けがねを二度軽く引き、一度大きく引っ張ると、ドアの外に出た。階段でしゃがみ、頭をぐっと上げた。突然、かれは階段を駆け上がった。力強い足でぐんぐん前進する。軒先につかまって、体を引っ張りあげ、ちょちょこと真ん中に進んだ。真昼の太陽がかれを熱にひたした。永遠の暖かさの約束。

トンボが顔のそばをすいすいと飛んだ。かれの目は弾んだ。

空腹。食べ物。

舌をひゅっと出し、羽に触れ、巻いて戻した。羽音が止まり、目を静止させて、生き物はすわり、食べ続けた。



## ウェットスーツ

初めて父とウェットスーツの話聞いた時、キャムはそれを認めたくなかった。話してくれた母を、嘘つきの科で糾弾したかった。でも、そんなことをするのも妙な話だ。家族の嘘というのは、語られない種類の嘘なのだから。家族の嘘は、さわれて手に持てるものに基づいたりしない。母のフランが「あの人がどこにこの箱を隠してるのか、ずっと不思議だったわ」と言って、それから後で「あれは父さんのよ……前に使っていたの」と言った時、キャムは母が作り話をしているのではないとわかった。

キャムにとってはひどい瞬間だった。段ボールの向こうにひざをついていた母は同情的だった。母もまた、夫の突飛さと野蛮な奇行の犠牲者だった。何度もだ。息子が知らなかったほうが意外だった。

それはガレージの中にあった。大きな寝室が五つある家の、大きな二台の車用のガレージだ。色とりどりの、気持ちのいい秋の朝だった。裏のカエデの赤さび色の葉はとても豪華で重たく見え、落ちる時にドサッと音がしそうだった。正面のポプラはもう茶色になって、葉は芝生や車寄せに散らばり、他の庭の葉と混じりあっていた。ガレージの外においたメルセデスの前輪の前に、小さな落ち葉の山ができていた。キャムの父が死んで四カ月がたっていた。

キャムは週末に、家の冬支度をする母を手伝いに戻っていた。屋根の古びた屋根板を交換し、防寒用の窓を取り付け、外壁の羽目板の穴をふさぎ、はげた所にペンキを塗った。母に手伝いを頼まれて帰ってきたのだ。父の作業場には、彼女の使わない道具がたくさんあるそうだ。おまえが持ってなさいと言う。父のボートがあり、それは約五メートルのグラスファイバー製で、使われずに大きなガレージの半分を占領していた。それも持ってきなさい。全部持ってきなさい。だって、息子なんだから。

キャムはそんなエサなしでもきただろう。母は大きな家にひとりで住んでいて、どのドアをどんだけ開けるなどと言われない、気楽な生活をしていた。母の恐れている間違いはよくわかっていた。でも、もっと簡単ならよかったのに。母が一言、ちょっとお願い、と頼んでくれたらよかったのにと思っていた。道具とかボートのことを持ちだしたり、所有に関する嘘を持ちだしたりせずに。母があっさり願いを言い、自分が単純に「いいよ」と

答えられればよかったのに。けれど双方にとってリスクが大きすぎた。だから、双方ともこの筋書に固執した。

母とキャムがガレージにかかった頃には、もう日曜の午後になっていた。キャムは一日仕事をしていて、その最後が父のボートだった。かれはトレーラーのフレームのまわりを歩き、車輪のブレーキをゆるめたりした。母はガレージの反対側から見ていた。

「引き出す時に気を付けてね。思ったより幅があるわよ」

「うん、気を付けるよ」

「メルセデスを動かしましょうか」

「大丈夫」

キャムはブレーキをゆるめ終り、ボートのへさきの下の、長いフレームのアームが金属製の軸受けで終わっているところへ回った。車をバックさせ、軸受けを車の後ろのフェンダーから突き出ているボールに入れて、そして車でボートを引き出すのは簡単だ。父といつもメルセデスでやっていたことだ。けれど今回は自分の腕と足だけでボートを引いてみたかった。

手を後ろ手に合わせ、フレームの軸受けをつかみ、そして足を踏み締めて引っ張った。フレームはぎしぎしなったが動かなかった。もっとひっぱった。フランは腕を組んで見つめていた。

「車を使ったらどう」とは言ったが、息子が耳を貸すとは思っていなかった。

貸さなかった。肩とももの筋肉に力をこめ、地面に平行になるぐらい前に体を倒した。顔は紅潮した。自分がこんな馬鹿なことをしているのを見たら、父はがっかりするだろうと、ふと思った。車輪がきしみながら回り始めた。一度動き出したら簡単で、すぐにメルセデスの脇の車寄せにボートを出せた。もう少し先まで引き出し、軸受けを地面に下ろした。シャツの背中には汗がにじみ、額は濡れていた。

フランは、ボートを寄せ過ぎてメルセデスに傷がつくところだったということには、触れないことにした。ボートが出せたのでホッとした。空っぽになった場所を少し見つめて、夫のことを思った。

「ほら」と彼女はぼんやりと言い、いくつもある箱からひとつを選んだ。「これがボートのよ」

キャムは近づいてきてそれを受け取った。箱にはウェットスーツがたくさん入っていた。古くて黒いゴムでつぎが当たっていた。かれは外に出てボートのフレームに足をかけ、へさきの下に箱を投げ入れた。

「あれも持ってきなさいよ」フランはガレージの奥に立てかけてある水上スキーを指さした。「それからこれも」彼女は救命胴衣と長いナイロンロープがぎっしり詰まったほか

の箱を押し出した。立ち上がってひざのほこりを払い、あたりを見回した。ガレージは空で、そこに暮らしていたものがいなくなったような感じだった。彼女はちょっと涙ぐんだ。

キャムが入ってきて、二人は一緒に静かにたたずんだ。午後の光がガレージの奥のドアの窓から差し込んでいた。外では丘の脇にあるカエデの幹をまだらに照らしている。そよ風が木の葉を揺らし、ガレージの床に木漏れ日が踊っていた。

キャムは両手をポケットに突っ込み、足の重心を移していた。その静かなたたずまいを見てフランは夫を思い出したが、夫のジャックは厭世的だった。キャムの場合はずっと邪気がなかった。彼女はほほえみかけた。

「ポートをつけると運転が大変になるわ」と彼女は言った。「気を付けてね」注意するのは愛情の裏返しだった。

キャムは母を見た。「え、なに」

「今夜家に帰る時、運転に気をつけてって言ったの」

かれはうなずき、無性にさみしかった。視線がさまよう。「あれは何」かれは天井の方を指さした。頭の上の手の届かない所に箱がひとつ、ガレージのドアを支える二本の金属製の梁の上に水平に置かれてあった。

「さあ、なんでしょう」と彼女が不思議そうに言った。「はしごを取ってきて。見てみましょう」

キャムがいない間フランは箱のことを考えた。床や壁にいくらでも場所があるのに、手の届かない所に物を置くなんて、ジャックらしくなかった。夫は効率的で、動きや考え方に無駄がないのを誇りにしていた。同じことを家族にも要求し、みんなを脅えさせていたのを苦々しく思い出した。厚顔なほど尊大で、自分の優秀性を当然と考えていたわ。もっと悪いことに、彼女自身それを受け入れ、夫の陰に従うことで事足りりとしていた。不合理な所に置かれた箱を見つめながら、その思い出のために怒りがこみあげてきた。こみあげたが、すぐに押えつけた。そんな感情を墓場から持ち越すのは恥ずかしいことだった。

キャムがはしごを持ってきて、手のひらで止め金を掛け、登った。簡単に箱を持ち上げ、抱えて下りてきた。フランは箱の軽さを見た時、突然ひらめくものがあった。息子から箱を素早く取り、床の上に置いた。その一瞬をいつくしみながら、彼女は段ボール箱のふたに身をかがめた。

箱の一番上は、またジャックのウェットスーツだった。ジッパーを表向きにして、ワイシャツのようにきちんとたたまれていた。フランはその肩の所を持ち、ちょっと振ってスポンジ状の生地をまっすぐ伸ばした。まず気が付いたのは、それが女性用だということだった。前に胸が入るためのダーツが入っていた。そしてそれは改造してあった。股下の

布は、普通後ろからきて前で止めるのだが、それがなかった。そして下にはスカートがついていた。プリーツでていねいに縫ってあり、ピンク色の短い広がるスカートだった。

フランはまるでお針子が自分の仕事を調べるように詳しくそのウェットスーツを見た。「あの人がどこにこの箱を隠してるのか、ずっと不思議だったわ」

キャムはいぶかしげな顔をした。「これは何なの」

フランは箱のふちにスーツを置き、スカートにさわっていた。ていねいに縫ってあって、スーツの暗色に目立たないように黒糸を使っていた。かがり縫いさえしてあって、夫が針と糸を持って一生懸命に縫っている姿を想像すると笑いたくなった。彼女は他に何が入っているか見ようとのぞき込んで、それから思い直してしゃがんだ。彼女はスーツをたたみ出した。

「この荷物は何」キャムはもう一度聞いた。

「父さんのよ」彼女は顔を上げずに答えた。ジャックにある種の忠誠心を感じ、彼女は箱のふたを閉め始めた。それは夫が活着ている時には感じたことのない、夫を守ろうとする責任感だった。しかし心の中で彼女はキャムに止めてもらいたかった。かれは止めた。

「父さんのってどういうことだい」その声は鋭かった。

「だから、父さんのよ」

「見せて」

かれは箱に手を伸ばしたが、フランは腕でおさえてそれを止めた。

「だめよ。安らかに眠らせてあげて」

「ぼくは見たいんだ」かれはくり返した。ひざまずき、箱に手をかけた。しばらく二人はにらみあったが、フランが降参した。

キャムはウェットスーツを取り出し、床に置く前に自分で調べた。手を入れて子供用ブランコに似たものをひっぱり出した。それはゴム製のパチンコだった。二本の太い帯が中央の交わった所で結んであり、そこから次第に細くなって数十センチ伸びて四つの細いひもになる。キャムは端をもって立ち上がった。それはちょうど床まで垂れ下がった。

「これは何」

「しまいなさい。キャム」

「何なのさ」彼は強く聞いた。

「拘束衣よ。父さんが時々使ったの」

かれはそれを少し見つめ、そしてスーツのとなりの床に置いた。片手に一杯のゴムひもを取り出した。あるものは短くあるものは長い。ウェットスーツ用のブーツも一足あった。かれは箱を持ち上げ逆さにした。後は何も出てこなかった。

フランはしゃがみこんでひとりで楽しんでいた。ジャックの執着していた仕掛けがとて



もおかしなものなのを見て、かれに対する愛情が思いがけず満ちあふれてきたのだった。キャムは逆に苦い顔をしていた。

「ごめんなさい」とフランは、まじめな顔をつくろうとしていた。「みんな知ってると思ってたの」

キャムは無言で首を横にふった。

「たぶん後で話した方がいいでしょう」

「いや、今話してよ」

彼女は息子の真剣さに合わせるために心を落ち着けた。「このものだけ……これはお父さんのなの。裏庭で使っていたわ」彼女は間を置いた。「あなたのお兄さんやお姉さんは知ってるわ。あの子たちがあなたに話してなかったなんてびっくりよ」

「聞いてないよ。父さんは何をしてたの」

「いろんなことよ。個人的なこと。わたしは見たことないの。知ってたけれど見たくなかったの」自然に嘘がつけた。

「どんなことなの」

彼女はためらい、そして肩をすくめた。「ディアドリーが最初に話してくれたの。おびえててね。あの子はまだ六つか七つだったものね。パパが裏庭で自分をぶってるって言うの。変な格好のウェットスーツを着て、ひもで自分をぶってるのですって。何か、ブーツだと思うんだけど、スーツの胸の部分に詰めていたんでたんですって」彼女はその光景を想像したが、こっけいでそして心乱れた。

「パパはそのゴムの仕掛けにすわっていたの。その拘束衣よ。裏の、山側のカエデの低い枝に上を結びつけ、それにくるまるようにすわっていたの。そして跳ねていたの。上下に揺れて、でも地面にはギリギリつかなかったわ。そしてうめいていた」

「ばかばかしい。ディアドリーの作り話だよ」

「ディガーも見たのよ」

「信じられない」キャムは怒って言った。

「あなたたちの父さんは楽じゃなかったのよ。あの人には自分に厳しかったわ。他人にもね。そんな人は、必ずそのプレッシャーが爆発するものよ。暴力的にな人もいるわ。少なくともあの方は、自分一人で解消していたのよ」

「でもなんで自分をぶったりしたの」

「そうは言わなかったわ」フランはとげとげしく答えた。

「言ったよ」

「キャム」息子がそんなに怒るとは予想しなかった。何年間も彼女はこのことと暮らし、それを隠して対処できる何かに変えてきたのだった。夫の妙な癖。個人的特徴。またひと

つ崩れた結婚に対する夢。

しばらくして彼女はその物を箱の中に戻し始めた。彼女はそれをぼろきれのようにぞんざいに投げこんでいた。キャムは、母の手つきに何か不自然なものを感じたが、止めなかった。とりあえずそれが視界から消えて幸せだったのだ。

彼女はふたを閉めてスカートの上を伸ばしながら立ち上がった。裏のドアの窓から見える太陽は低く沈んでいた。山側の木、太い水平の枝のあるカエデは、ほとんど真っ暗だった。フランは自分を抱き締めた。

「遅くなっちゃうわ。もう行きなさい」

「この、これはどうするの」

「わからない。決めなきゃね」

キャムは手をポケットに突っこんで自分の足を見た。「持って帰りたいんだけど」とつぶやいた。「ボートと一緒に」

「それはちょっとねえ」

「後で返すから」

「だめ」彼女はやさしく言った。「これはここにあるべきよ。たぶんわたしが後で捨てるわ」

キャムは文句をつけなかった。母に歯向かいたくなかった。一人になりたかった。

車にボートをつけて出発する時、かれはさよならを言いに行った。母はメルセデスのわきに立ち、腕を組んで、涙ぐみながらもほほえんでいた。キャムは母のほおにキスをしてちょっと抱きしめた。

「落ち葉集めに誰かを雇った方がいいよ。木の葉は排水溝に詰まるからね」

「運転に気をつけてね。疲れたら休むのよ」

キャムは車に乗ってライトをつけ、出発した。振り向かなかった。州間高速に乗った時には真っ暗で、休憩なしに家に直行した。

次の日、妻のアニタに話した。夜で、子供たちは眠っていた。彼女は途中で何度も質問をして話をさえぎった。彼女は細かいことを聞きたがった。スカートの長さはどれぐらいなの、正確には何色かしら、ひもは何本あったの、それからどのぐらいあなたのお父さんはそれをやったの、フランはどうなの、彼女はどんなことをしたの。ついにキャムは妻を黙らせた。

「知ってることは話したよ」彼はぴしっと言った。「質問はやめてくれないか」

「驚いたわ」彼女は子供のヘアブラシで髪をほどこしながら言った。「ジャックおじいちゃん。立派で独善的で、変態のジャック」

「変すぎるよ」キャムは言った。「時々うちの家族はどこかの星から来たんだろうと思うよ」

「恥ずかしいの」

「自分でもわからない。父のことはかわいそうだと思う。父がそんなことまでしなきゃならなかったことはね」

「たぶん好きでやってたのよ」

キヤムは顔を曇らせた。「それは信じにくいな。いったい何を考えてたんだろうか」

アニタはかれの声に何かを感じ、手を握ってやった。「誰でも何かあるのよ、キヤム。それが人間ってものだわ」

「ほう、そうかい」彼はきつい調子で言った。「木に自分を縛りつけて自分をぶつ。それが人間ってものなのかい」

数週間後、ディアドリーに電話をした。彼女は三人兄弟の一番上で、キヤムより四才年上だった。ウェットスーツのことを聞いてみた。

「ええ、知ってるわ。家族のみんなが知ってるわよ」

「ぼくは知らなかった」

「あら知ってるはずよ。あなたとわたしでお父さんを見たもの。あなた、たぶん忘れるのよ」

「いや、ぼくは見たことないよ。ディガーは見たって言うし、そして姉さんもだ」

「あなたまだ三つか四つだったものね。たぶん覚えていないのね」

「そんなこと忘れるはずないよ、ディー」

「仕方ないわよねえ。わたしだってすごく怖かったもの」

キヤムはそれを思い描こうとしたが、一切浮かばなかった。全然現実的でなかった。何も思い出せないのが不安だった。

「母さんが父さんのやってたこと話してくれたんだ。理由をきいたら、プレッシャーとか何とか言うんだ」

「水着のことも話してくれたの」

「水着がどうしたの」

「毎年一回、時には二、三回、父さんは母さんに水着を買ってあげてたの。わたしたち三人を生んだ後で、太ってスタイルが悪くなってからよ。ハイレグでストラップレスで、全身きついセクシーなスパンデックスの水着を買って帰ってきたわ。雑誌で見るようなやつよ。父さんはそれを買うためだけに、わざわざ街に出かけてたの。母さんにあげてたんだけど、時々はちゃんと包んだかもしれないけど、普通はそのまま渡してみたい。

最初は母さんも着てみたんだけど、一、二回でやめたの。きつすぎるって言ってね。確かにそうだったけど本当は馬鹿みたいだと思ってやめたのよ。父さんには話さなかった

けど」

ディアドリーは間を置いた。キャムは受話器を耳にきつく押し当てていた。すぐに彼女は話しを続けた。

「だけど母さんはわたしにこぼしてたわ。しょっちゅうね。恥ずかしし、侮辱されてるみたいってね。父さんが買ってくるたびに母さんはそれを捨てていたの。全然気づいてないって言ってたわ。父さんは水着を買い、家に持ち帰り続けてた。いずれ母さんが折れると思ってたのでしょうけど、買ってくればくる程母さんは嫌がってたのよ。二人のセックスライフもその頃ないに等しくなってたわ。その頃から父さんが裏庭でショーを始めたみたい」

「母さんは水着について何にも話してくれなかった」キャムは言った。

「仕方ないわよ。たぶん思い出すのも嫌なんじゃない」

「だけど母さんになぜって聞いたのに」かれは母に信頼されていないのに傷ついて言い合った。「何か言ってくれてもよかったのに」

「恥ずかしかったのよ。両方に関係あると思ってないのかもよ。母さんってそういう人でしょ」

「だけど何でむちなんか。ディー。それからスカート。いったいあれは何なんだい」

「わからないわ。わたしもいろいろ考えたけど、見当つかないわ。うまい説明はないわ。たぶん母さんが正しいんじゃない。父さんにはいろいろプレッシャーがあったのよ」

「まるで思い浮かべられないんだ。あの父さんが」

「そうね、わたしたちが育った家族像とはちょっとちがうわよねえ」彼女はくすくす笑った。「確かに教会で聞かされた覚えはないもの」

ふたたびキャムは父がウェットスーツを着て木からぶら下がり、はずんでいるのを想像した。父は一番下の太くて水平な枝をとらえ、ひもを巻きつけて縛る。秋で木の葉は紅葉している。父がはずむと葉がざわめき、葉がいくらか散ってゆっくりと地面に落ちる。キャムは揺れる木の葉や枝はしっかりと頭に浮かんだし、暗い色のゴムの馬具でさえ思い描けた。けれど父は、若くても年を取っていても、ほほえんで汗をかいてそこに乗っているのを想像できなかった。母がぴったりのセクシーな水着を着ているのを想像する以上に、父の姿は思い描けなかった。

「キャム」ディアドリーが言っていた。「聞いている？」

「うん。もう切った方がいいね」

「怒ってるのね」

「わからない。少しはね」

「わたしもそうだった。ずっと前には。つらかったわ。父のことだけじゃなくて全てが。

何度も考えなきゃいけなかった。ひとつのうそ、あんなひとつの秘密が原因で、全てのことが別の意味を持っているんじゃないかと考えたわ。自分の人生まで疑ってしまうの」

「何で父さんは単純に娼婦を買いに行かなかったんだろうか。じゃなければ秘書とデキるとか」

「そっちの方がよかったって思うの」

「その方がまだ普通に近いだろ」

「父さんは悪い人じゃなかったのよ、キャム。一生懸命やってたのよ。たぶんわたしたちと同じように悩みがあったんだわ」

「父さんはあんなことをした夜、何を考えていたんだろう。ぼくたちが寝静まるのを待って。衣装を着て外に出るのを待ってる間に」

ディアドリーは答えなかった。そしてしばらくしてキャムは彼女がまだ電話口にいることに気がついた。

「それじゃまた」かれは言った。

「あまりせっかちに決めつけないでね、キャム。時間が必要だわ」

「ああ、そうだよ」

「電話ありがとう。アニタや子供たちによろしくね。じゃあ、またね」

キャムは電話を切り、壁を見つめた。すぐに電話を取り上げ母に電話をしたが、二度ベルが鳴った後で受話器を置いた。居間に向かい、玄関の前を通り過ぎた。郵便受け口の下  
の床の上に手紙の山があり、その中に母からののがあった。かれは指で封筒を破り、その事務的な短い手紙を読んだ。だいたい父の遺言に関することだった。母は家が大きすぎて嫌だけれど、自分の物のようなのでその点は気にいっているといていた。近所の男の子でも雇って前庭の木の葉をかき集めてもらおうといていた。アニタと子供たちによろしくとあった。追伸に短く、あの箱は捨てたとあった。

『取っておく理由がないようだし』と母は書いていた。『捨てる理由は十分にあるようでしたから』

キャムはうれしくなかった。次に母の所へ行った時には箱を持ってこようと思っていたのだ。今もうそれは無くなり、かれは腹立たしかった。当然自分のものであるべきものを取り上げられたような気がした。自分では論理的な反応のつもりで、かれは自分でウェットスーツを作ろうと決めた。

正面のジッパーの両わきに追加のダーツのある、女性用のスーツを買った。股下の布を切って腰にスカートを縫いつけた。古いタイヤのチューブを切って粗雑なつり帯を作り、その残りから二、三本細いゴムのむちを作った。ブーツはもう買ってあった。

あかれの家の庭には木がなかったので、キャムはガレージの中の木の梁を使うことにし

た。アニタと子供たちが友だちの所に遊びにしているある夜、かれはガレージから自分の箱を取り出し、スーツを着た。梁にゴム製のつり帯を掛けて結びつけ、乗ってはずんでみた。最初ははずかしく、続いて馬鹿ばかしくなった。父のことを考えようとしたが、何も心に浮かばなかった。ゴムのひもを取り出して、気乗りしないまま、太ももや背中をたたいてみた。痛かったのでしばらくしてやめた。彼はまたはずんでみた。心を開いて受け入れてみようとした。何も起こらなかった。馬鹿ばかしく思ったが、またやってみた。全然だめだ。

数分後、かれはつり帯から下りた。ひもをはずしてスーツを脱ぎ、それから全部箱の中にしまい、家に入った。問題がはっきりするだろうと期待していたのに、だめだった。まぬけな気分だった。

その光景を心に思い起こそうとした。カエデとその一番下の揺れている枝、その枝の赤や紫の葉が揺れて落ちるのを思い浮かべた。その木と木の葉が一番印象的で、それがないと実感がわからない、それがないと光景が完成しないと思った。向こう見ずかもしれないが、実行できるだろうと思った。

次の一時間計画をねって、母に一、二週間後に雑用の残りを済ませにいきたいという短い手紙を書いた。その後ガレージに戻って箱を車のトランクにしまった。そしてアニタと子供たちが帰ってくるのを待った。

一週間半後の土曜日、かれは母の家に行った。アニタも来たが、一人で行かせてくれるように頼んだ。家族の問題なんだとほのめかし、アニタは口をはさむまいと思ったのだ。彼女には、かれがまだ父の死と取り組んでいるのがわかったのだ。

母の所でカムは一日雑用をして、それは冬の前の最後の芝刈りも含んでいた。前庭はずばやく片付けたが、裏庭はしょっちゅう山側のカエデを見上げて手を止めたので手間取った。葉のほとんどは落ちていたが、いくらか縮れた葉が残っていた。近くに忍び寄って太い枝を調べ、使った形跡、木の皮が光ったりはげ落ちた場所を捜した。何もなかった。

その夜夕食の時、フランはカムの家族について尋ねた。

「みんな連れてくればよかったのに」と彼女は言った。

「子供たちにはひどく長いドライブだよ」カムは答えた。「一晩だけだしね」

「お葬式以来アニタに会ってないわ」

「よろしくって言ってたよ」

「わたしアニタが好きよ。ずっと好きだよ」

「ああ。今度は彼女も連れてくるよ」

話はゆっくりとあっちにぶつかり横道にそれ、とりとめもなかった。父がいなくて夕食をとるのは、カムにとって隊長が突然いなくなった探険隊にいるようだった。食事の終

わり近くなって母がきまり悪そうに言った。

「あなたが来てくれてうれしいわ、キャム」

かれはうなずいて答え、フォークでは食べ物をつぶしていた。

「時々さみしいのよ。あなたたち子供はみんないなくなって、今度はジャックでしょう。もてあましちゃうのね」

「家が大きいからね」

「二階を閉めてしまうつもり。ベッドルームを片付けて、あなたたち子供がやって来た時のために開けておくの。わたしが住むのには下だけで十分だわ」

「売らないの？」

「考えたわ。でも早すぎるわね。先にやることがあるもの」

「売らないでよ」彼は皿から顔を上げて言った。「この家が好きなんだ。他の誰かがここに住むなんて、なんかまちがってる」

フランはほほえんで目に涙を浮かべた。彼女は涙をぬぐった。「あなたが来て本当に助かったわ、キャム。ちがうのはわかってるんだけど、時々ここにひとりで、ジャックの死が辛いのは自分だけのような気がしてね。夜が一番つらいわ、ベッドの中でね。時々不安と恐れでたまらなくなって、凍りついてしまうの。目が覚めているのに体を動かさなくて、胸の内がどんどん高まってきて、砕けてしまいそうな気分になって。そうすると突然それが終わって、また動けるようになって、わたしは寝ながらふるえているの。そういう時にジャックがここにいたらと思うわ……」息子に心の内を見せたことに突然恥ずかしく、彼女は黙った。

「そしてあの人がいないので」彼女は静かに締めくくった。「あなたたち子供たちのことを考えるの。考えると落ち着くわ」

キャムは母の喪失感が自分以上なのをしばらくの間感じてため息をついた。立ち上がり、母をおずおずとやさしく抱き締めた。しばらく母の椅子のそばから離れずについて、そしてまた椅子に座った。

「ぼくも父さんがいなくてさみしいよ。予想もしない時に時々恋しくなる。すわってたり本を読んでいたり、それじゃなきゃたぶんちょっと窓の外を見ていたりすると、いきなりそこに父さんがいるような気がするんだ」キャムは間を置き、思い浮かべた。「父さんがそこにいるとを感じるんだ、わかる？ どうしたらいいか教えてくれるんだ」

「それが父さんよ」と彼女は言ったが、その声の調子でキャムは突然水着のことを思い出した。

「父さんが死んでうれしい？」

「うれしい？ なんだってまた」彼女はギクリとして、ちょっと口をつぐんだ。「うれし

くないわ、キャム。たぶんちょっとはほっとしたけど。父さんは一緒に暮らし易い人じゃなかったからね。自分が世界の中心だと思っていたし、世話してもらおうと思っていたわ。自分勝手な人だった」

「父さんはぼくたちを愛してた。愛してなかったなんて言わないよね」

「言わないでしょう。もちろん愛してましたとも。あなたたちのお父さんじゃない」

「父さんは母さんのことも愛してたね」

「あの人なりにね」

「父さんは父さんなりしかなかったんだよ、母さん。あれで精一杯だったんだ」

その声のとげとげしさに、キャムは傷ついた。彼女は返答を考えようとしたが、とうとうテーブルを離れた。黙々と彼女は皿を洗い始めた。どちらも口をきかなかった。ついにキャムは居間に行ってテレビをつけた。後でフランがコーヒーとクッキーを持ってきて加わった。二人は口をきかずに食べてテレビを見た。ついにお休みを言った時には十一時を過ぎていた。

フランはガレージの上のベッドルームに行った。そこは本の並んでいる短い廊下で母屋につながっていた。キャムは二階に上がって子供の頃寝ていた部屋に行った。かれは落ち着きなくベッドに横たわってラジオを上の方で聞いていた。一時間が過ぎ、そしてまた一時間。アナウンサーが一時半を告げた時、かれは起きて階下に下りた。

玄関から気をもみながらすべり出ると、手のひらはいやにじっとりしていた。すばやく無事に終わらせたかった。ふと、父もそう感じたのだろうかと思った。

ガレージに着くと、ドアが閉まっていた。どきとした。ドアを開ける時に母を起こす危険を冒したくなかったのだ。そして少し思案してから、後ろにまわることに決めた。ガレージの後ろのドアは古くてほとんど使われておらず、開ける時にきしんだ。かれはすばやくすべり込んで、後ろを閉めた。

メルセデスの後ろを通過して自分の車に行った。以前はボートが置いてあった場所だ。トランクを開けて箱を取り出しながら、かれは震えていた。冷える夜だった。急いで服を脱ぎ、身じたくをした。トランクを閉め、空になった箱に自分の服を入れて裏のドアの側に置いた。片手につり帯、もう片手に三本のゴムのむちを持って、つま先立ちで外に出た。

その夜は早い雪が降りそうな気温だった。キャムは山の本に近づいた。地面にゴムのむちを落とし、つり帯をほどいて端を木の枝に投げかけた。きつく縛り、むちを拾って中に入った。緊張して、かれは弾み始めた。

木の枝は家の梁とは違った。動くと一緒に揺れて、ぐいと戻る前に毎回ちょっと間があった。それはやさしいリズムで、ある種の催眠効果があった。しだいに緊張がほぐれた。周囲が目に入るようになってきた。いくらか残った葉が枝の端でかさかさいってい



る。肌に空気が冷たい。そばの木、そして家がかがっしりとしていて、まるで人のようだ。かれは着ているものを見下ろしてにやにやした。スカートがとてもばかげて見えた。そして手の短いゴムのむち。どうしても使う気にならなかった。

もうしばらく弾んで、夜の安らぎを味わっていた。疲れたのでやめた。つり帯から下りてひもをはずし、ガレージに戻った。戻る時、何かにつまづいた。かれはドアにぶつかった。ドアはぱんと開き、大きくきしんで後ろの壁にぶつかった。かれは凍りつき、心の穏やかさが一気に吹き飛んだ。上の部屋から音がした。明かりがついた。中で急いでかれは着ている物を引き裂いた。ジッパーがスカートの端に引っかかって、前を引き裂き開ける前にちょっと手間取った。箱を見つけて服を引き出し、他のものを全部中にぶちこんだ。外では窓が開いた。

「どなた」母が言っているのが聞こえた。「誰かそこにいるの」

かれはひもを締めずに靴をはき、シャツをたくし込んだ。それからガレージを出て後ろのドアを閉めた。

「ぼくだよ、母さん」かれは窓を見上げた。「起こしてごめん」

「そこで何をしているの。午前二時よ」

「眠れなかったんだ。新鮮な空気を吸おうと思って」かれは家のまわりを回って戻り始めたが、その間母はベッドルームの明かりでシルエットになって、こっちを見ていた。かれは立ち止まり、母を見返した。

「大丈夫だよ、母さん。ベッドに戻ってよ。朝に会おう」

かれは角を曲がって消え、玄関の階段を駆け上がった。中に入ると急いで二階に上がり、ホールで母に会わないようにした。自分の部屋で、安堵でくらくらしつつ、ベッドにへたり込んだ。自分がやりとげたことに驚いていた。ほとんど見つかりかけたことで、このすべてがさらに別の意味をもつことになったのだった。

ベッドの上で眠りに落ちた。ラジオが一晩中ついていた。朝、たった数時間しか眠っていないのによく休まった気分ですきた。顔を洗って階下に下りてキッチンへ行った。母はいなかったがコーヒーマーカーには熱いポット入りコーヒーがあった。自分でカップに注いで、外の様子を見に前のポーチへ出た。寒く澄んだ日で、芝生には薄く霜が下りていた。

両手でコーヒーカップを握りしめて顔に湯気をあてた。驚くほどにいい気分だった。かれはふらりと前の階段を下りて、家や回りの安らかさをいつくしんだ。車寄せまで来るとメルセデスがガレージから出してあるのに気付いた。ドアがまだ開いていたので母がいると思って中に入った。母はいなかった。戻ろうとした時、箱が目に入った。それは後ろのドア近く、かれが置いた位置にあった。メルセデスが出てしまったので、とても目だっていた。

キャムは目をみはり、まるで昨夜ドアが壁にぶつかって音をたてた時のように息が胸に詰まった。見回してひとりなのを確かめ、それに近づいた。箱は前と同じようだったが、どのように置たか正確には思いだせなかった。ふたは閉じていたが.....自分でやったのだろうか。箱の向きが変わっているような気がして、思いだそうと一歩下がった。目を閉じて、昨夜の細部をいちいちまとめようとしたが、一生懸命やればやるほど確信がなくなった。もう一度見た。わからなかった。一瞬ごとに記憶も変化するようだった。

自己嫌悪と不安とで、かれは箱をつかみ、怒りにまかせて車のトランクに投げ入れた。朝の静けさが消えた。恥ずかしがることは何もないと納得しようとしたが、だめだった。責め立てられそうな気がして、母に対するもっともらしいいいわけを必死で捜した。父なら何と言うだろうか。かれは両手をこめかみにあてて目を閉じて集中した。

「どうかしたの」

かれはびっくりした。「いや」とかれは、母がガレージに入ってくるとすぐに我にかえった。「ちょっと考えごと」

「遅くまで起きてたものね」

「ああ。ちょっと疲れてるんだろう」かれは伸びをして母の視線を避けた。

「朝ごはん、できてるわよ。帰る前に何か食べた方がいいわよ」

かれはガレージから出て歩きだしたが、立ち止まった。「どうしてメルセデスを出したの」

「教会へ行くのよ。なぜ」

「別に」とかれはつぶやいた。

母はかれを見た。「キャム、あなた大丈夫」

「大丈夫だよ」

家に戻る途中、母の視線を感じ続けたが、そっちを見ないようにした。キッチンで、母の態度を見て、母さんは知っているかと確信した。五分後、玉子とトーストを食べた後では、知らないのだと確かに思った。かれが食事をたいらげている間、母はコーヒーカップを手にならわっていた。

「あなたが来てくれてありがとう、キャム。助かったわ。家族がいるんだってわかったもの」

「そう」とかれは弱々しく笑った。「ぼくもううれしいよ」

彼女は変わる事のない愛情のこもったまなざしでかれを見た。そして彼女の顔がまじめになった。

「どうしたの」かれは心配して尋ねた。

彼女はカップの中を見つめ、ゆっくりとかき混ぜた。「つらいのね、そうでしょ」

かれはうなずき、心臓がどきどきした。フランは顔を上げた。

「いずれ消えるわ、そうよね。この不確かな気持ち。現実感のなさ」

何とか母と視線を合わせ、悟られた兆候はないか捜した。何も発見できず、そして突然に、決して自分にはわかるまいと気付いた。母は完璧な思慮深さを身につけていた。息子に恥をかかせないのが彼女の愛だった。かれは不意に感動した。

「うん、消えるよ」かれは母に近づいてその頭を抱いた。「時間はかかるけど」

彼女は何も言わず、息子の手に頭を預けた。とうとう彼女は時計に目をやった。教会へ行く時間だ。

「行かなくちゃ」彼女はそう言ってテーブルから椅子を引いた。「遅れないほうがいいわ」

彼女は部屋を離れ、キャムは荷物を取りに二階に上がった。彼女が玄関を出ると、キャムはもう車のエンジンをかけていた。彼女はウールのコートのボタンを掛けながら息子に近づいた。息子は車から降り、二人は抱き合いキスをして別れた。かれは戻ってちょっと窓から見つめていたが、降りてまた母を抱き締めた。それから車に乗り込み、ギアを入れて走り去った。

フランはメルセデスに向かい、エンジンをかけた。ボタンを押すとガレージのドアが閉まる。太陽が芝生の霜を溶かし始めていた。メルセデスが暖まって、彼女は教会へと向かった。



# そのもの

ヘッティへ

これは愛についての物語。ローリーとエリオットの話で、二人はお互い二十代後半で出会う。ローリーは看護婦で、アウトドア指向。ジョギングをし、ハイキングに行く。たくさんのおつきあいがあつたが、どれも長続きしなかった。つきあってだめだと思ったらさっさとけじめをつけるのが好きなのだ。

エリオットは医者だ。嚢胞性腺維症にかかっている。肺とすい臓の病気だ。献身的でまじめに働き、そして機知に富んでいる。いきいきとした想像力が生へのとっかかり。

この物語はいくつか教訓がある。このケース特有のものと普遍的なもの。ビデオが近く発売される。そして後で共同コラムも。愛は結局のところ、そんなにむずかしいものじゃない。それは都市でもなく、思想でもない。思慮深さと成熟を持って臨めば、愛は玉子をゆでるみたいに簡単だ。

## 1. ダイスがころがる

ローリーは集中治療室で働いている時にエリオットと出会った。それは大学の女子寮を焼きはらった火事後の早朝で、医療部門の全職員が駆り出されていた。女子学生たちの黒こげ死体は、まだ混雑した廊下に置かれたままだった。壁にそって並んだ、しわの寄った白いシーツの下の無言の固まり。においがひどかった。家族の者たちが泣き叫び悲嘆にくれ、その間看護婦や医者や職員や雑役係たちは嫌な仕事を片付けていた。悲劇の度合いのため、仮面がはぎ取られた。いつもは見つかり入念な化粧の女たちが、メイクも口紅もアイライナーも忘れた。マスカラは涙でほおに流れ落ちていた。身なりのよい経営者たちはひげを剃る間もなく、ひげの小さなとげがあごやほおからつき出していた。ほんのしばらくの間、この人々は明るく秩序正しい日の光の下では知られざるやりかたで、一つに結びあわされたのだった。

ローリーはエリオットを集中治療室で見つけた。ふたりはこれまで純粹に日常の仕事の中で何回かことばを交わしていた。ベッドの女の子の上にかがみみながら、かれは目を閉

じるかのように見えた。聴診器をその娘の胸にあてて、そして首を横に振った。

「休んでください」ローリーは言った。「一晩中ここにいたんですから」

エリオットは聞こえないふりをした。その額はほとんど娘の焼けただれた肌にふれそうだった。かれは涙をこらえようとしていた。

ローリーは何も言わずにベッドの横に立っていた。彼女の聴診器はだらりと首から下がり、手はベッドの脇の手すりを握り締めていた。彼女は悲しそうで感じやすそうなエリオットを見つめた。彼女は死にかけている娘越しに手を伸ばして、かれの手を取った。

「さあ、コーヒーを飲みましょう」

エリオットは彼女のなすがままに看護婦控室に行って、二人で安手のビニールの長椅子に座った。それは真ん中で二分されていて、中のウレタンがのぞいていた。エリオットは手で顔をおおい、床を見つめていた。ローリーはコーヒーマシンの栓をひねり、コップ二つに生ぬるいコーヒーを満たした。彼女の目は充血して、目の下のくまで年齢より二倍老けて見えた。看護婦をして五年間になるが、これが人生で最悪の夜だった。無意識のうちに彼女は手をエリオットの首において揉みはじめた。

エリオットは、楽になるとは期待せずに、されるがままになった。疲れすぎで眠れなかった。テーブルの上にコーヒーカップを置いて、ローリーの脚にさわった。彼は長椅子に横向きになり、足を組んでヨガのポーズをとり、背中を伸ばした。ローリーはその背中をさすった。ローリーは身を乗りだしてかれを引き寄せた。両手を彼のシャツの前のボタンの間に手をすべり込ませ、かれの胸にさわった。

エリオットは彼女を宿直室に連れていき、ドアに鍵をかけた。かれは医者と看護婦に関するつまらないジョークを二、三話して聞かせた。彼女はほんの少し大きすぎる声で笑った。二人は愛しあったが最初はゆっくり、そしてとても激しくなった。エリオットはおもしろくてやさしかった。ローリーはこうなるのがあまりにも簡単でびっくりした。彼女はすぐに燃えあがって鋭いクライマックスに達した。エリオットも達し、すぐに眠りに落ちた。長い間彼の寝息は早くて荒かった。ローリーは起きていた。彼女はひどく驚いていた。どこかで聞いた詩の一節が心の中に流れていた。

死人が来たりてドアをたたく

死人が来たりてドアをたたく

すると愛、甘い愛が

死を中に招き入れる

## 2. 正しい生物を選んで

ローリーは背の高い男は避けたいと思っていた。彼女は百六十センチで、エリオットはたぶん一センチくらい背が低かった。ローリーとしては文句のない組み合わせだった。一緒に暮らし始めると、本やポットやシャツなどの物を床に近い位置に置いた。台所の一番上の棚は空けておいたし、二人の二つの全身用鏡もドアの低い位置にかかるよう念を入れた。

そのアパートに移って一か月後、エリオットは肺炎で倒れた。入院して三週間で退院した。この期間にローリーは違う人生の味を味わった。毎日見舞いにいき、可能な時は一日二度行った。クロスワードパズルを一緒にやり、お互いに本を読みあい、食事を分け合った。エリオットにはデンプン質が必要だった。麺類やスパゲッティだ。かれの体はタンパク質を消化する機能が低かったからだ。ローリーは食べ物を持ってきて、一緒に食べた。彼女はちょっと太った。時間がなかったのでジョギングをやめ、自分の友だちよりも彼の担当看護婦によく会った。

けれど全体として彼女は幸せだった。好きな男がいて、その男も彼女を愛していた。かれは彼女を必要としていた。いい気分だった。

エリオットの肺炎はゆっくりと回復した。息づかいが楽になり、酸素マスクがはずされた。間もなく息切れせずに一、二文以上言えるようになった。

かれはローリーに語った。「想像力がぼくの強さの元なんだ。想像するのをやめたらぼくは死んでしまう」

かれは二十九才で、同じ病気を持つ人々よりすでに数年長生きしていた。先の見通しは、明るいものではなかった。

かれは続けた。「フィクションは力だ。そこから事実が生まれる。逃避は、観察より直接的なこともあるんだ」

エリオットはことばの響きと、それがもたらす隠れ家を愛した。元気な時には何時間でも話すことができた。かれはローリーに物語を語った。

ある日ふたりは病院のベッドに横になっていた。エリオットは病院のガウン姿で、ローリーはブラウスとスカート姿。看護婦たちは、ローリーは看護婦仲間だし、エリオットは医者なので、二人の親密さを許していた。看護婦たちは思いやりがあったし、健康と回復の摂理を知っていたので、それを許したのだった。

ベッドはエリオットが息をしやすいように起こしてあった。ローリーはかれに寄り添って、片手をかれの腹の上に回していた。彼女はうとうとしながら、かれの声のリズムに息を合わせていた。

かれはこう語っていた。「ローマ教皇のように、ぼくは天使を信じるよ。もっとも教皇みたいに、いい天使や悪い天使というのじゃない。内省的な天使だ。メビウスの輪の形をした鏡。個人的で数学的な死後の世界みたいなものだ。聞いている？」

彼女は眠そうにうなずいた。

「ただの信仰じゃない。証拠もある……」かれはことばを止め、腹の上ののった彼女の手を見おろした。その手は細やかに血管が通り、強く、そして腕は筋肉のふくらみが美しく、ブラウスのそでの中に消えていた。彼女の胸が自分のわき腹に押し当てられているを感じた。

「あるレストランがあって、何度か行ったんだけどね。そこの雰囲気は変わっているんだ。伝説的なエレガンス。そこのお勧めの品は、よそでは絶対はない、神々しい喜びなんだ。よそでは一生かけても見つからない」かれは片手を彼女の乳房に置いて、権威ある話ぶりで話した。「母乳だ。乳と蜜じゃない、やさしい人情の乳でも、夜明けのミルク色の朝露でもない。ただの純粹に心地よい、母乳だ。ほ乳類の醸しだすものだ。われわれの栄養物」

彼女は夢見心地にほほえんだ。それに力を得てエリオットは続けた。

かれは片腕であたりを示した。「当店では、敷地内に各種の動物を飼っております。その神の目のおびただしい反映から、お好きなものを選んでいただけます。地下のおりにはウサギ、シマリス、地ネズミにビーバー。トガリネズミの乳はすばらしいが、ほんの少ししかとれません。身軽な子供がその乳を集める訓練を受けていて、小さくてしなやかな指が器用に指ぬきに貴重な液体を絞っております。ちなみにその指ぬきもお土産としてお買い求めいただけます。

レストランの横に隣接した家畜の柵の中には、ウォンバットやコアアラやカンガルーなどの有袋類がおります。その向こうの起伏した草地には樗やマドローニャの木が点在し、掘り抜き井戸から二十四キロのパイプラインで灌漑しておりますが、ゾウ、ロバ、オオジカ、シマウマ、キリンやラマが草をはんでおります。アリクイがエサを探し、アルマジロもおります。まだ夏で、その動物の仔たちは乳離れしていません。乳はいくらでもございます。濃い、薄い、甘い、苦い。あるものは雪のように白く、あるものは黄色で、あるものは灰色。餓えた子供たちがいて、鑑定するのがとてもうまくて、すばやく注意深く走る訓練を受けております。アクロバットのようなわざと手腕で体を低くして乳をしぼる。台所にコップ一杯のミルクを運ぶごとに、子供たちは手に一杯のコインを受け取るのです。三杯採れば一日の休み。勇気があって人を喜ばせるのが好きな子たちです。動物を選んで子どもを養いましょう」

かれはひと息つくために休んだ。ローリーはあくびをして伸びをした。「肉食動物はい



ないのね」

「いえいえ、当店は完璧な品揃えを心掛けております。お察しのとおり、お値段は高くなりますがね。リスクは大きいし、母親動物たちもおとなしくはありませんからな。乳しぼりは特に労働集約的な仕事で、無事採れるまで二人から五人の勇敢な子どもたちが犠牲になります。乳に混じるので麻酔銃は使いません。子供を育てている肉食動物は、穴グマだろうと、イタチ、ライオン、クマやオオカミだろうと、きわめて過敏です。その乳腺はしっかりと護られ、その産物は貴重であります。しかしチーターのミルクを一口飲めば……」彼はため息をつき、唇をなめた。「胸に毛が生えるほど元気が出ますよ」

「毛はこれ以上はいらないわ」ローリーは言った。彼女はふくらはぎのかすり傷に手をやった。「今でもひたすら剃らなくちゃいけないの。嫌いだわ」

「それなら絶対に肉食動物はやめなきゃね。その上そのミルクは苦いというくせがある。口が曲がってしまう」彼は口をすぼめてチュッと彼女にキスをした。

「倫理的配慮から、最後の種についてはその名をあえて申し上げます。厳密に言えば、この乳はここでお出ししてはいけないことになっております。乳集めは、その供給動物をも商品化しているに等しいと定められているのです。収入の必要のない方の多くは、それを墮落だと考えます。またある方は、乳を集めたり利用したりするのは、食べ物と混同すべきでない、性的な含みを持つと批判なさいます。しかしこの批判にもかかわらず、これはもっとも人気のある品でございます」

「それでたぶん、女より男の方がそれをほしがらんでしょう」

「意外なことに違うんだ。女も同じくらいほしがら」

「あなたの作り話でしょ、エリオット」

かれは笑った。「ぼくは一介のフィクションだよ」

「あなたっていい人ね。あなたがいなくなったらどうなるかしら」

「感傷的になるなよ」もっと何か言おうとしたが、せきが始まって中断した。せきは胸の奥から出てきて嵐のようにゴホゴホと鳴った。顔はうっ血し、全身が震えた。まるで内蔵が裂けているようだった。

「看護婦を呼びましょうか」

かれは答えず、肺と格闘するうちに、ついに何かがこみあげきた。それをクリネックスに吐き出し、そして手を伸ばして酸素吸入器をつけた。プラスチックの先を鼻に突っこんだ。

ローリーは見守った。待った。最初の心配はだんだん消えていったが、緊張の固まりが胃の中に残った。彼女はまだこの男の日常を学んでいた。この生き方を。

「あなたが心配よ」とうとう彼女は言った。

「大丈夫だ」とかれはあえぎながら言った。額には玉の汗が浮かんでいた。「タンを……取らな……くちゃ」

「いつもこんなふうなの」

かれはうなずいた。二人は手を握り、ベッドの脇で酸素が静かにふつつつと音をたてるのを聞いていた。しだいにかれの呼吸は落ち着いた。ローリーは死について尋ねた。

「誰でも死ぬよ」彼は言った。

「けどあなたには持病があるし」

「そのことは考えない。悪い時だけ考える」

彼女は当惑してかれを見た。「嘘でしょう」

かれは女を見つめ、それから目をそらせた。「考えるよ。だったらどうなんだ」

「今はわたしがかわってるのよ。わたしはあなたに出会ったばかりよ。死んじやいやだわ」

「死なないよ」

彼女は納得しなかった。

「死なないよ」かれはくり返した。「約束するよ。聞いて……」かれは女の手を取った。「もうひとつ、ある。乳がもう一種類」

「やめて」彼女は言った。

「いやだ。聞くんだ。これが最後。一番純粹だ。それは霞。閉じたくちびるから入り込み、舌の上で凝縮する。一番甘いミルクだ。やさしさと安らぎに満ちている。天使の息だ」

「天使なんて信じないわ」彼女は声をこわばらせた。「これって死ぬ話でしょ」彼女の目から涙があふれた。「死んじやうのね、そうでしょう」

「いいや」かれは首を振った。「これはただのお話」

### 3. 想像力と健康

愛には健康が必要だ。健康は催眠術であり信頼であり科学である。それは確信と力で、毛布やベッドのように広がる信念。合理的かつ不合理。化学、言葉、光と音。

動因を使ってもいい。たとえば薬、根。もしくは貝、泥、木の皮、虫のぬけ殻。メスがその動因になることもある。第一人者。さくらんぼの大きさのカプセル、タールのおいのする湿布。山羊の角。キノコの胞子。泥よけ、ヘッドライト、びんのふた。治療者は心が狭くてはいけない。

かれは物語を作れる語れる。

エリオットは治療者、医者だ。机と椅子のある、窓のない部屋で働いている。プライバ

シーのために机の回りにカーテンを引ける。診療のために自主的にはだかになって横たわる患者たちは、カーテンのおおいを使ってまた服を着る。その陰で、患者が尊厳を取り戻す目隠しなのだ。

机の上の壁には『害をなすなかれ』と書かれたカードがはってある。後ろの見えないところには友人から引用した言葉がある。『無茶苦茶言われても気にしないとは言っているが、おれにでたらめを言う気なら、うまくやってくれ。信じさせてくれ』

ある午後、女が診療室に来る。太りすぎて、ジッパーのこわれたズボンをはいている。だぶだぶのTシャツを着てバンダナで髪をおおっている。机の脇の椅子にすわって「熱っぼいんです」と言う。

エリオットはつらい夜のせいで疲れている。かれはあくびをかみ殺す。「熱っぼいって」「頭の前から」彼女はそこをさわる。「ずっと背中の方まで。おりてくるんです。後ろから前にはっきり伝わって。腕や足も。全身が熱いんです」

エリオットは彼女のカルテをめくる。たび重なる来診で分厚く、症状も山ほど。どんな症状なのか以前に、この女は何を求めているのだろうと考えだす。

「熱っぼいのは何日ぐらいですか」

その女は数える。「二日、多分三日」

「何か試しましたか」

「消毒用アルコールをすりこみました」

かれはうなづく。

「リステリン」

さらに待つが、彼女は口を閉ざしている。まるで罰を待っているかのように、ひざを見つめている。

「効きましたか」

「少し楽になりました。まだ熱っぼいですけど」

エリオットは眠く、頭がうまく働かない。熱と聞いて、火花や火や性欲が思い浮かぶ。注意しないと、糸口を失って自分を押さえられなくなると知っていた。

女に服を脱ぐように言い、彼女の準備ができると、診察を始める。問題は見当たらない。肺の音を聞いている途中でエリオットはせきの発作を起こす。部屋のむこうに退却し、机にもたれて発作がおさまるのを待つ。息切れしてちょっと恥ずかしく思いながら診察を終える。カーテンをひいて服を着るように告げる。

机でかれは、自分の健康についてじっくり考える。少しずつ衰弱している。深呼吸をしようとするそう感じる。いつも空気が欲しい。

女は十分に健康なようだ。不愉快だが、ありがたいとも思う。彼女の病気話のおかげ

で、仕事ができる忘れさせてもらえる。彼女が服を着てすわると、再び彼女の恐怖が感じられる。

かれは注意深く言う。「診断は正常です」

「では熱っぽいのは何ですか」

「何かへの反応です。多分ウィルスでしょう。もしくはアレルギー。二、三日で消えますよ」

かれを見る女の顔は、何とか平静を保とうと必死だ。彼女は目を合わせまいとしてキョロキョロする。「わたしの母はガンで死にました」

「これはガンじゃないです」

「ガンに冒されて死んだんです。最後には熱が出ました。何も食べられなくなるほど熱が出ました。息もできなかったんです」

「あなたはガンじゃありません」エリオットは女の手首をつかみ、無理にこちらを向かせる。「わかりますか」

「死ぬんじゃないんですか」

「これじゃ死にませんよ」

「絶対ですか」

「よく聞いてください。これはガンではありません。あなたは死にません」

彼女は目をそらし、それからまるで彼かれが真実を告げているか確かめるように、サッと視線を戻した。

「わたしを信じますか」

彼女はためらいながらうなずき、立ちあがった。「気分が良くなりました。熱っぽいのは、なくなるんですね」

「ええ。来週電話ください」

彼女は去り、エリオットは椅子に落ち着く。この出会いで気力が満ちているように感じる。紙の切れっぱしに、かれは殴り書く。「科学、知ること」そしてその下に「フィクション、形作ること」。「フィクション」のとなりに注射器と注射針の絵を描く。バクテリアのコロニーと、心臓を通る血流の近似式を書く。その上の「科学」の向かいに、男の顔を描く。片目で、その瞳から小さな星や半月や小さな空想上の動物が放たれている。それらは男の頭上に上がって、輪になり、わずかに識別できる雲になっている。それは下のバクテリアに似ていて、それに気が付いてエリオットは二つをつなぐ橋を描く。かれはほほえみ、それからあくびをする。疲れた。机の上に腕をついて、頭を置く。

少し後に、ドアをノックで目が覚める。まぶたが重く、まだ半分眠りながら、かれは椅子を回転させる。ドアから派手に装ったピエロが歩いてくる。白い顔、描かれた笑顔、ピ

ソクのかつら。額に青い目が線描きしてある。

エリオットは見つめる。目をこすった。またノックがして、かれはじゃまが入ったのを喜びながらドアの方に振り向く。今度は骸骨がびっこをひきながら入ってくる。全部骨で、目に見える支えもなく歩き回っている。歯にはタバコをかみしめて、その煙はたなびいて眼窩のあたりにたまっている。骸骨は、エリオットを元気な作り笑顔で見ているピエロのとなり立つ。ピエロが額にしわをつくると、額の目がまばたきする。

エリオットは口もきけない。心はその日の出来事をたどって手がかりを捜す。何か悪いものを食べただろうか。朝飲んだお茶に薬が入っていたのだろうか。空気に何か混ざっていたのか。骸骨とピエロは待っているようだ。また別の音がドアの所でして、つづいて空気がサッと入ってくる。エリオットは身構えてふり向く。戸口に立っているのははだかの男だ。顔と胴体には何となく見覚えがある。背中からひろがっているのは翼だ。

エリオットはこの最後のものが入ってくるのをしびれたように見つめる。それから立ち上がってドアを閉める。これは自分個人のことだ。かれはそう確信する。死ぬ時が来たのかもしれない。

その三人はこちらをじっと見つめている。感情が読めない。ピエロが口を開く。

「人生は単純じゃないんだ、わが友よ。すでに気付いているだろうけど。境界線は絶えず変わる。自己中心的な心にはむずかしい概念だね。

たとえば、一人の人間は一個の細胞から始まる。細胞は分裂して移動し、分化する。存在の固定した『事実』はないってことだ」

「きみたちは誰だ」エリオットは尋ねる。声が震えている。

「非存在の『事実』もない」翼のある男が続ける。「死体の肉は腐食動物に片付けられる。骨は水滴に分解される。死も生と同じく複雑なんだ」

「何しにきたんだ。おまえたちは誰だ」

「変わらぬものは何もない。事実は存在しない。フィクションだけ」

「わたしたちはユーモア、死、科学」ピエロが言う。「きみのホームクルス、見事な三人組、そう思わない？」

かれは口ごもる。「思うって？　ぼくは考えてるのか」

「カマトトぶるなよ」ガイコツはたばこをくゆらせる。「あんたはいい奴だって聞いてたんだ」

「礼儀正しいって」ピエロが言う。

「やさしいって」

「何しにきた」エリオットはきく。

「地理の講義」ガイコツががらがらいった。「境界線とか。想像力とか」

「きみたちが怖い」

「われわれは絶対に害をなしたりはしないよ」翼のある男がつぶやく。

「しかしながら、健康の問題があるんだ」ピエロが空中にある文句を書く。「科学は化学。物の本質は原子内にある」

「物の終わりは物の本質」ガイコツが言う。「忘れやすいことは素晴らしい恵み」

「風は神の恵みである」翼のある男が言う。三人の中で一番人間に近く見える。「共通の起源は息だ。それはインスピレーションの源でもある」

「きみは三人組の中のどの役だ」エリオットは尋ねる。

「わたしは死だ」天使がささやく。

エリオットは今や、目に見えて震えている。何かを言うか、何かをしようと必死で考える。体に緊張が走る。それが胸に達し、せきの発作に襲われる。発作はひどく、一分以上続く。終わるまで息がつかない。顔は赤くなり、足の間に顔を突っ込む。

「空気」かれは小声で言う。「空気」

#### 4. 一緒にやる

エリオットとローリーのベッドの足元には、二十四インチのソニーのカラーテレビがある。二人の間のシーツの上にリモコンがある。二人はミスアメリカ美人コンテストを見ている。

エリオットは出場者に飽きていた。本当のスターである謎めいたバート・パークスの目に留まろうとして、安手で最悪の媚びを振りまいているのは耐え難い。パークスはエリオットにとって、ある意味でのヒーローだ。実に品のない年のとり方をして、首のトカゲのような皮膚から、安っぽい飢えた憑かれたような目のくぼみまで、この世の誰にも似ていない。その微笑はぞっとする風刺画のようだ。死のキャンプの確認や約束を思い起こさせる。それにかれの歌……かれの歌声は催眠術だ。

女じみた唇を幸福そうにすぼめた狂詩曲、パークスの声は科学に捧げられたものだ。物質を制する精神、本当の肉体を制する想像力。パークスが歌うとエリオットは涙が出そうになる。モルヒネよりも強いドラッグ、痛みや喜びの中枢を直接刺激するようなドラッグを思い浮かべる。その男に、その決断力、自己陵辱、生命力に、度胆を抜かれている。コンテスト賛歌の終わりの小節の流れる間に、突然エリオットは、パークスが人間ではないと悟る。

この男の姿を注意深く調べれば、体の部分の間にギャップが見つかる。出場者の一人がかれの後ろを通る時、エリオットはパークスの甲状腺越しに、彼女のドレスのспанコールのきらめきを見ることができる。パークスが振り向いて彼女にあいさつすると、ピンク

の羽（多分彼女の髪飾りの）がかれの眼窩からのぞいている。これは新発見だ。パート・パークス、上品で洗練されて口のうまいこの曲芸団長は、幻影なのだ。

ローリーは女の子たちの方に興味がある。彼女はわざとらしい笑顔や見事なプロポーションの体に魅了されている。彼女たちの完璧な爪や髪の毛、そして果てしなく長い足。彼女たちのいらいらするような明るさや、振り付けされているような陽気さを恥ずかしいと思いながら、でもうらやましい。注目され、豊かで、素晴らしい人間的の魅力と報酬のある未来を想像する。自分がふさわしくないように感じる。リモコンを手にとって彼女はテレビをぱちんと消す。

「わたしってきれいかしら」彼女はエリオットに言う。

「とつてもね」

「違うの。すぐに答えしないで。考えてほしいの。本当のことが知りたいの」

彼はあごに手をやって、彼女をながめる。広くてにきびの跡のある額。弱々しいあご、大きな胸、短くて太い足。

「きみは美しい」かれは言う。

彼女はかれの目を見る。「本気なの」

「本気だ。美しい。純粹にね」

するとローリーはほほえむ、満面の、涙ながらの笑い。「愛してるわ、エリオット。できたらわたしの呼吸をあげたいわ。あなたのために呼吸したい」

「ローリー」かれは彼女の手をとる。「できるなら、きみのために歌いたい。きみの信じていることばを歌い、そしてそれをきみの脳の中の、きみが決して忘れないところへ入れたい……」間を置き、そして笑う。

「ローリー、できるなら、ぼくはきみのためにパート・パークスになるよ。不死身になる」

## 5. やりとげる

ローリーは集中治療室で働く。退屈なこともあれば、忙しいこともある。集中室の六つのベッドのうち今夜はひとつしか埋まっていない。そこにいるのは三十歳の男だが、九十に見える。目は黄色で腕はひょろ長く、顔は土気色だ。腹がとてもふくらんでいるので、何ヵ月も自分の足を見ていない。息が出来なくなるので水平に寝られず、だからベッドからだを支え起こしていなければならない。よく眠れないが、肝臓がだめなので薬が飲めない。末期肝硬変で、数日間、昏睡状態になったり覚めたりしている。

現在は昏睡状態で、つまりローリーの仕事はあまりないということだ。時々点滴を調べ、毎時間状態を記録する。この小さな仕事の合い間、彼女は看護婦控室でアウトドア雑

誌を読む。今晚はそれも退屈で、同じところを何度も何度も読み返している。彼女はエリオットのことを考えている。

ローリーは人生をずっと男に頼ってきた。これに彼女は腹を立て、それから何年間か自分にある約束をした。秘密の、ほとんど無意識の約束。それは欠点のある男とつきあうということだ。最初の男は頼りにならなかった。次のは冷たくて気まぐれだった。エリットのひとつ前の男は、ローリーにしたことよりも、そうする自分の方が好きな男だった。エリオットの欠点は病気だ。その事で二人は対等の立場にいるように感じる。かれは自分が必要なので別れられない。かれは自分に頼っている。この事に彼女は保証を感じる。このせいで、妙に自立した力強い気分になる。かれが間もなく死ぬという避けがたい事態をふと忘れる。彼女は、いずれ悲しみにくれるという状況を、自分が慎重に選びとったことに気づいていない。彼女自身、周期的昏睡状態の世界に生きているのだ。

彼女はコーヒーを一杯飲み、また一杯飲む。三時から五時までが、起きているのが一番つらい、朝の最悪の時間だ。彼女は爪を整えだしたが、あまり気にしてないのでやめる。女の子は女の子、彼女は大人の女だ。男が彼女に合わせればいいのだ。

コーヒーが効いてきて、彼女の頭はざわつく。手は落ち着かず、わけのわからないことを考える。肝硬変のベッドから音が聞こえる。その回りにはカーテンがかかっている、立ち上がってその向こうを見ると、男はいない。かわりに翼のはえた男がいる。

なんてこと、とローリーは思う。何かおかしい。何かひどく変だ。そこで看護婦である自分を取り戻す。

彼女は枕をふくらませ、シーツを伸ばしてその男を居心地よくしてやる。翼が巻かれて胴や太ももの上部にのっている。やつれた顔で、彼女を見上げてほほえむ。ひどく苦しそうだ。水を一口飲ませてやると、目で感謝する。彼女は上司に報告しなければと自分に言い聞かせ、けれど行こうとするとかれが翼で触れる。羽を取ってほしいのだと彼女にわからせる。贈り物として。記念品。ローリーは拒否するが、男は固執する。すべてがとても変だ。

ついに彼女は同意する。小さくて白い、先の方の風切り羽を選ぶ。引っ張るが、固くくっついている。彼女はもっと強くひっぱり、そしてさらにもっと強く引く。

急に羽が抜け、そしてシュッと音がする。ローリーは顔に柔らかな空気の流れを感じる。かすかにミルクの味。

彼女は羽の先で唇に触れる。シュッと音が続く。彼女は自分が勝手な行動を取ったと気づく。驚かない。すべて過ぎゆく。彼女は生き残った。その男の時間は終わった。



## 6. 歌と哀歌

あなたは死なないって約束したわね。そう言ったくせに、機会があるごとに生命保険に入った。十八才、二十歳で、二十五歳で。二十五歳！二十五歳の保険なんか無い、ある人たちはその歳になって初めて開眼するというのに。目を開いてやっと世界を見るのに。ときどき道を間違えて、たぶんつまづいて、でも誰もそれを死とは呼ばない。失望、うん。敗北。けれども死ではない。まだ目も開けていないのにどうして死ぬるものか。

だけどあなたは違った。最初から病気だった。あなたのお母さんは、もし知ってたらあなたを生まなかったと言った。そう言ってお母さんは泣いていた。あなたが死んだ後に。彼女は良心を持った人の助けがなかったらヤミで中絶していただろうと言った。棒やハンガーを使って。必要なら灰汁も。危険で恐ろしいけれど、やっただろう。だってあなたの人生はつらすぎたから。あまりにもつらすぎた。

走ったりスキップしたりできなかった。自分の命を守るために早く動けなかった。山の頂上に登れず、世界の上に立てず、空しかない所からだを伸ばせなかった。高山の小道で休むこともなかった。ルピナスがねじれた杜の木の根元に茂り、顔に風を感じ、空中に雪。ゾウのような大きさのミカゲ石のところで止まって座る。昼ごはんを分け合う。山の空気を吸えなかった。すばらしい水晶のような空気を。酸素が薄すぎるし、肺がタンで詰まってしまう。ロッキーを越えてドライブをした時、あなたは死にそうだったわね。

けれども発病していない時には死ぬことは考えないって言ってたわね。寝込んでいたり、せきをして喘ぎ、タンを出そうともがいていている時以外は。考えてないって言ってたけれど、どうして考えずにいられたの。どうして怖がらずにいられたの。次の日はもっとひどくなって肺はもっと疲れ、息は弱くなるのかもしれないのに。そんなふうなら、毎日が病気の日でしょうに、調子のいい日だって。薬だって、治療だって、古くなるでしょうに。からだのどこかが、事態が悪くなるのを待っていたりしないのかしら。死を予期していなかったのかしら。

けれどあなたは違うって言った。そして夢のようなことばや物語を浴びせてくれた。やさしさと忍耐強さを浴びせてくれた。そして愛を。

ときにあなたは聖人のようだった。タフで、か弱かった。弱ると、もっと強くなった。快活で、エロティック。

あなたはわたしが知ってる一番セクシーな男だった。

あなたはハイキングも水泳もしなかった。料理もしない。わたしに話をしてくれた。聞いてくれた。あなたはジョークを言い、そしてセックスをした。

仕事から帰ってくると、十時とか十二時とか、くたくたの病院での時間の後、夕食に一

袋のスパゲッティを茹でた。スパゲッティとバター。それだけ。夕食に。これじゃ死んで当然よね。

あなたは笑わせてくれたわ、ね。ユーモアを教えてくれた。想像力を。痛みをやわらげてくれるものを。

道が勾配によって色分けされているサンフランシスコのガイドブックを買った時みたい。赤は急、黄色はなだらか、青は平ら。あなたは街を通り抜けるコースを計画し、低い丘が実は高山の頂上で、明るいペンキを塗ったビクトリア様式の家が、実は甘い香の松の木だとわたしを納得させた。野良ネコはスカンクで、犬はオオカミとシカだと。貯水池は高山の湖水で、そしてあなたは蚊よけに防虫剤を持っていると。

あなたは痛みをやわらげるのがうまかったわ、エリオット。喪失の痛みを。あなたを失わなければいけない痛みを。

最後のモルヒネの注射を覚えているわ。あなたを寝かせて、胸と首の引きつった筋肉をやっとやわらげた注射。部屋は暗く、あなたの友人たちが、ベッドを手のように包んだわ。一人づつ話をして真ん中にあるあなたの思い出を織りあげた。みんなが話を終えたら、あなたが記憶されて、解放されるように。あなたはわたしにもたれかかっていた。重く、やっと力を抜いて。そして尋ねた、死んでいいかいと。あなたの声はとても弱くてほとんど聞こえなかった。死んでいいかい。

ええ、わたしはささやいた。ええ、いいわよ、さあ死んで。

あなたはほほえんで、そして口元から力が抜けた。あなたはちょっと震え、そして死んだ。

わたしは泣かなかった。怒りと悲しみを感じた。あなたの重み。わたしは床の上に落ちた月の光を見た。廊下で車輪の音がした。世界は翼を持った。

# ベストセラー

十月二十日

昔は貧乏が望ましい状態だと思っていた。アーティストとして意識を集中させ、本質的なものをそうでないものからえり分ける手段だと思っていた。あの頃はまだ若く、必要なものも少なかった。ベッドと机と椅子だけのシンプルな部屋。古いタイプライター、鉛筆、安手の紙の束。自分の経済性には誇りを持っていた。すぐにでも仕事を見つけて別の暮らしができたのは事実だが、作家にとって、禁欲主義こそがふさわしい環境に思えたのだ。

いまはちがう。家族があるし、変わった個人的な目的のためならともかく、妻と息子のためには貧乏に甘んじることはできない。二人は古着や、ちっぽけで陰気なアパートよりましなものを与えられるべきだ。あるいはポテト・スープや古野菜よりもましなものを。家主に家賃の払いを待ってくれと頼む、わたしの声を聞かされたり、暖房が切られて凍りついたアパートに帰ってくるよりもましなものを。貧困など、何の達成でもない。

こんな貧乏なんか、もういやだ。

十月二十一日

本で苦労させられた一日だった。会話は平板、登場人物たちは一斉にクスリを盛られたかのよう。自分ですら興味が持てないものを書いて、何の意味があるんだろうと自問している最中に、トニーが電話をよこした。『藪の中』のペーパーバック版權が売れたが、期待より相当安くしか売れなかったという。そして『隣家の芝生で情事』は買い手がつかず。予想はしていたが、今日はもうこれ以上仕事をする気にはなれない。トニーがおずおずと新しい本のことを聞くので、わたしは曖昧な、だが熱のこもった返事をした。「売れ線」というのがわたしの使ったことばだったと思う。自分で言うのは、トニーに言われるより怖くない感じだったが、しかし電話を切ってみると、その意味はいつになく重荷に感じられる。売れる本ってのは、一体全体どう書けばいいんだ？

## 十月二十三日

ニックはまるで服が紙でできているかのように、すぐ破いてしまう。この頃は数日ごとに、何かに継ぎを当てたり、あるいは救世軍にでかけたりしている。新しい靴が入り用になって、もう一月になる。チャップリンが『モダン・タイムス』で、靴の穴をソーセージでふさいだ話をしてやった。ニッキーは目を輝かせた。

「チャップリンは、それどうしたの？」

「どうしたのって、歩いててあいちゃったんだよ」

ニッキーはわたしを見た。じっくり考えているのがわかる。「ううん、ちがうよ。ソーセージはどうしたの？」

## 十月二十七日

歯痛が一週間たっても止まらなかったの、クレアはやっと歯医者にでかけた。医者は歯根治療をしようとして、何やらブリッジを入れた。四百ドル。クレアは、あっさり抜いてくれと頼んだ。わたしは激怒した。

「信じられないよ、そんなことをさせるなんて！ クレア、おまえのからだなんだぞ。歯ってのは二度と生えてこないんだぞ」

「そのくらい知ってるわ、馬鹿じゃないんだから」

「信じられない。四百ドル。その馬鹿な医者に、そんな金はないって話したか？」

「マツト、もうたくさんよ」

「話したか？」

彼女は、ある表情を浮かべてわたしを止めた。「マツト、歯ならまだたくさんあるわ」

クレアのような女に腹を立て続けるのは難しい。彼女のあの表情に勝てるものはない。正直な話、クレアの歯の欠けた微笑は、何だかかわいらしい。

## 十月二十九日

放課後にニックを公園に連れていき、テニスコートの裏の杉の大木に登るのをながめた。この子は本当に素晴らしい。俊敏で、怖いもの知らずで、ああやって木登ぼりをしていると、わたし自身の子供時代を思わせる。若く、無敵で、枝から枝へと木のとっぺんにつくまで登ぼり続ける。そこには一面の空。世界に君臨する。

そして落っこちたあの時も、枝のかわりに宙を踏み、七メートル下の地面へと落下したときでさえ、なにか魔法じみたものがあった。茫然として、肋骨を弦のように震わせつ

つ、わたしはトランス状態で森の中をさまよった。やっと家に帰り着いた時には、一つ賢くなっていた。大地はわたしに叩かれても動かない。わたしの意志に従わないものもあるのだ。

ニックは杉の木のでっぺんから手を振り、気がつくとなわたしは、あの子が落ちないでくれればよかったのに、同じ学ぶにしても、もっと別の楽な方法で学んでくれればよかったのに、と祈っていた。

帰り道、ニックは遅れてばかりいた。脚が痛いのだと言う。あの靴のせいだ、たぶんどっか枝にひっかかったんだらう。小切手が届き次第、新しい靴を買ってやるとニックに誓う。

## 十一月一日

クレアが勤め先から逆上して電話してきた。一時間あたりで対応しなければならない苦情電話の数を、倍に増やされたのだという。これで苦情を言う側は、もともとの怒りにさらに油を注がれる計算となる。わたしは本を中断して彼女と昼食をとった。クレアは泣きそうだった。

「ホントに無礼な人ばかり。たかが皿洗い機や、馬鹿なトースターなんかのことで、まるで機械の方があたしより大事だともいわんばかりなのよ」

「やめちゃえよ」

「今日電話してきた女なんか、ご亭主のシャツが十分に白くならないって文句を言うの。旦那の方は、仕事に着てくきれいなシャツがないので奥さんに怒って、だから奥さんは電話して、あたしにあたりちらすのよ。信じられる？」

「きみはなんて言ったの？」

「規定通りの対応をしたけど、向こうは何も聞いてくれないの。単にやつあたりしたがつてるだけ。もうたくさん」

「みんなどうかしてるんだよ。やめちゃえって」

「そんなことばっか言わないでよ」

「だって嫌なんだろう」

「嫌なのは、あなたがそうやってあっさり言えるってことよ。まるであたしをだまそうとするみたいに。そんなの嘘じゃないの」

「嘘なんかじゃないよ」

彼女は目をそらした。「いまはこの話をしたい気分じゃないわ」

「ほかのみんなもぼくたちと同じだよ。実生活が少しでも夢に近づいてほしいんだ。ちょっとでもいいから希望を見つけようとしてるんだ」

「あたしに怒鳴りちらして、役にたつとは思えないけどね」彼女はかぶりをふって口ごもり、やがて不満そうなため息とともに、話題を変えた。

「今日は仕事、はかどった？」

「まるで歯を抜かれるような感じ。ああ、こりゃ失礼」

彼女は笑わなかった。「トニーには見せたの？」

「何章分かはね。少しは金になりそうだって。少くとも『藪の中』くらいには」

「あんましやる気の出る保証じゃないわね」

「トニーなんかどうでもいい。金は何とかする。ダメなら別の手を考えつくって」

「もちろん考えつくでしょうよ」

「本気だよ」

妻は奇妙な表情でわたしを見つめ、それからコンパクトを取りだして口紅をなおした。彼女が去ってから、わたしはテーブルにすわったまま、自分の今の台詞を考え直してみた。少年時代は、成功の可能性はいくらでもあったが、大人になってみると、その同じ世界を見出だすのがずっと難しくなっている。それだというのに、わたしの野心は猛々しいままだ。時々これが心配になる。わたしはクレアが考えているように、自分に嘘をついているのだろうか。わたしは完全に物書きを諦めることができるのだろうか。

## 十一月四日

好調な一日。ことばが猛然とページになだれこむ。十一章を終えたが、はじめて何もかもがちゃんと収まった気がする。ジェイミーも形になりはじめた……本の終わりまでには自分を取り戻すだろう。悲しみと希望の結婚、ふさわしい結末だ。しかも、まさに売れ線。

## 十一月五日

ニックが脚のことでこぼしている。落ちたところがまだ痛むし、ほんのわずかだがびっこをひいている。不思議だ、わたしの子供時代は、打ち身やあざなんか一晩でよくなったような気がする。ただの成長痛かもしれない。とにかく、アスピリンを少しのませると、おさまったようだ。クレアの給料が入るまで続くようなら、医者に診せよう。

## 十一月八日

執筆の中だるみで、ふと気がつく求人欄を眺めていた。ありとあらゆる仕事、そしてそれに伴う富の希望。わたしは想像力を解放し、事務員になって味わえるさまざまな大冒険のことを考えてみた。長い番号を覚え、紙の粉をすいこみ、フォルダーを次々にファ

イルするのだ。あるいはローン受付係はどうだろう。融資担当に人々が向ける、ありとあらゆる期待と呪詛を一身に受けるのだ。コックはどうだろう、なにせわたしは、缶を開けてその中身を熱するにかけては名人級の腕なのだ。あるいは秘書は？ 無骨な指でタイプをつつき、いんぎん無礼な電話の応対をする。司書の口があって、なかなかよさそうだったので、ほんの気まぐれで電話してみた。相手の女性は、礼儀正しかったが、わたしが著書のある作家だという事実に感動してくれなかった。それどころか、どうもある陰険なやりかたで、それをマイナス材料として考えているらしかった。読者を助けるのにわたしほど不適當な者はいないともいわんばかり。わたしにしかるべき大学の学位がないとわかると、彼女は応募に及ばずと言って電話を切った。この断わりに腹をたて、わたしはすぐに別の番号にかけた。電話より先の段階にくらいは進めるのだということを示すためだけに、出鱈目に広告を選んだのだ。男が出て、仕事に興味があると言うと、DBX2000、TAC143、QT1522、BRT6200での経験はあるか、と尋ねられた。一瞬の間をおいてから、わたしはこう答えた。ええ、車のエンジンについてなら多少知っています、古いトヨタを派手にばらしてましたから、もっともそれも、一年前にガスケットをとばしておしゃかになりましたが。電話の向こう側でしばし沈黙があり、冗談の相手はしてられないと言って、男は電話を切った。

わたしは自信をなくしてしまった。変な話だが、自分の男らしさが侮辱されたように感じたのだ。自分でも意外なほど決然として、わたしは己れの傷ついたプライドを鎮めるものを求めて、広告を探し回った。歯科助手、エスコートや自動車セールスマンは通過。機械工、化粧品売り場係、テレビ修理。先に進むにしたがって、見込みはますます少なくなっていった。もうあきらめようとしていたとき、一番下の欄に目がいった。「提供者求む」とある。「応募資格：健康体であること」

番号に電話すると、やたらと陽気な女性が出た。ある調査を行なっている医療機関を代表しており、もしこちらが健康体なら、すぐに面接の日時ををセットするという。さらに聞くと、臓器移植に関係した研究だと説明された。しかし彼女は即座に、この調査に必要なのは単なるアンケートと血液検査だけだ、と保証した。参加者全員に二百ドル支払うと言う。最後に、妙に秘密めかした言い方で、もしうまく行けば、高収入の雇用機会もある、と付け加えた。

向こうのあまりの熱意に、わたしはほとんど面接を予約しかけたが、そこで自分が本気でこんなことをするつもりではなかったのを思いだした。ただの気まぐれが、思ったより深くまで進んでしまった。

礼を述べて、わたしは電話を切った。本の代わりに別のプロジェクトに手を出しかけたことで、心を乱されていた。財政がきついのは動かし難い事実だが、なんとかなるさ。本

がじきに完成するし、これさえ売れば、こんなネズミの畏みたいな貧乏生活とはきっぱり縁が切れる。

## 十一月九日

埠頭を歩いて、きつい朝の後で頭を整理しようとする。きつい塩気に満ちた潮と魚の香りは爽快だった。スコマの店の、片腕で鼻の曲がったイタリア男が、パレット一杯の蟹を、胸まである煮え湯の桶にぶちこんでいた。本体からもげた、太ったピンクの蟹の脚が、湯の表面に浮かんできた。

夕食用に一匹注文しようとしたところで値段に気がついた。かわりに、魚の内臓と、古い魚の頭を二つほど買った。スープにしようと思ったが、どうもその気になれなかった。結局そのアラはアシカにやってしまった。吠えて、ひれを叩いて感謝してくれたが。

帰り道、四肢麻痺症の女性が舌でピアノを弾いているのに出会った。その背後の板にとめられた新聞記事によれば、二人の子持ちで、それを女手一つで養っているのだという。演奏もなかなかで、特に「驚くべき優雅」の編曲は感動的だった。観光客たちには大人気だった。だれかが、彼女は素晴らしい勇気を持ち主だ、と言うのが聞こえた。わたしは思った。そう、それはまちがいない、と。しかしながら、一方でこう思いあたって。彼女はせざるを得ないこと、できる唯一のことをしているだけなのだ、と。生きるために。

## 十一月十一日

ニックの脚が一向によくないので、病院につれていった。医者はレントゲンと血液検査を受けさせた。骨がおかしいようだが、よくわからないと言う。来週別の検査をしたいそうだ。骨のスキャンが何か。その検査はどうしても必要なのか、ときいたが、医者にはらまれて、自分が生きるに価しないような気分させられた。もちろん検査は受けさせる。クレアの給料はこれでペアだ。

## 十一月十二日

クレアと甘く愛を交わす。久しぶり。異様に暖かい夜で、毛布の下で縮こまらずにすんだ。妻のからだは本当に美しい。しっとりした腹部は完璧な惑星のようだし、その地勢をいっそう完璧にしているのが、ニックの出産のため医者が切開した、恥毛に半分隠れた薄く細い傷跡だ。クレアは、帝王切開手術そのものより、醜い傷跡の方が怖い、と話してくれたことがある。ほとんど見えなくなっているのに、妻はまだこの傷のことは神経質だ。ほとんど触らせてくれないし、わたしのほうも、それが彼女の天然の地形に匹敵するほど



美しい、と告げるのをやめた。もっと美しいと言うべきだ。それは彼女の勇気を思いださせてくれるから。だが妻は信じない。

かわりに、わたしは考える。同じ状況で、自分なら同じ勇気が持てるだろうか。どんな状況でそんな勇気が必要になるだろう。別に傷なんかかまわない。怪我の可能性も特に怖いとは思わない。息子の危機？ 妻の危機なら？ それはまちがいに怖い。でも、自分に関してなら、自分一人に関してなら、一番怖いのは失敗だ。それが内面に取り憑いていて、それを避けるためならわたしは何でもする。わたしにとっての勇気ある行動とは、そんなことがあればの話だが、自分の野心を完全に捨て去ることだ。

## 十一月十四日

十二章完了、あと一章。この期に及んでなお、驚かされることがある。ジェイミーは予想外に頑固で、本に暗い穴を穿つような一面を見せた。できれば避けたいと思っていた結末を示唆。苦しみはあってもいいけれど、単なる刺激剤としてのみ。それなりの報いがないと、読者は納得しない。

でも、誓ってもいいが、この本は成功する。結末までにジェイミーはめた別の面を見せてくれるだろう、より深い一面だ。信頼と永遠の愛。まちがいにそれはあるんだ。どんな冷えきった心の持ち主でも、絶対涙を流すだろう。

## 十一月十五日

帰ってくると、クレアがニックを怒鳴りつけていた。ニックは冷蔵庫の隣に立って、縮こまって泣きだすまいとしていた。二人の間の床には、割れた卵が散乱していた。クレアはニックの腕をつかんで、荒っぽく脇に引き寄せ、部屋に戻っているように命じた。

息子がいなくなると、何が起きたのかきいた。妻はキッとこちらを見て、それから床にひざをつき、手で顔を覆った。

「もういや。いやよ、いやよ、いや」

「また買えばいい」

妻は糾弾するように目をあげた。「どこにそんな金があるのよ」

「別にニックにやつあたりしなくてもいいだろう」

彼女は何か言いかけたが、そこで目に涙があふれた。

「クレア……」

彼女は手を振ってわたしを追い払おうとした。「なんでこうなるのよ？ 気がつくど、自分が夢にも思っただけのような真似を、あっさりしてるなんて。気がついた時が最

悪。自己嫌悪……」

「説明してやれよ。わかってくれるって」

「お金がほしいわ」

「もうすぐだって」

「大金じゃなくていいの。ちょっとでいいから」疲れたように、妻は立ち上がった。「あの子のせいじゃないわよね」

彼女は台所を出て、わたしは惨状とともにあとに残された。割れた卵六個というのは、あまり美しい光景ではない。わたしのせいなのだろうか？ そうかもしれない。

雑巾を手に、床を掃除すると、わたしはあの広告を探し出した。同じ女性が電話に出た。同じ礼儀正しい快い声。まるで何か、充足と幸福の秘密の守護神のようだ。わたしは予約を入れて、採血させることにする。

## 十一月十六日

ほとんど馬鹿にされきっているようだ。わたしは本を終えた。すると一時間後、医者が電話をよこし、ニッキーは癌だと言う。癌。わが心はどうすればいいのだろう。本の完成による高揚感と、この突然の悲しみとの板挟みにあって、わたしの心は後者を選ぶ。何と言っても自分の息子だ。脚を切断したいそうだ。

## 十一月二十日

また検査の山。医者は、切断すべきか、放射線と薬物治療を試みるべきか迷っている。わが家は破産寸前。明日の午後に手に入る二百ドルでもう一週間はもつ。頑張れば二週間。病院の請求書は、待ってもらうしかない。二度目の督促通知がくるころには、本が売れているだろう。

## 十一月二十一日

己れの値打ちに対する疑問が頭から離れない。おれはよき夫だろうか？ よき父親だろうか？ よき作家だろうか？ たまに頭がはつきりすると、名声とは恐怖の最高潮であり、成功とは犠牲の別名にすぎないように思える。野心は一面で情け容赦のないものだ。

予約の場所は、ラーキン通りのロシアン・ヒルにある華やかなマンションだった。入り口は大理石の柱で囲まれ、砂色の巨大な壺が並んでいる。階段のてっぺんには、磨かれたしんちゅうの枠にはまったガラス戸があり、呼び鈴が一つだけある。制服姿の守衛が開錠してわたしを入れてくれ、用件をきいた。名前を告げると、かれはクリップボードで確認

してから、廊下の突き当たりにあるドアを指差した。それが開くと、古風なエレベータが出て来た。鉄のゲートを手動で閉めるやつだ。建物は八階建てで、てっぺんにつくと、そこは絨毯張りの廊下で、巨大なシャンデリア一つで照らされている。正面に、教えられた番号の部屋があった。

好感の持てる、ありふれたハンサムな男が、青スーツ姿でわたしを入れてくれた。自己紹介もせずに、わたしをファーストネームで呼んだのだ。わたしより頭一つ分でかく、肩幅も同じくらいわたしより広い。握手した握力は、秘められた力の印象をさらに強めるものだった。

男はわたしを先導して、次の何倍も広い部屋へと案内した。そこは家具や彫刻、絵だらけだった。ゴッホの絵があって、見事な複製だと感心して眺めているうちに、たぶん本物にちがいないと思い当たった。いつか美術書で見たことのあるしんちゅう製の頭部像が、さりげなくテーブルに転がっている。その隣には豪華な皮張りの長椅子があり、部屋の奥ではグランドピアノが、黒いふたを輝かせている。

富は圧倒的で、戸口から離れるまでにしばらくかかったほどだった。貴重な物体の数々に気をとられつつ、奥のはめ殺しの窓に近づいた。外が見られてほっとした。お菓子ばかりの食事の後で、水を一杯飲んだような感じ。

眺めも息をのむほどだった。西には町が広がり、北には湾が、午後の鈍い光の中で灰色に広がっている。巨大な目から外を見ているような気がした。慣れ親しんだ貧乏からは遠く隔たった感じだ。安全で殺菌された眺めで、一瞬雲が切れて日差しがさしこみ、水面に光の帯を投げかけた。その一瞬、わたしは美しさのあまり己れの悲しみを忘れた。が、その時ドアが閉まる音がして、夢想は破られた。

振り返ったわたしは、ここに案内してくれたトーテムめいた男の姿を目にするものと思っていた。かわりにいたのは女性だった。見かけは若々しかったが、歩き方は、もっと年老いた者の落ち着きを見せている。スカートと、オープンネックのブラウスを着ていて、肌は軽く日焼けしているか、さもなければもともと浅黒いのだろう。単にデボラとだけ自己紹介したが、声を聞いた瞬間、あの電話の女性だと思い当たった。

向かい合ってソファに座り、わたしは何気なく、見事なお部屋ですね、医学的な面接の場所だからもっと殺風景なところを期待していました、と述べた。彼女は、研究が禁欲的な場所で行なわれなければならない道理はないでしょう、と答え、自分の代表している財団は小さくて個人的な性格のものなので、こういう贅沢にも気がまわるのだ、と続けた。

「わたしたちのために働く人々は、あまりつらい思いをせずにすむわけです」と言って、彼女はひざの上のフォルダを開け、質問を開始した。

ほとんどはわたしの健康に関するものだったが、中には家族や結婚、財政状態にまで関

わる質問もあった。かなり個人的なものもあって、最初はあまり話す気になれなかった。デボラは魅力的な女性で、爪はていねいにマニキュアされ、髪も手入れが行き届いていた。細い金のチェーンを何重かネックレスにしている、それを指先にくるくる巻きつけるのが癖のようだった。一種のマニエリスムで、彼女の手のこんだ美しさとおわせて見たとき、何か虚飾を思わせるものがあった、いま一つ信用がおけなかった。それ以外のすべての面では、彼女はオープンで誠実そうだったので、しばらくして気がつく、わたしは何でも彼女に話していた。作家としてのキャリアの行き詰まりや、抱負、現在の成功の期待についても手短かに話した。クレアが仕事に満足していないことも、そして一瞬ためらってから、ニッキーの脚の腫瘍についても話した。彼女は髪にそれを書き留めると、フォルダを閉じて、同情と理解をこめた表情で報いてくれた。

「人間のからだなんて脆いものですからねえ。お気の毒に」

「医者たちは、治せるかもしれないと言うんですが」

「そりゃそうでしょう」

「放射線と薬物治療です。望みは捨てていません」

「そうでしょうね。それでその子が改善しなかったら。そうしたらどうします？」

わたしはギョツとした。「それって、どういうことですか？」

「あなただって、考えてはみたでしょうに」

「関係ないでしょうが」

「すみません」

沈黙が続いたが、彼女は特にそれを破る気もないようだった。

「そうしたら、切断です。つくりものの脚をあてがうそうです」とわたしはつぶやいた。

「義肢ですか」

わたしはうなずいた。

「もし息子さんに本物の脚をあげられたら、血の通った肉を与えられると言われたら、同意なさいますか？」

「どういうことですか？」

「生きている脚です。移植です」

「医者は一言も言いませんでした」

「めったに行なわれない手術です。提供者の条件が厳しすぎて、実質的に不可能に近いんです」彼女は威厳をもって述べた。

「だったらなぜきくんですか？」

「うちの財団は、人々の臓器移植に対する考え方に興味があるんです」

「高いんでしょう」

「値段はこの際おいときましょう」

わたしは彼女を見つめた。

「どうですか。あなたは作家でしょう。考えるのが仕事でしょう。哲学的な質問だと思ってください」彼女はネックレスをもてあそんだ。「脚が手に入ったとして、それを縫い付けられるとしたら、同意します？」

落とし穴があるような気がしたが、そんなことをしそうな相手には見えなかった。それでも、よく考えてみなければ、という気がした。立ち上がって、窓辺に向かった。雲が今では街全体を覆い、霜降りの天国のような光を浴びせていた。

「ええ」やっとなわたしは答えた。「同意します。父親なら、子供に五体満足でいてほしいもんでしょう」

「素晴らしい贈り物ですね」

「失礼ですが、お子さんは？」

「一人います」と彼女は言ったが、説明しようとはしなかった。時計を見て、立ち上がり、スカートのしわをのばす。「長い間お疲れさまでした」

彼女は、入ってきたのと反対側のドアに案内してくれて、中に入るようにと示した。彼女が入ろうとはしないのを見て、わたしは足を止め、金のことをたずねた。

「今週中に小切手が行くはずです」

一瞬ためらった後、もっと早くならないか、ときいた。彼女は口を開きかけたが、気を変えたらしい。

「もちろんです。手配しましょう。それと、ご協力ありがとうございました」

新しい部屋にわたし一人を残し、彼女は去った。小さい窓のない部屋で、頭上から四角い蛍光灯で居心地悪く照らされている。中央には細長いテーブルが置かれ、その両側に、ひじかけのないプラスチック製の椅子が置かれている。片隅には洗面台、別の隅には冷蔵庫がある。白黒写真がたくさん壁を飾っている。人間の顔の一部を大きく引き伸ばしたものだ。耳たぶを眺めているとき、男が入ってきた。白衣を着て、最初に会った男と気味悪いほど似ている。男はわたしをテーブルの向かい側にすわらせ、引き出しを開けると、注射針と注射器、止血帯を取りだした。止血帯を腕に巻くと、チクリとした軽い痛みとともに、針がすばやく血管に押し込まれた。血を試験管に五、六本引き抜く。止血帯を外し、針痕に小さなバンドエイドを貼って、始めたのと同じくらい手早く終えた。試験管にペンで印をつけると、テーブルの端の金属ラックに並べて、そのラックを手にして立ち上がる。礼を述べて、ドアの方を指差し、自分はさっさと別のドアから出てしまった。男の示したドアを開けると、そこは入ってきた最初の部屋だった。

わたしは方向感覚を失い、一瞬どうしようかと思って立ち尽くしていた。ちょうどその

時、また別のドアが開いて、わたしを最初に迎えてくれた青スーツの男が登場。ベストのポケットから、無地の白い封筒を取りだして、手渡してくれた。中身を見るのは恥ずかしかったが、見ないのも馬鹿みたいだと思って、結局男に背を向け、急いで中身を調べた。満足して封筒をコートポケットにおさめると、礼を述べてそこを後にした。

エレベータの中出、封筒をもう一度のぞきこんだ。五十ドル札が四枚、手の切れそうなピン札だ。あぶく銭。また来たい気分になった。

## 十一月二十九日

トニーは本にあまり乗り気ではない。親切にしようとはしてくれる。「独特だね、挑戦的だ」というようなことを言って。もっと解決が、意味が欲しいのだという。八方丸く収まるハッピーエンドでなくてもいいから、少なくとも最後に健全な幸せの輝きが欲しい、と。「ジェイミーにこんな苦勞をさせる必要があるのか？」と言う。わたしは、そんなことはジェイミーにきいてくれ、と言いたいところだが、かわりにこう答える。苦しみは人間の常態で、啓示への大道にあってはほんのわずかな一歩にすぎないんだ、と。これは愛の物語で、愛に犠牲はつきものだ、と。

「この結末は、天国まであと一歩ってとこなんだよ」と言っている自分の声が聞こえる。「あとは読者に判断させればいい。ソープオペラの見過ぎでよくわかってるはずだよ。だれが最後に勝つか、すぐわかるって」

## 十一月三十日

デボラとキングマン財団から手紙。もっと働く気があれば電話しろ、とのこと。その気はない。昨日のトニーとの会話で、本のチャンスについて驚くほど自信が持てた。わたしは作家だ。精々待とう。

## 十二月六日

ニックはものすごく。たぶん苦痛のため、いつもびっこを引いているが、ほとんど愚痴を言わない。ニックにとって最悪なのは、放課後にほかの子たちと遊べないことだ。学校が終わる頃には疲れきっていて、家に帰って眠らなくてはならないからだ。夕食まで眠る。食欲をなくしている。医者によれば、治療のせいだという。そんな息子を、クレアはボロボロだ。自分の一部がまともに機能しなくなったかのようだ。わたしも似たりよったり。心配のあまりほとんどものを喰わず、夜中に五、六回起きだす。

これは家族全体の病気になりつつある。

## 十二月十一日

ニックの医者と面会。重々しい感じだが、人間味はある。治療が思ったほどうまくいっていないとのこと。ニックは、腫瘍を取り除くために必要な量に耐えられないのだ。みんな、もう数週間様子を見ることで同意。改善の兆がなければ、切断。

移植についてきいてみた。難しいという。腎臓や、心臓と比べてもずっと難しい。死体からの移植ではだめで、提供者は生きていて元気でなくてはならない。手足は死んでから一時間以内に、使い物にならなくなる。

「自分の脚と生き別れになってもいいという人は、なかなかいませんからねえ」と医者の一人。

「義肢も年々改善されてますよ」と別の一人。

値段を聞いてみた。

「大金です」と担当医。

「と言うと？ 十万ドル」

「もっと」

「二十万？」

「全部終わったところで、五十万くらい」

しとて手の出せない金額。クレアを見ると、じっとうつむいて、感情を抑さえようとしている。怒りがわきあがり、そしてどこからともなく、圧倒的な失敗の感覚が起こる。理屈ではわかっているのに、それでも自分に責任があるような気がする。

## 十二月十三日

街は東百五十キロの山火事の煙で満ちている。小さな白い灰が宙を漂い、まるで最後の審判の日のような。人々は、いっこうに気に留める様子もなく、てきぱきと己れの仕事に繰り出す。わたしはと言えば、自分の手の届かない運命に翻弄されつつ、皮肉にも何ヵ月ぶりの新鮮な空気を呼吸する。

完全に破産だ。いっそサバサバした気分。すっからかんだが、エゴイズムとプライドの泥沼に捕われてはいない。もはや、仕事を探すしかない。床に求人広告を広げ、出鱈目に踏み付けようとしたその時、電話が鳴る。デボラだ。

「手紙は届きましたか？」

「手紙？」そのまま切ろうとしたとき、思いだした。

「念のため確認することにしてるものですから」と彼女はすらすら述べる。

自分の忘れっぽさを恥じつつ、わたしは答えた。「ニコラスのことで、手一杯だったもので」

「わかります」

あんたなんかにわかるもんか。そう言いたかった。彼女の富と健康が、無性に腹立たしかった。でも、足元の新聞広告に目を落とした。そこには、技術・創作文章学校の広告があり、素晴らしい高収入の仕事を約束していた。究極の自己告発。

仕事に応じる、と彼女に告げる。

## 十二月二十三日

変な仕事だ。医者三人につつき、小突きまわされ、少なくともそれに倍する数の機械にスキャンされ、管をのどと尻に通され、血を抜かれ目と耳を検査され、運動し、休憩……これがずっと続く。検査の一部はラーキン通りのマンションで行なわれるが、ほとんどはミッション・ベイ近くの派手な個人診療所で行なわれる。みんなすばらしく親切で、こっちは後ろめたい気分だ。こんな検査は、他の人なら数千ドルはかかるのに、この自分は検査を受けて金をもらっているのだから。それも大金を。生まれてこのかた、一番楽な収入だ。

デボラの説明通り、この財団の仕事は臓器移植の分野で、彼女の話では、これまで非常な成功をおさめてきたと言う。わたしの仕事は、この初期段階の後には、いくつかの肉体器官、たとえば髪や皮膚を、移植用に提供することだ。わたしの肉体組織は別のだれかとマッチングされ、向こうは移植を受ける側になる。仕事は断続的なものだが、提供を続ける準備がある限り、給料も支払われる。昇給も、頻繁に、大幅に行なわれる、と彼女は約束してくれた。

## 一月二十二日

一月近くたつのに、まだ一度も呼ばれていない。時々ふと気がつく、何を求められるのだろう、と考え込んでいる……皮膚の小片、髪の一房？ しかしたいがいは、忙しすぎてそんなことを考えている暇もない。

グラント街のはずれにある、美しいアパートに引っ越した。3LDK、ゆったりした台所、暖炉と、湾の眺望が素晴らしいリビング。ビール片手にアームチェアにすわり、暖房のきいた部屋と、空と水の眺めとを贅沢に楽しみつつ、何時間もボーッとして過ごす。新しい脚で運動をしているニッキーのために、テレビとビデオを買った。切断が一月前だったことを思えば、回復ぶりは目覚ましい。切断の切り口はすっかりなおり、体力も取り戻して



くれて、出歩きたくてうずうずしている。驚くほどの立ち直りだ。

本については一言も連絡がない。この日記以外は、もう何も書いていない。今のままで十分に稼いでいるのだ。はねつけられるためだけに、わざわざ苦勞することもあるまい。

## 一月三十一日

初「仕事」で呼ばれる。後頭部から、髪を何房か取られる。医者たちの使った道具は、ちょっとリングの芯抜き器に似ていたけれど、ずっと小さい。わたしの髪は濃いので、切り取られたところはほとんど見えない。全部で一時間ほどで済み、いまはこうして家に帰り、ビールをすすりながら、街に降りしきる雨を眺めている。美しい眺めだ。なんら改めるべきところはない。

## 二月十日

最近、向こう側の男のことをよく考える。デボラは、いつか会えると言うが、そうすぐに会わせる気もないようだ。どうやらかなり高齢で、完全な健康体とはいかないらしい。自分勝手だとは思いますが、病気のままで長生きしてほしいと祈ってしまう。

髪を取られた頭皮の部分は、ほぼ治りきった。かさぶたが昨日とれ、かゆみもかなりおさまった。しかし内股の四角い皮膚となると、これは別の話だ。医者たちが使ったマイクロームという道具は、非常に薄い層だけをはぎとるはずだったが、鉄で焼き印を押されたような感じだ。まわり中が真っ赤で、触ると死ぬほど痛い。ズボンがこすれるので、外にもいけない。今週は一度もセックスなし。

## 二月十三日

二週目になっても、皮膚の採取痕は治らない。どういうわけか化膿してしまった。こんなことは起きないはずだったのだが。いまは抗生物質をのまされており、空気に傷をさらすため、ベッドで療養。医者たちは本当に親切だが、病気には慣れていないのだ。意地悪い気分になってしまう。ダメ押しに、トニーが悪い報せをもって電話をよこす。最初の二冊の売れ行きが芳しくなかったので、出版社は今度の本は見送るというのだ。結構。あんな連中、わが将来の名声と成功の炎の前にしおれてしまうがいい。

## 二月二十日

ろくでもない傷がやっと治ってきて、クリアに触られても、ナイフを脚に突き立てられているように感じなくてすむ。数週間にわたって欲望がたまっていたにもかかわらず、慎重にセックス。その後、気がつくとも無意識に妻の腹の傷をなでていた。妻は気にしないようだった。もっとも、わたしをもう一度立たせようと頑張っている最中だったからかもしれない。

「これは取らせちゃダメよ」

「もちろん」

「本気よ。ここだけは、絶対に取らせないんだから」彼女の顔は隠れて見えなかったの  
で、冗談かどうかはわからなかった。だが、考えただけで背筋がゾツとした。

## 二月二十四日

キングマン・ホーに会う。この財団の命名者だ。背の高い男で、かつてはハンサムだったのだろう、わたしが着いたときには、リビングの大きなはめ殺しの窓から外を見ていた。デボラが紹介してくれて、わたしは手を差し出したが、相手はすぐにはそれを握ろうとはしなかった。代わりに、分厚い眼鏡ごしに、考えの読めない目でわたしを見つめた。最初の訪問で、自分もこの窓から街を見下ろし、美しいけれど、手の届かない夢のような風景だ、と思ったのを思いだした。男がわたしを見つめたときの感覚もほぼ同じものだったが、立場が逆転していた。まるでこのわたしが、男にとっての風景であるかのようだ。そうであれば、わたしは男にとって、値踏みしている記事か服のような存在だった。

居心地悪くなって、わたしは自分の不完全さを意識させられた。子供時代の事故による頬のかすかな傷、おっこちて折った鼻の歪み。なぜかしら、謝らなければならない気がしたが、かわりに眺めについてばかげたことを言った。男は、まるでわたしが話せるのに驚いたとでも言いたげに、いぶかしげな顔をしてデボラに向き直ると、彼女がその耳に何事かささやいた。男はうなずき、かすかにわたしに微笑むと、部屋を出た。デボラはネックレスをなおした。

「あなたが気に入ったみたい」

これは誰にも推し量り難いことのように思えたので、なぜそう思うのか聞いてみた。

「だって他に選択の余地がないんですもの。キングマンは病気なのよ。見てわかったでしょう」

「隔絶した感じだった」

「腎性骨ジストロフィ」と彼女はぶっきらぼうに言った。「骨が卵の殻みたいにもろいの」

「痛みは？」

「ものすごい苦痛。あんな勇気ある人はめったにいないわ」

わたしはニックのことを考えた。息子の示した勇気には、しばしば恥じ入らされたものだ。

「うちの息子も勇気がある」

彼女は窓から外を眺め、ほんのわずかにうなずいてみせた。「勇気は伝染性だって言いますもんね。息子さんはいかが？」

「ええ、おかげさまでもう歩けます」

「お金は足りてます？ 息子さんの治療に差し障るようなことは？」

「いや、十分過ぎるくらいです」

デボラは再びうなずいて、こんどはこちらに向き直った。「気前よさも伝染するって言うわ」

どういう意味か尋ねる前に、彼女は部屋を去った。一瞬後、後を追おうとしたが、青スーツの男に押し戻された。

夜、家に帰ってから本でその病気を調べてみた。腎不全と関係がある病気で、カルシウムが溶けだして骨がウェファース状に薄くなってしまふのだという。後でベッドの中で、気がつくと自分のわき腹をさすっていた。クレアは、何かわたしが悩んでいるのを感じて、さする手を重ねて止めた。そしてさすっていたところにキスして、その部分を舌でなぞる。まるで、自分の傷に対応する将来の傷を描き出そうとするかのように。薄気味悪い女だ、自分の優しさを示す絶好のタイミングを心得ている。

「あなたが誰でも愛してる」とクレアはつぶやく。もう何度も繰り返したことばだが、この一言があるのとないのとは大違いだ。

## 二月二十七日

デボラが立ち寄った。アパートを見て、クレアに会いたいというのが口実だった。スクープネックの華やかなドレスを着て、喉元には相変わらずの金のチェーン。クレアは愛想よかったが落ち着かず、最初からはやく帰って欲しいと思っているのがわかった。ある時点で彼女は紅茶をいれると称して席をたち、デボラはその機会をとらえ、来る仕事を告げた。同時に、「ボーナス」の小切手一万ドルを渡よこした。わたしはしばらくそれを見つめてから、畳んでしまった。

「このことはクレアにいわないでください」と言いながら、そんなことは言うまでもないのを悟った。「妻は幸運を受け入れるのに苦労するたちなんです。後でわたしから話し

ます」

「話すときは、政治的な立ち回りを十分にね。これ以上わたしに脅えてほしくないから」

「妻が脅えているのは、降って湧いたような幸運なんです」

「かもね」彼女は物思いにふけた。「あなたは？」

「わたしはそれが終わるのが怖い」

## 三月八日

腎臓を取られてから一週間。からだをひねったり、急な運動をしたときに痛いのを除けば、なくなったことなどまるでわからない。腎臓をよこせと言われた初期のショックは、もう去った。移植を受けるのがキングマン・ホーその人だと知ったショックも。富は独自のルールを持っている。わたしの見方はこうだ。もしニッキーがクレアが生きるのに腎臓を必要としたら、わたしは自分の腎臓を片方提供するのではないかと。だったら、いまわたしが与えているのも、ほとんど同じものではないか？ まっとうな生活の場所、餓えた時の食料、光熱、服。ホーに腎臓を提供することで、わたしは要するに、自分の家族にふさわしい生活を与えているのだ。

## 三月二十一日

ラーキン通りのマンションでの小パーティに出席。散々説得の末、クレアもやっとくることにして、ニックもついてきた。名無しの青スーツ男が出迎え、コートを預かるとリビングにわれわれを案内した。デボラはピアノの横に立ち、ドリンクを片手に、自分の双子のような女性と話をしていた。近くにキングマン・ホーもいて、裁判官じみた羽振りのよさそうな男たちに囲まれていた。窓辺にはカップルが何組か立っていて、素晴らしい眺望に向かって語りかけ、その向こうの暖炉で暖まっているのは、わたしを検査した医者二人だった。糊の効いた黒服の男がドリンクを運んできて、その数分後、女の子が銀のお盆にオードブルを載せて運んできた。どう見てもニックより一、二歳くらい年上にしか見えない子だが、その物腰はこうしたサービスの訓練を十分に受けた大人のものだった。その子はニッキーにお盆を差し出したが、ニッキーはどうしていいかわからずに戸惑っていた。助けを求めてこっちを見たが、女の子のほうは落ち着き払って、ニッキーにつまみを取るよう勧めた。わたしはうなずいて見せ、自分でも一つ取った。キャビアを山盛りにしたクラッカーだった。おいしかったので、もう一つ取った。

やっとデボラがキングマンと連れ立ってやってきた。デボラは恥じる様子もなく、賞をとった獲物かなにかのように、キングマンにしがみついている。すぐにはこの意味が理解

できなかった。確かにこの男は、先日会ったときより精悍で、顔色もよく、注意力も増したようだったが、その鈍重な身のこなしは、デボラの若々しい活力とは隔世の観があった。デボラは優に二十歳、いや三十歳は年下で、それなのに落ち着かない子馬のように、男の首に鼻をこすりつけている。娘かもしれないと思いあつたが、しかし彼女の示している情愛は、絶対に親子のものではなかった。

キングマンは、初めて会ったときよりずっと暖かく迎えてくれた。必要以上に長いことわたしの手を握り、その機会にまたわたしを検分した。今回はわたしのほうもじろじろと見つめかえし、しばらくして向こうは微笑して、感謝のことばをつぶやきながら、手を放した。クリアに自己紹介すると、優雅に腕をとって離れていった。

「健康を取り戻されたようですね」わたしは言い放った。

「ええ、目覚ましいくらい」とキングマンの後を見送りながらデボラは言った。「生まれ変わったみたい」

「光栄です、と言うべきでしょうかね」

彼女は考え込み、一步わたしに近寄った。ちょっと酔っているようだった。「この何年かで初めて、あの人は男として機能しているのよ」ネックレスをいじり、微笑を浮かべた。「ほとんど忘れてたわ。わかる？ また女として呼ばれるなんて。思いもよらなかった」

「おめでとう」とは言ったものの、実際はそうは思わなかった。彼女よりすでにずっと老いたホーが、完全に自分のものではないからだで機能するなんて、まちがっているように思えた。それ以上に、ふしだらな気がした。自分が変なみっともないやりかたで、セックスの代理人として使われているような気分。こんなことに同意した覚えはない、と何かを言いかけたところで、デボラのそっくりさんが割り込んできた。彼女は自己紹介して、わたしは何気なく、二人が双子かどうか尋ねた。

「あらお上手ね」とデボラ。

「母は若さの秘密を知ってるのよ」ともう一人の女性。彼女はデボラの頬から乱れ髪を一筋払いのけ、耳元に何事かささやいた。デボラはうなずき、女性はその場を辞して去った。

「母？ あの人の、ですか？ でも、あの人はどう見ても三十以上ですよ」

「美しい娘でしょう」デボラは誇らしげに言った。

「あなたはお幾つなんですか？」

彼女は狡猾な笑みを浮かべ、ネックレスに。ちょうどその時、薪の一本が炎をあげ、一瞬室内を照らした。それがデボラののどに突然光をあて、首のつけ根の細く白い傷を浮かび上がらせた。わたしはそれを見つめ、それから彼女の目を見つめた。その目は、わたしを笑っていた。

「ほかはもっとうまく隠されてるのよ」

「恥ずかしいです」

「それには及ばないわ」と彼女は、横を通ったお盆からワインを取り、乾杯するかのように掲げた。「自分自身を創造する以上に偉大な行為はないもの」

その晩遅く、霧が門から忍び込むのを眺めつつ、たまたま視界の片隅でニックを捕らえた。部屋の一番奥で床にすわりこみ、半ばピアノの脚で隠されている。その隣にひざまずいているのは、あの給仕の女の子だった。最初は二人があまりに夢中なので、何かゲームをしているのかと思ったが、少し近くににじり寄ると、二人がまったくちがったことをしているのがわかった。ニックはズボンのすそをまくりあげ、女の子の方は息子の義肢を指でなぞっているのだ。じりじりと、指が脚をさかのぼり、周りをまわったかと思えば今度は叩き、まるではかり知れぬ価値の財宝を掘り出すかのように、慈しんでいる。ニックは完全に恍惚となり、娘の方が義肢に魅了されているのと同様に、娘の関心に魅了されているかのような感じだった。ズボンのまくったすそにたどりつくると、娘は手を止めて目をあげ、息子がさらにズボンをまくるのを待った。少し、また少しずつ、脚全体がむきだしてなってきた。表情を見ると、ニックは実際に娘の愛撫を感じているようだった。まるで娘の探索の濃密さが、幻肢のまどろんでいた受容体と呼び覚ましたかのような感じだ。部屋のこちらがわでも感じられるほどの張り詰めた空気があった。わたしはどうすべきか引き裂かれる思いだった。父親としての責任から言えば、割り込んで止めるべきだが、一方で今止めれば、ニックの障害の烙印をさらに強めることになるかもしれない。この選択は、大人の給仕の一人が娘を見つけ、怒号とともに部屋から引きずりだしたことで、無意味になってしまった。魔法が解け、ニックは急に自分を取り戻し、あわててズボンのすそをいじり出した。わたしは駆け寄って息子を立ち上げさせ、目撃したことについては何も言わなかった。そろそろ帰る時間だと言うと、ニックはキョロキョロと、おそらくは娘を探して部屋を見回し、同意した。肩に腕を置いたが、息子はそれを払いのけ、自力で部屋を出た。

帰りの車の中で息子は寝てしまったが、親としては決して安心できないものだ。あの一件についてクリアに話すのは後にしようと決め、間をもたせるため、キングマン・ホーをどう思うか尋ねた。二人は一時間近くも話し込んでいたのだ。

「どこかすごくおかしいわ、あの人。十分くらい話ただけで、もう慰めなくなったもの。もう完璧に切れてる感じ。思ってたのとちがうわ」

「苦しみにはそれなりの魅惑があるんだよ。ホーは何年もあれこれ病気だったんだからな」

「あの人、自分の話をする時も、なんだか他人の話をしてるみたいなの。何だったか忘

れたけど、何かの話が出たとき、こう思ったもの。この人は鏡の世界に住んでるんだって。もろい、遠くの鏡の世界に」

「傲慢で金持ちなんだよ。浮き世離れしてるのもその一部だろう」

「自分を軽蔑してるって言ってたわ。なぜってきいたら、死ぬだけの勇気を持ってないから、だって」

「ただのポーズだよ。クリア、ただのカクテル・パーティの雑談だろうに」

「なんだか怖い」と彼女は寒さに震え、ニックを引き寄せた。「あんな人に生活を依存してるなんて」

妻がこんなふうに影響されて、腹だたしかった。「おまえ、そりゃ逆だよ。切り札を持ってるのはぼくだ。キングマン・ホーのほうがぼくに依存してるんだ」

## 五月三日

先月は耳の中の小骨片だった。一週間後、右目。自分の適応ぶりは驚くほどだ。だれかが左耳にささやきかけたりしない限り、昔並によく聞こえる。視界も、ちょっと平板なのを除けば、まるで変わらない。

時々ホーに出くわす。礼儀正しく、ほとんど暖かいくらいだが、皮肉なことに、こんどはわたしのほうが距離をおいている。話すことなどほとんどないし、たまにあっても口に出すとつっけんどんに聞こえる。要は、あいつが嫌いなのだ。甘やかされたガキのように次から次へと取るだけ取って、かわりに何をくれる？ 金だ。冷たい見返り。

それでいて、出会うとホーに認められたという印を探してしまう。気がつくとき、よくホーの右目を見つめている。緑の筋の入った茶色の目、わたしの目だ。ホーの顔についていると、石のように冷淡に見えるが、しかし時々、無視し難いほどに見慣れた輝きを放つ。おまえの考えなどお見通しだ、とでも言うかのように。嘘は通用しないぞ。とでも言いたげに。

時々、あの目をえぐり出してやりたくなる。

## 五月五日

トニーから電話……また断われたという。別にかまわない、と言ってやる。考えてみれば、思いだせる限り市場のくびきから解放された気分になったのは、これが初めてだ。

## 五月十七日

この一件には何やらエロチックな部分がある。こう書くのは恥ずかしい。倒錯じみて聞こえるではないか。だが、連中がわたしのからだの一部を取り去るたびに、わたしの精力は高まるのだ。一週間半前に、足指が取られ、以来ずっと勃起しっぱなしで、毎晩のように夢精する。これまでわたしとセックスで対等に張り合ってきたクレアも、この新たな欲望には太刀打ちできない。まるで無意識が、生き延びられるか不安になってパニックを起こし、絶滅してしまう前に遺伝子プールを後世に残そうという希望を持って、精力の高まりを引き起こしているかのようだ。

ときどく、自分が新たな原始的な状態に近づいている気がする。爆発的な創造性と充足の状態。言語や抽象思考に対する衝動は遠ざかり、そもそも何だって物を書きだしたりしたのだろう、と不思議に思うほどだ。肉体の言語に比べれば、言葉の何と無力なことか。

クレアは、わたしが自分を理解する以上にわたしを理解してくれている。彼女はわたしがちょっと狂ってると思っている。

## 五月二十三日

腕をよこせと言う。右腕。肩から指先まで。こわい。

## 五月三十一日

この一週間が、まるで一年のように思える。捕縛の恐怖が常につきまとう。青スーツのボディガードが現われ、愛想よくわたしを締め上げ、連れ戻す。あるいはデボラがやってきて、何やら新しい説得技法を駆使する。ちょっとした姿勢の変化、声の躍動、拒絶しがたい申し出をやんわりと包んで差し出す。あるいはキングマン自ら、言葉少ない、わが逃走の煽動者。今や腕もなく、引き金を引く指もなく、その狂った命令にわたしを踊らせるための手もない。そのかれがやってきて、わたしの腕を求めて懇願する。

やらせておけ。かれの富と権力に対するわたしの軽蔑を感じさせてやるがいい。あいつは人間じゃない。人間なら、あいつのしたような真似は絶対しない。

何よりもこわいのが、自分自身の迷いだ。連中に、もうたくさんだと言ってすべてに終止符を打つことができる。あるいは、腕をくれてやって済ませてしまうことも。なぜ逃げる必要がある？

富と成功を捨てるのは楽じゃない。キングマンが死んだら？ 圧政者キングマン、残酷王キングマン。わがパトロン。かれが死んだらどうなる？



## 六月三日

風が峡谷に吹き荒れ、砂で大地をすり減らす。砂漠の太陽の熱は信じられないほどだ。モーターの部屋に隠れてひたすら待つ。連中はまちがいなくわたしの居場所を知っている。なぜ追ってこないのだろう。

## 六月五日

ここにいると、自分の重要性など本当につまらないものに思えてくる。砂漠は、プライドだのごまかしだのにこだわるには、あまりに大きすぎ、あまりにむきだして生々しい。ホーに対する自分の憎しみは、己れの未熟さの反映に毛の生えたものでしかない。息子が新しい脚を欲しがっても軽蔑できないのと同じく、ホーがわたしの腕を欲しがったからといって軽蔑することはできない。崩壊と腐敗に対抗しようとするのは、人間の本能なのだ。

だがそれ以上にわかってきたのが、キングマン・ホーとわたしとの結びつきだ。わたしの与える皮の一枚ごと、器官一つごとに、ホーはわたしとより強固に結ばれる。ホーはわたしの創造物。ホーから逃げるのは、自分自身から逃げるに等しい。

## 六月二十九日

不在は、存在より強力だ。想像から、喪失と渴望から形を生み出す。腕はもう何週間も前になくなったが、目を閉じればまだそこにある。虚空に内科を感じる。痛みを、熱を、動きを。幻想の世界で鉛筆を握り、コーヒーカップを持ち、クレアの背中を撫で、見えない手で妻の肌の肌理(きめ)を感じる。見えないが、何かは存在する。わたしにはわかる。記憶の領域では捕らえきれない何かだ。

その腕がキングマンの横にぶら下がっているのを想像する。かれの神経や筋肉に接続され、かれの命令に従って動きながらも、意識には左右されないずっと深いプログラムを保っているのだ。わたしのマニエリスムをもって宙をさまよう手を、わたしの筆跡で書く手を、わたしの愛撫でデボラの背中をなでる手を想い描く。腕は幻肢となり、そしてこのわたしは、幻の作家。わたしがキングマンに奉仕する一方で、かれもわたしに奉仕するのだ。

## 七月二日

今では、どうしていいかわからないほどの金を手元にある。クレアは仕事をやめ、ニックは遅れを取り戻すために家庭教師をつけている。わたしは書くよりも読むか、さもなければビール片手にアームチェアにすわり、湾がその色を変えるのを眺める。怠慢だという気はしない。治るのがわたしの仕事。

## 七月十五日

こうした手術からの回復ぶりは目覚ましい。ほんの数日前、腰から骨を一本取ったが、すでになんわり自由に動き回れる。何ヵ月か前の皮膚採取を除けば、まったく何の問題も起きていない。キングマンの方は、そうはいかないようだ。肉体組織はマッチしたものの、向こうはステップごとにえらい苦勞をしているらしい。たぶん高齡のせいもあるのだろう、それにデボラの話では、わたしの組織を排除しないように投与している免疫抑制剤が、かれの治癒の障害になっているそうだ。あれほど苦しんでいる人を正視するのはつらい。憐れだし、時になぜかれがそこまでこだわるのか不思議に思う。本当に死を恐れているのだろうか、それとも寿命を引き延ばしたい、何か別の理由があるのだろうか。たぶん、不死はそれ自体で動機となり得るのかもしれない。

## 七月十八日

昨夜、死んだような深い眠りから醒め、こともあろうにキングマンは夕食に何を喰ったろうかと思案する。単に献立だけでなく、そんなふうに食べたのか、だれと食べたのかも含めてだ。生き生きとした華やいだ食事だったのか、それとも退屈で陰気な食事だったのか。楽しかったのか、あるいはあの高齡では苦役だったのか。一人だったのか、相手がいいたのか。スーツとネクタイ姿だったのか、もっとカジュアルな服装だったのか。何を言ったのか。口に出さずに何を考えただろうか。

再び寝つくまでに一時間かかって、朝には目を醒ますのにコーヒーが二杯も必要だった。二杯目を注ぎながら、キングマンがコーヒーを飲むのを見たことがあったか思いだそうとしてみた。ブラックか、ミルク入りか？ 一杯か、それとも二杯？

## 七月二十一日

なぜ連絡がないのだろう。一言もないまま、これで一週間近くだ。何か悪いことがあったに決まってる。恐ろしい考えが二つ頭に浮かぶ。キングマンはついに病気が進み過ぎて、わたしを必要としなくなったのだ。これもひどいが、次のはもっとひどい。

新しい提供者が見つかったのだ。

## 七月二十四日

やっと。今朝早く、まだ外が真っ暗だというのに、電話が鳴った。それが夢のきっかけとなって、わたしはなくなった腕をクレアの方に伸ばした。妻は何かをつぶやいて、わたしの肩の空隙にうずくまった。わたしは受話器を取った。

かれの声はせっぱつまった調子で、いつもの洗練と自制を欠いていた。すぐに会いたい、どうしてもマンションに來いと言う。わたしは同意したが、いったい何事かと尋ねたときには、すでに電話は切られていた。

外では霧が地表にまで達し、まるで地面から湧き上がったかのように濃くたれこめていた。キングマンのマンションは通りからはほとんど見えなくて、高いギリシャ式の列柱は雲にまで達しているかのようなようだった。夜警がわたしを入れてくれ、ホー氏がお待ちかねだと言う。わたしは顔と髪から湿気をぬぐい去りエレベータに入った。八階でおりようとしたとたん、キングマンがいきなり現われ、わたしを中に押し戻した。ゲートを、下りボタンを押して、それからエレベータを階の途中で止めた。

血走った目つきでわたしをにらみ、かれは言った。「記録だ。記録はどこにある？」

これまで記録の話がでたかどうか、一生懸命思いだそうとした。何かわけのわかるものを。だが、ホーはわたしの返事を待たなかった。

「やつらが何をしとるのか、どうしても知りたい。全部だ。正直そうな顔はしとるが、ふん、みんなみかけの正直さとは大違いじゃ。外と連絡を取ろうとはした。こりゃ何かの冗談だ、替え玉で何やら仕組んどるんじゃろが……」

「何の話だかさっぱり……」

「なんで夜にはクスリを四つ飲ませるのに、朝には三つなんじゃ？ 答えられるものなら、答えてみる」

「四つ？ 三つ？」

「ただの偽薬、そうじゃろ。まがいものだ」とホーは満足げににやりとしたが、その表情はすぐに消えた。「あれはほかの連中の探知の届かない、別の回線でやりとりしとる。連

中にはわからんが、わしらにはわかる。なあ、上位の偉いさんは誰なんだ？ 糸を引いとるのはだれだ？」

ホーの声は、もっと切迫してきた。「助けてくれ、頼む。どうすりゃいいんだ。連中の話が聞こえる。みんなわしの背中で話しとるが、何を言っとるかはちゃんとお見通しなんじゃ。でもわしはあきらめん。

並の人間相手なら、やつらもこんな真似はせんで。わしには見えるし、わしはそれを越えとる。わしが止まれと念じれば、あれは止まる。わかるか？ わしの義務じゃ」

男の声はかんだかく、態度もせっぱつまっていた。憑かれたように歩き回り、しかし一方で、どうやらわたしに触れまいと注意を払っているようだ。突然立ち止まる。

「腐敗の臭いがわかるか？ どんな強い人間でも、永遠には辛抱できん。答えが欲しい。助けてくれ」

男は明らかに正気を失っており、こうして狭い場所にいると、それが悪化するのではないかと心配だった。わたしはエレベータを動かすスイッチを見つめつつ、じりじりと操作パネルの方へにじりよったが、接近したところで、ホーが間に割り込んだ。わたしをにらみつつ、パネルによりかかり、両足でしっかり床を踏みしめて立った。祈りが警告のように両手をあわせ、目を閉じる。

初めてわたしは男をよく観察することができた。髪は乱れ、顔は死にぼくろと赤斑だらけ。皮膚は小さな血管が浮いており、破裂しているものも多い。首の片側に、シャツのえりからのぞいているのは、最近行なわれた皮膚移植の痕だった。腫れて紫になり、てっぺんからは黄色の液体がジクジクとにじんでいる。わたしは逃げ出したい衝動にかられた（もちろん不可能だった）が、同時に慰めてやりたいと思った。ひどい苦痛で苦しんでいるらしく、いまや逃げ場のない状態に自分を追い込んでしまったのだ。しかし、助けてやろうとして一步踏み出すと、男は目を開けてうなってみせた。落ち着かせようと言葉をかけたが、ホーは笑って、声で自分を支配しようとしていると言っただけだった。

「あんたの考えなんぞ、見え見えじゃ。その太い声でわしをだまそうとしたって、そうはいかん。わからんのか、わしはあんたの反映なんじゃ。冗談抜きで」

男は歌をくちずさみだした。自作のヒステリックな曲だ。突然エレベータが動き出した。ホーは狂ったようにキョロキョロと見回して、操作パネルを叩いた。無駄だった。止めようもなく箱は上昇し、八階で待ち構えていた青スーツの男がゲートを開けた。その隣には、スリッパとバスローブ姿で、デボラが立っていた。彼女の姿を見て、キングマンは憑き物が落ちたようになり、隅っこに退いて震えるようにため息をつき、エレベータの壁に倒れかかった。

みんなでキングマンを部屋に運び込み、二十分後にデボラが戻ってきて、もう大丈夫だ

と告げた。

「夫の行動についてはお詫びしませんとね」と彼女の差し出したドリンクを、わたしはありがたく受け取った。「薬の副作用がちょっとひどいもので」

「わたしとご亭主と、どちらのほうが悪えてたかわかりませんね」

「夫の方でしょう」彼女はドリンクを持って窓辺に立った。「最近はその人、自分がだれかもわからなくなってるから」

「そりゃそうですね」

デボラは身をこわばらせた。「皮肉でおっしゃってるのはわかります。でも、確かにその通りね」彼女はため息をついた。「この程度の変化で済んでいるほうが不思議よね」

何と答えていいかわからず、彼女といっしょに窓の外を眺めた。窓に映るわれわれの顔が、霧の中に浮かんでいるように見えた。

「本を書き上げてから、それを捨ててしまったことってあるかしら？ 自分の書くつもりだったものと、書きたかったものとのちがってたので破棄した、なんてことは？」

「本ってのは、書いてるうちに変わるもんです。それに、書き上げた後も。いつだって何か別の、何か愛しいものになる可能性があるんです」

「自分の書いたものに惚れたりする？」

「ええ、まあ。いつも荒っぽいつきあいですが」

「でも、うまくいなくなったら、事がまずくなったら、どうすればいいかはわかるものね」

わたしは肩をすくめた。その瞬間、彼女が何を言おうとしているのか理解できた。「いつの、キングマンも死にます。そうすれば、あなたもわかるでしょう」

「どう行動するかはわかっているの」とデボラは静かにいった。すでにその計画をたててあるとでも言うように。それをわたしに告げるのが得意なようだった。「恥ずべきことかしらね」

「恥じるにはまだ朝早すぎる」

「そうね」彼女はネックレスに触れてこちらを向いた。「わたしを魅力的だと思う？」

わたしはドリンクを飲んだ。デボラはわたしを見つめて待っていた。

長い間の後で、わたしはやっと言った。「答えはわかっているでしょう。さもなきやきいたりしないはずだ」

「虚栄心は災いのもとね」彼女は自嘲気味に笑い声をあげた。

わたしは自分自身を見た。欠けた腕、欠けた足指、その他。

「それでもありませんよ」

## 七月二十八日

今夜、ベッドでお話を読んでやった後で、ニックが腕にしがみついて放してくれなかった。数分そのままにさせてから、放してくれと頼んだが、息子はいっそう強くしがみついてきた。

「ニッキー、もう寝る時間だよ」

「いてくれなきゃだ。放してあげない」

わたしは折れた。「じゃああと三分。そしたら寝るんだぞ」

「パパが数えて」

三分が過ぎ、時間になったが、ニッキーはまだ放してくれなかった。

「手を置いてっくれなきゃダメ」

「おいおい、もう一つしか残ってないんだ」とわたしは冗談めかして言ったが、息子の所有欲にはホロリとさせられた。

「じゃあ、これはあげちゃわないって約束して」

「お父さんはすぐ隣にいるって。どこにも行かないよ」

「約束」

「おまえのお父さんじゃないか。いつまでもおまえのものだよ」とわたしは、ゆっくり腕を引き離れた。「愛してるよ。約束する」

## 七月三十日

クレアとわたしははだかでベッドに横たわり、妻はわたしの背中をいじっている。脊椎の一本ごとに、骨と筋肉の輪郭をなぞる。その感触を楽しんではいるが、一方で在庫調査をされているような気がしてならない。背骨の一番下の、尻の間に消える直前のちょっとした突起にたどりついたところで、妻は手を止める。続けるようにうながす音をたてたが、クレアの手は止まったままだ。そしていきなり口を開く。

「子供の頃、近所に男の子がいたわ。ジョー・なんとか。あたしより年上で、すごい反っ歯で。いつもあたしを角に追い詰めて、からだをこすりつけてくんの。後ろから。もしすばやく向きを変えないと、正面から。最悪だった」

「今ごろなんだってそんなことを」

「ジョー、なんだっけ」上の空で妻は、手を止めたところを再び触れた。「その子、しっぽがあったの」

「え？」

「小さなしっぽよ。わかったのは後になってからだったけど、それを切り取る手術をしてから。それを聞いた時は嬉しかった」

「なぜ嬉しい？」

「なんか公平な気がしたの。あたしをあんなつらい目にあわせたんだから、あいつだって苦しむべきだって。あいつが苦しんだって、スツとしたわけ」

「クレア、こりゃ何かのメッセージなのか？ たとえ話とか？」

「ほんとの話よ」

「ほんとして、何が？」

妻はわたしのわき腹の傷を、じっくり時間をかけて撫でた。「ニッキーが脚を切断したりしなかったら、事態はちがってたかしらね。あたしはまだ働いてただろうし、あなたはまだ上手いかななくて怒ってばっかして。なんだか釣合が取れてるみたいでしょう。この一件って、妙な理屈が作用してるのよ」

「金が手に入っただろう」

「それはありがたいと思ってる。でもそれ以外の部分よ」

「きょうは頭が鈍ってるんだ。クレア、はっきり言ってくれ」

「わかんない」と妻は、わたしの背骨の下端の突起に触れ、しかるべき説明をこすりだそうとでもするかのように、それをなで回す。「自尊心、みたいなこと、かな。物事の節度をわきまえるとかな。最後の一線を守るとかな、そんなこと。」

「マツ、あなたの好きな時にやめていいのよ。これはお金のためじゃないし、あたしのためでもニッキーのためでもないわ。自分でもわかってるでしょう」

「薄々は」

「止めてくれる？」

「すべてが済んだら。ああ、約束する」

## 八月八日

顔は包帯で巻かれ、口と鼻の孔だけが外気にさらされている。時々、自分の孔以外は何も残らないまでに切除されたような気がする。ありがたいことに、大量に薬を射ってくれている。

直近の手術は難物で、それが感染症でさらに悪化した。この文章は口述録音器で書いている。だれか（たぶんクレア）が枕元に置いていってくれたのだ。使っている薬の副作用で、キングマンの顔がいきなり懐死を起こしたのだ。額からあご、耳から耳までの皮膚が、まとめて一挙に腐れ落ちたのだ。緊急事態だと言って呼ばれ、キングマンの状態を、その目に浮かんだ苦痛と恐怖を見たとき、わたしは自分が断わらないのを知った。そこで

連中はわたしを収容し、顔を取り去ったのだ。

目が覆われているのはありがたい。あまり急いで見たくないものもあるのだ。クレアの悲嘆の表情、ニックの非難とおびえ。声を聞いただけで、それは十分に伝わってくる。

トニーが今日電話してきて、だれかが受話器を持ってきている間、ある大出版社からの引き合いのことを興奮してしゃべりまくってくれた。金額はたいしたものではないが、オプション条項がついていて、一年以内に次の本を書き上げれば大金が支払われるという。ここ数ヶ月でいるんなことが起こり過ぎていたから、出版社の買いたがっている本の題名を、トニーに教えてもらわなければならなかった。トニーは笑って教えてくれた。そして、たった一年で次を書けるとするか、ときいてきた。こんどはわたしが笑う番だった。かろうじて唇からもれた、弱々しい音にすぎなかったが。

「もう完成間近だよ」

「例の日記か？」とトニー。ずっと昔にこの話をしたのだろう。「そのまま本になるかなあ」

「それじゃない。例の男なんだ。こいつはまさに創造そのものなんだよ。やれやれ、散々苦労した挙げ句。成功を祈り求めて、入り口を必死で探し回って、気がついたら、とっくにその入り口をくぐってたのに気がつくんだものな」

だれかが手を握っている。クレア、だと思うが、デボラかもしれない。大量の鎮静剤で、感覚は鈍いなんてもんじゃない。

キングマンが脳卒中を起こした。重症で、すでに脳死状態だという。この報せは、夢のような、どこか親しげで強迫観念じみた雰囲気を持っているが、しかしその重みと感触は現実のものだ。

キングマンの脳が死んだ。

芸術作品は、生命の息吹きを受けねばならない。

なすべきことはただ一つ。



## 訳者の解説

山形浩生

本書はマイケル・ブラムラインの処女短編集である。

作者についてはあまり情報がない。本業外科医、サンフランシスコ在住。一九八七年には処女長編「山を動かす」を発表、また一九九三年には第二長編「X、Y」が刊行されている。

かれの小説は好き嫌いが極端にわかれる。処女作で、本書にも収録されている短編「器官切除」はイギリスのSF雑誌インターゾーンに掲載されたが、「何の必然性もないグロテスクな生体解剖！」と罵倒が殺到する一方で、後にインターゾーンの傑作選に収録されるほどの高い評価も受けている。

また、「男の恩寵を捨てて」はそのインターゾーンに掲載を拒否され、後にセミオテキストにまわされた。セミオテキストというのは頭でっかちな現代思想雑誌なので、いつもは「言論の自由」と称していかがわしいグロテスクな代物を好んで載せたがるのだが、この作品に関しては「悪趣味が過ぎる」と掲載を見合わせる声もあったと言う。

このような評価の段差が生じるのは、かれの「人間」という物体の扱いのせいだ。あるいは、「人体」という物体の扱いと言うべきだろうか。多くの小説は、そして多くの作家・読者は、肉体をまるで存在しないかのように扱うか、あるいはそこに過度の意味やこだわりをはりつけようとする。たとえば村上春樹の小説は前者の例だし、ポルノや、大岡昇平の「野火」などのいわゆる人肉食小説などは、後者の例だと考えればいい。無視するにしても、あるいはその裏返しとして極端に意識してみせるにしても（スプラッターはその典型だ）そこにはある妄想の壁が強固に立ちはだかっているのだ。

頭では、人体が物理的なモノに過ぎないとわかっている、一般人たるわれわれは、なかなか肉体を取り巻く妄想の壁を突破できない。突破すべきかどうか、実はそんなに定かではない。妄想と言うから悪いことのような感じがするが、自分のからだに対して思い入れを抱くのは当然のこと。それが本当に間直しを迫られるようになったのは、最近になって人間が小賢しくも臓器移植なんぞをするようになり、人体を純粹にモノと考えるべ

き現実的な理由ができたからだ。脳死に関する議論は、すべてこの妄想の是非をめぐる議論だ。もちろん妄想に是非もありはしないのだが。

しかし、ブラムラインの小説からは、そうした真綿のような妄想の壁がすっぱり抜け落ちている。「器官切除」に描かれた麻酔なしの臓器摘出には、人道的な問いかけやモラルの主張など皆無（途中にはさまっている「人類への偉大な貢献がどうのこうの」という部分は、こともあろうに悪趣味な冗談だったりする）。マグロの解体にも等しい、ひたすら技術的なプロセスの描写。それどころか、ガキが電卓や時計をばらして面白がっているような、喜々とした雰囲気すら感じられる。

これを受け入れ難いと感じる人はいるだろうし、そういう人はブラムラインの小説をグロテスクで悪趣味なスプラッター小説だと感じるだろう。一方で、そのスプラッター愛好者たちの多くも首をかしげるはずだ。スプラッターのツボは、解剖学的な細部にあるのではないからだ（スプラッターはむしろ、肉体を取り巻く妄想を利用することで成立しているジャンルである）。しかし、そうした妄想の不在（「否定」ではない）に爽快感を覚える人は、この本にも爽やかな新しさを感じるだろう。たまに医者を知り合いと話すと、死がむやみと日常茶飯のこととして語られるので、ときにギョッとさせられることがある。「だって、脳死した人って、もう人間じゃないもの。机や椅子と同じ、ただのモノだもの」と何の気負いも「べき」論もなくあっさり言っただけのけられる気軽さを、ぼくはいつもうらやましいと思っていたし、いまもそう思う（繰り返すが、それが正しいとか言うのではない）。ブラムラインの小説の多くは、そうした軽やかな驚きを与えてくれる。目の前で人間がただの物体に豹変する驚きが、かれの小説には随所に登場する。

もちろんこれは、かれの本業たる医者稼業から持ち込まれた視点だろう。だが、日本でも森鷗外やら斎藤茂吉やら北杜夫やら、医者副業作家の伝統はそれなりにあるのに、こうした視点を取り込んだ小説にはお目にかかったことがない。ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアは人類に対する冷酷で非情な作風で知られるが、ブラムラインに比べると、かれ1の小説もむしろある種の感傷を中心にして成立しているのがわかる。また、サイバーパンクSFの一部は人間中心主義を脱したと評価されるが、そこに働いているのは既述の妄想の「不在」ではなく「否定」である。ちなみに「溺れてしまえ」は、立派なサイバーパンクだが、その意味で既存のサイバーパンクより徹底していると言えそうだ。

おそらくJ・G・バラードだけが、今のブラムラインに近い地点にいる。ブラムラインもそれを意識しているらしく、「男の恩寵を捨てて」はバラード以上にバラード的な小説になりおおせている。しかし、居場所は近くとも、両者の方向性は若干異なっている。バラードが執拗に「向こう」に行こうとするのに対し、ブラムラインは比較的気軽に「こっち」と「向こう」を行き来しているのではないか。「ラットの脳」「そのもの」「華麗なる

魅惑」などで扱われている死や愛や性などのテーマは、バラードなら見向きもするまい。

しかし人体をめぐる妄想からぬけだしたところでブラムラインの語る死や愛や性は、これまでに読まれたことのない不穏さと真摯さと、そして現代性を持っている。かれは(まだ)見事なストーリーテラーではない。その点で、かれのこれまでの長編にはつらい部分がある。しかし、いずれかれは、これまでの生ぬるい「人間」像をはじきとばすような超絶長編小説をものすだろう。その時ブラムラインは、バラードを(ついに!)越えるかもしれない。その萌芽はすでに本書の中に見出させる、はずだ。

- 「ラットの脳」*Interzone* #16 (1986年 夏号)
- 「器官切除」*Interzone* #7 (1984年 春号)
- 「ドミノ・マスター」*Omni* (1988年 6月号)
- 「溺れてしまえ」*Mississippi Review* 47/48 合併号 (1988)
- 「C.W. とのインタビュー」*New Pathways* #10 (1988年 3月)
- 「男の恩寵を捨てて」*SEMIOTEXT(e)* #14 (1990年)
- 「家事」本書初出
- 「華麗なる魅惑」本書初出
- 「暖かさの約束」*Twilight Zone* (1988年 3月号)
- 「ウェットスーツ」本書初出
- 「そのもの」*FULL SPECTRUM* (1988年)
- 「ベストセラー」*Fantasy & Science Fiction* (1990年 1月号)

本書は Michael Blumlein *The Brain of Rats* (Scream/Press, Los Angeles, 1990) 全訳である。訳出にあたっては、松原永子氏らによる下訳をもとに、Macintosh PowerBook 170+Katana4+ クラリスワークス 1.0 で修正を行なっている。辞書は「リーダーズ新英和辞典」(松田徳一郎監修、研究社、1984)、「新英和大辞典 第5版」(小稲義男他編、研究社、1980)、「解剖学カラーアトラス 第2版」(J. W. Rohen/横地千仞、医学書院、1990)を主に使用している。訳者の質問に快く答えてくれた作者に感謝する。また、「ブラムラインとゆースゲー作家がいる」という話を最初に教えてくれた、柳下毅一郎氏にも感謝する。ありがとう。

本書の編集は、藤波健氏が担当された。

一九九四年二月  
ボストンにて